

聞ける・話せる
MBA 留学試験対策

ユキーナ・富塚・サントス

Chapter1 聞けるようになろう	4
1 イントロダクション.....	4
1.1 聞けない日本人.....	4
1.2 スクールビジット.....	5
1.3 日本の英語教育.....	6
1.4 英語の聞きにくさ.....	7
2 コミュニケーションの手段としての英語.....	10
2.1 ある日の上司との会話.....	10
2.2 エクスポージャー.....	13
2.3 酒とボールと英語の日々.....	15
3 実践編.....	17
3.1 リスニングの基本的姿勢.....	17
3.1.1 では何をすればいいのか.....	17
3.1.2 えっと思う最短学習法.....	18
3.1.3 まずは、エクスポージャー.....	20
3.1.4 誰もが陥るまちがい.....	21
3.1.5 禁忌（タブー）.....	24
3.1.6 沈黙はだめなりーもう一つの間違ったリスニング勉強方法ー.....	24
3.1.7 愛しているといってくれ.....	26
3.1.8 アジダス.....	27
3.1.9 エイエンノカガヤキ.....	28
3.1.10 リスニングと坂上がり.....	30
3.2 リスニングのトレーニング.....	32
3.2.1 シャドウイング.....	32
3.2.2 教材を使ったリスニング.....	34
3.2.3 映画の勉強の仕方.....	55
3.2.4 教材を使わないリスニング.....	62
3.3 プラスαのテクニック.....	64
3.3.1 会話学校の選び方.....	64
3.3.2 本当に三ヶ月が可能か？.....	66
3.3.3 真剣に集中するために、半身浴.....	67
3.3.4 試験を受けよう.....	69
3.3.5 バテレンとハゲタカ外資.....	70
3.3.6 留学の効用.....	72
Chapter2 話せるようになろう	74
4 はじめに.....	74
4.1 話せない日本人.....	74
4.1.1 お粗末な親善大使.....	74
4.1.2 帰国子女の特権.....	76
4.2 話せることの必要性.....	79

4.2.1	同時通訳の危機.....	79
4.2.2	今、最高値を更新するであろう人材.....	80
4.2.3	なぜ英語をキチンと話す専門家が生まれないのか.....	82
5	実践編.....	84
5.1	話すときの心構え.....	84
5.1.1	日本人が英語を話すとき.....	84
5.1.2	コツその1 ゆっくり話そう.....	84
5.1.3	コツその2 覚えた単語は使わない.....	84
5.1.4	コツその3 お腹の底から声を出そう.....	87
5.2	話すためのトレーニング.....	88
5.2.1	トレーニング基礎編.....	88
5.2.2	トレーニング応用編.....	106
5.3	賢いネイティブ.....	107

Chapter1 聞けるようになろう

1 イントロダクション

1.1 聞けない日本人

先ごろ、お世話になっている方から、英語勉強方法についての相談を受けた。

お子さんの進路その他も関連して、いろいろと悩んでいるとのことであった。

ヨーロッパとアメリカでビジネスを勉強し、いまや外資系金融機関につとめる私ではあるが、その昔、留学を決意した際に、英語には本当に苦労した。

聞けば、お子さんはリスニングとスピーキング（会話）に非常な苦手意識を持っているということである。

ここまで聞いてああ、なるほどであった。まさに、私が苦手とし、散々苦労して取り組んだ分野である。

多くの人からどうすれば英語ができるようになるか、なにかいい上達方法はないかと聞かれるが、そのほとんどのつまづきは、おそらく、やはりリスニングとスピーキングにあると言っても過言ではない。

この二つに関しては、いろいろ自分で試行錯誤も行き、いろいろな人のアドバイスや本も読んだ。そしてこの英語力というのは、留学した最中も、今、仕事で英語を使う身になった際も、終始意識してきた問題である。

私がまだ、語学をそれほど苦手とせず（もともと語学は得意な方である）、ちょっと頑張ればトフルの目標点くらい達成するだろうとタカをくくっていた頃には、リスニング能力を高めるコツを真剣に考えたことは無かった。

巷の書店で手にする本も、おおむね自分の信じることと同じアプローチが書かれていたので、特別な手段が必要だとは思わなかったのである。

今、留学を目指す人、英語をなりわいとしようとしている人、語学で老化防止を図ろうとしている人などなどから要請を受け、この自分の雑多な勉強方法を今一度整理して見る必要があるだろうと感じている。

もちろん私自身の英語はいまだ完璧とはほど遠いものであるし、自分自身も英語力をもっとアップしなければいけないなあとは日々痛切に感じている次第である。

こんな立場にありながら、アドバイスさせていただくのは甚だ申し訳ないのだが、ハーフでも帰国子女でもなんでもない、一介の日本人がどうやって英語を聞けるようになったのか、おそらく、ごくごく普通の日本人で同じようにリスニング力を高めたいと思っている人のわずかな助けにでもなれば・・・と思い、お話させていただく次第である。

一体何をどうやって勉強したらいいのやら・・・と悩む方、いろいろ試したけど、一向に聞けるようにならないとスランプに陥る方、ああ、明日トフルのテストがあるのに・・・と青くなっている方、理由はともかくリスニングで悩む方々の気分転換にでもなれば幸いである。

1.2 スクールビジット

私が留学を決意し、アメリカ本土に初めて渡ったのは、2002年の4月であった。

不動産というバックグラウンドではあるけれども、いろいろ訳あってホテル経営のマスターコースがある総合大学を目指すことにしたのである。

はなはだ余談だが、留学を決めているのなら、この出願校はよくよく考えたほうがいい。ランキングやネームバリューだけでハッターリが利くのは、アメリカ本国か世界で異端の経済大国、日本くらいなものだろう。私の場合は、結果として自分のやりたい内容を効率よくとることができた、という意味でこれ以上ないほどのカスタマイズができたプログラムだったと思っている。

ブログにも書いているが、ニューヨーク州イサカという街にあるエスラー大学は「筑波研究学園都市が軽井沢にある」かのような立地条件であるので、4月といえど寒くて凍えそうで、雪の中をすべらないように歩くのにとっても気を使った。

留学を決意し、勉強しだしたはいいが、自腹を切って約二年間生活する場所である、「これは住めない」と思うところでは絶対ダメだと悟っていたので、事前に下見をすることにしたのである。

何人も卒業生の人にアポを取り、様子を聞いた場所だったので、以外にも初めて来たという違和感は無かった。が、しかし、この予想外の凍るような寒さよりも、予想通りのホンッとローカルなシチュエーションよりも、私を愕然とさせたのは自分の英語力のギャップであった。

最初にアポイントをとった、入学科の学部長との面接、飛行機とバスの中でさんざん自分の話すことを練習したにもかかわらず、まったくと言っていいほどたちうちできなかったのである。

自分が暗記しているはずの言葉を、こんなにもきちんと発音しているのに理解されない、相手からはたびたび聞き返される、こちらが話せば話すほど、相手は眉間にしわを寄せ、足を組みなおし、視線を落とし、こちらの英語力を疑っているかのようである。

こんなはずではない、こんなはずではない、あせればあせるほど、自分の口からは言葉がでてこなくなり、気まずい沈黙が流れる。

用意していた質問のうち、トフルの点数について聞いたとき、待ってましたとばかりに相手がまくし立てる・・・とにかく、トフルの最低250点は何が何でもクリアしてもらわないといけない。これが最低線だ。なぜならば、これもクリアできない生徒では、仮に入学できたとしても授業にはとてもついていけないだろうから・・・生徒にとっても高い授業料を払って、わかりもしない講義を受け、学校にとっても負担になる・・・こんな意味の無いことは、もう止めるような方針にしたんだ・・・

あたかも私の英語力を攻め立てているかのようである。

これは、かなり分が悪い、もっとも今は日本の明け方、日本時間で一番眠い時間帯である・・・ああ・・・こんな頭が働かない時間にミーティングをセッティングするんじゃないか・・・これでは、どんどん墓穴を掘るばかり・・・

ほかに質問は？という彼の問いかけに、いえ、何もありませんと首を横に振るのが精一杯の私なのであった・・・

1.3 日本の英語教育

この後、すぐホテルスクールのトイレに立てこもり大泣きした。

これまで、一生懸命勉強してきたのである・・・とにかく一生懸命働いてもきたのである・・・これの一体何が悪いというのだろうか・・・？ええい、たまたま留学の機会が無かっただけではないか？やはりもって生まれた環境がいけないのか？

帰国生や留学生だけが英語を堂々と話せる環境を謳歌できるなんて、はなはだ不公平ではないか・・・？誰に八つ当たりするでもなく、自分相手にこんなことをブツブツ日本語でつぶやいたりしていた。

案の定、この日の午後のマーケティングの授業はほとんどわからず、プレゼンテーションをしているアメリカ人二人のように、自分も英語であんな風にまくし立てるなど到底

できないと思い、一人ショックに打ちひしがれていた。この日はホテルスクールのアラムナイとして PHD コースを履修している日本人の家に泊めていただいた。私よりもはるかに若いウクライナ人の奥さんが、私も達成できないトフルを2年アメリカに住んだだけで突破したと聞いて、本当にトホホな思いであった・・・。

ああ、やはり留学は夢のまた夢、自分がここまで英語力を高めるなんて、今のままでは到底できっこない、と打ちひしがれて帰ってきたのである。

この悲しみとショックを、当時通っていた予備校の先生にしたためたところ、淡々としたメールが返ってきた。

日本人として日本に生まれ育ったのですから、当たり前です。

まったくそのとおりである。

これは殆どの日本人が同感だと私は信じているが、日本は英語教育自体が間違っているのである。

文法を中心として読む、書くは教わっても、聞く、話すに関しては殆ど練習が無いのである。これでは本当の意味で英語を勉強していることにはならない。

私は大学受験の時に必死で覚えて今は何も使っていないイディオムや英文法、英文解釈の数々を思い出した。何かにとり憑かれたように、目の色を変えてやった英語の勉強は、実は何の役にもたってはいなかったのである。

コツコツと何年間もラジオ英会話を聞いて培ったリスニング力も、直前にノバに通って潰け込んだ面接対策も、本場アメリカの前では、てんで歯がたたなかった。

ああ、悲しいかな、日本の学校英語である。今も多くの中高生、いやもっと前のお受験から入れれば小中も含めた学生が、この学校英語に悩まされている。やっていることは、バカバカしいとわかっていながら、受験に必須だから、就職に必要なだからと、いい学校、いい会社のために暗記を強要されるのが日本の学校英語ではないだろうか？

1.4 英語の聞きにくさ

英語ってやつぁ・・・英語は世界の共通語になっているので、どの国でも大方教育課程に組み込まれている。実は世界レベルで考えるとほかにも汎用性の高い言語は多くあるのだが、まあどこにいても一時的には困らないという面で、英語はやはり世界の共通語なのである。

さて、他の汎用性の高い言語、スペイン語や中国語と比べ、これは私の個人的な意見であるが、英語は特に聞きにくいと思う。これはある意味英語があまりにも普遍的になりすぎてしまったためでもあるし、また世界のあらゆる民族に超フレキシブルに受け入れられてきたためである、と私は考えている。

たとえばラテンの言葉と比べてみる。ラテン系ではそのオリジンにもっとも近いであろう、イタリア語、この聴きやすさったらない！！英語とは比べ物にならないほどである。

もともとイタリア語と日本語は母音を共通にし、各々に特別な子音も少ないのである。つまりは音自体が似ている。加えて、構造、なりたちからして聞くことを容易にしているのである。この言葉自体の仕組みの方が、音よりもインパクトが強い。

イタリア語をはじめとしたラテンの言葉では、多くの場合、主語は省略する。主語を言わなければ、誰が何をするのかまったくわからないではないか・・・ご指摘は至ってごもっともである。であるので、主語を言わない代わりに、動詞の語尾を変化させて、主語を表すのである。

もっとも基本的な動詞「行く」、英語だと、私が行こうとあなたが行こうと、彼・彼女、あるいは奴らが行こうと、誰が行っても「Go」である。例外として三人称単数で現在するときだけ、Goes となるが、未来過去に至っては何の変化も無い。どの人称が主語であっても過去形の went、未来系の will go は同じなのである。

一方イタリア語では、私が行くのは Vado, キミが行くのは Vai, 英語で Goes となるころは、Va、私たちはアンディアーモ、彼らが主語になったらこれまた形が変わって Vanno となる。主語によってこれだけ形が違うので、特に動詞の語尾は、はっきり言わないとわからない、いや、はっきりわからせるために、各語尾は母音で終わることをルールとしている・・・と言った方がしっくりくるかもしれない。

主語がないから、動詞をはっきり言う、つまり、そう、はっきり言ってもらえばもちろん、「聴きやすい」のである。

聞きやすければ覚えも早い、ということで、私がネイティブ並みの発音を着々と身につけていったのは、もっばらこのイタリア語の構造上の特徴によるものなのである。

ところが、英語ときたら、特殊な発音もあるし、国によって人によってアクセントもまちまち・・・Did you をコンマ 0.001 くらいのスピードで言って、ジュとだけ響かせ、一体全体 Do you なのか過去形の Did なのか考えている暇にどンドン話が先にすすんでしまう・・・なんていうことが、ありすぎるくらいにおこるのである。

さて、英語はもともと、聞くことにおいて、とおーっても厄介な言葉だから、聴けないのは当たり前なのである。聞けない、すなわち、相手が何を言っているのかがわからないと、話のしようがない。どんどん口にする英語もすくなくなってくる。

そうすると、また黙々と、いつ何時つかうかもわからないイディオムを必死に覚え、英文の意味をただひたすら日本語に訳す訓練が始まる。まさに来るべき富士山の噴火に備えて、日々大量の非常食を買い込むかのような愚行が始まるのである。

これでは、英語を嫌いになって当然なのである。

日本の学校教育で英語を学んでいる限り、英語は上達しないし、英語という教化を嫌いになって当然なのである。

なぜならば、学校で習う英語は、語学の真髄、コミュニケーションの手段ということを見失っているからである。

2 コミュニケーションの手段としての英語

2.1 ある日の上司との会話

である。

いつものように、いつものごとく、私の書いたメモを読んだ上司に呼ばれる。

彼の前にすわるなり、彼が言った。

キミのこのメモ、俺には良くわからない、いま建っている建物だと 21 億、これが更地になると、一挙に 58 億にもなるのか・・・最初の投資価値以上の儲けができるじゃないか・・・俺なら今すぐこれを買って、テナント追い出して更地にして売り抜けるね！37 億はまるまる俺の手元に入るだろう。

彼の理屈は、いつもきっちりと筋が通っている。私が彼だったならおそらく質問するであろうことを、整然と訊ねてくる。しかも、暗にこんなに儲かるんだったら誰でもやりたがるんじゃないのか、本当にこの値段なのか、現在の建物価格か更地価格どちらかが間違っているのではないか・・・という言外の意味を含んでいる。

でもメモにしたためられた、専門家として私の意見を尊重しているので、自分の疑問を解決する形で私にしっかりと納得のいく説明を求めているのである。であるので、答えるこちらとしてもやたらなことは言えない。きちんと理屈を、ほほう、なるほど・・・それならいたしかたないなあ・・・と理論を積み重ねて相手を説得する必要がある。

そうですね、おっしゃるとおりです。まったくごもっともな話ですが、それは今すぐ、更地化できて、新しい建物がすぐに建てられるという状態ならの話です。日本でこうした立ち退き、地上げをやろうとしたら、まず他の区分所有者の持分を買い取らなければいけません、そして次にテナントの追い出しです。

いやーそれにしても、ごくわずかな数だけ・・・建物の権利のほとんどはこの所有者がもっているだろう。一年、いや多くみつもっても二年、相当な金を積めば全員でていこう・・・

みんなそうやって薔薇色の夢を思い描いて土地を買いに入ります。もしも他の所有者が、はいそうですかといって、契約書にサインするのが実態なら、六本木ヒルズもミッドタウンもずっと昔に完成しています。特に今みたいに土地がバブルのころみたいに上がり始めるとなかなか「うん」とは言いません。

どれだけ金を積んでもか？

私がテナントならば絶対にここを動きません。この場所はビジネスの核です。動くなら最低〇年の売り上げ補償をしてくれと、買い主にやってやります！

いやー、それはいくらなんでもふっかけすぎってもんだらう・・・

いやならば、決して交渉には応じません。私がここで商売をしてもいい権利は法律が保障しています。交渉は私本位で進められなければなりません。分は私の方にあります。一軒でもイヤといえ、この価値は実現しないのですから

・・・ふん、まあもう一度かんがえてみよう。

こうしたやり取りは、もちろんすべて英語でやる。私の英語は完璧ではない。上司もネイティブの外人ではないが、いうことの理屈がとおっているのとの的確で表現に無駄がないので、私としてはとてもわかりやすいのである。

こういう相手には、必要かつ十分な答えを言わなければいけない。文章は短く、最初に答え、なぜなら・・・として理由を付け加える形が一番わかってもらえる。

合意点と論点をクリアにすることも忘れてはいけない・・・

こうしたやりとりを私はほぼ毎日やっている。

私は日本に生まれて育ったバリバリの日本人であり、上司はドイツ人である。もしも英語がなかったならば、日本の不動産市場は外国人にとって永遠に手の届かない、はるか彼方の黄金の国で終わり、資本が海を渡り国境を越えて流れることは永遠にないのである。

いまだに、詳細は100%理解し合えたとはいえないかもしれない。けれども日本人とドイツ人が、お互いの母国語をぬきにして、日本の不動産市場について語り、ある物件の投資価値、融資する際のポイントを語り合う、という目的は英語を解したおかげで見事に達成されたのである。これはすべて英語がもたらした効用である。

相手の質問の意図をさぐり、説得する、結論がみえたら、次の作業を確認する。作業が進んだところで、アウトプットを示し話し合う。お互いの意図していた内容と結果に齟齬がないか、意思疎通は十分図れているか確認しながら作業が進んでいく・・・

日本語なまり（ジャパニーズアクセント）が強い私の英語であっても、少なくともお互いの意思疎通を図り、ビジネスを前進させているのである。

この場合はビジネスだが、一般的に言えば、物事の推進を図るかどうかが、これは多分にストラテジーにもよるので、語学の究極の目的はこのような世界の進歩発展に資すること・・・とは言えない。けれども地球上の離れた場所で生まれ育った者同士が、コミュニケーションをとる手段であることは紛れもない事実なのである。

言葉はコミュニケーションの道具である。それ以上のものでもそれ以下のものでもない。

人と人が意思疎通を図るためのいくつかある手段のうちの一つにすぎない。けれどももっとも基本的で重要な手段であることは確かである。超基本的な手段であるが、また言葉自体が人間の価値を決める絶対的なツールとして使われるわけでもないのである。

言葉は携帯電話に似ている。どこでも話ができるという道具としての基本的な機能以外に、ナビだの財布だのいろんな機能を持たされる。けれども、例えば地震が起こったときに、遠隔地の親族の無事すら電波がとどかなくて確認できなかつたりするのである。便利さを追い求めるあまり本来の機能を忘れる。使う側の人間が振り回される。

話がそれだが、言いたいことは、コミュニケーションがとれない英語では存在意義が（勉強する意味が）ないであろう、ということである。

2002年にアメリカを訪れた時からはや5年である。コミュニケーションもろくに取れなかった自分が今では、相手を説得できるまでになったのである。

「相手の言っていることが判れば答えを考えられるようになります。会話はそこから始まります。」

5年前のスクールビジットで敗北感と焦燥感を味わって帰国した私に、英語の先生が言った言葉である。

そうか・・・まずはリスニングか・・・そうつぶやいて、私はトフルのリスニング点数アップに全身全霊をかけることになったのであった。

2.2 エクスポージャー

辞書で Exposure を引いてみる

さらす、さらされること、さらされていること（状態）、暴露、こんな訳が並んでいるのだが、じつはこれらはどれも、もっとも良く使われる意味を的確に表していないような気がする。

実は、英語を勉強しようとするれば比較的初期の段階でこの真意を理解するシチュエーションに必ずといっていいほど出くわすはずなのである。

気を取り直して次なる訳語をみる。

（テレビ・ラジオを通じて）人前に頻繁に現れること、これまたちょっとピンと来ない訳になる。

エクスポージャーとは「何かを習得できるような実体験をもつこと」あえて訳すとこんなことになるのではないだろうか？

両親も日本人で、ずっと日本に育ち、日本国内のみでほぼ独学で英語を身につけた場合、I have little exposure to English 「実体験を通じて英語を習得できる機会がほとんどない」と表現できる。語学に限らず何かの習得、経験について語るとき、この単語は本当に頻繁に使われるのだ。

アメリカで就職面接対策なるセミナーに出たときのこと、志望理由を問われたある中国系の男性がこう答えた。

どうして国際的な会社で働きたいかといえば、これまでずっと国内の企業でしたので、国際的な感覚も身につけられる環境に身を置きたいと思ったからです

このとき、この生徒は、international environment（国際感覚が身につく環境）の exposure（身を置くこと）が必要だ・・・と言ったのである。

そこで、教授からマッタがかかった。

ちょっとここで考えてみて、多くの学生が志望動機を聞くと決まってエクスポージャー、エクスポージャーというけれど、これって試験管に言うことかしら？あなたにどんな経験、実体験が必要かは、あなたのママには重大事項だけれど、ある企業の人事にとってはあまり重要でも何でもないことなのよ・・・

ほほう・・・まったくそのとおりである。

会社にとっては面接に来た学生がどんな実体験を必要としているか、どんなところに身を置きたがっているのか、よりも、この人物がいかに貢献してくれるかの方がはるかに重要なのである。いや、むしろこの人はうちの会社で何ができるのかを知りたい、それがすべてであると言っても過言ではない。少なくとも、しょっぱなの面接でそれが明らかにならなければ次のステップはないのである。

ここに至って、自分にどういう体験、経験、環境の変化が必要かというのは、相手のアウトオブ眼中（かなり古いか？）であり、これを志望動機として述べるのは、まったくナンセンスなのである。

ここで言いたいのは、エキスポージャーという語の概念であり、就職のテクニックの話ではないので、脱線するのはこの辺でやめておく。

要するに、ある環境に自分をどっぷり漬けること、逃れたくても逃れられないほど回りにあるものがあふれている状況にすることは、エキスポージャーがアリアリの状況なのである。

例えばアメリカに行く、右を向いても左を向いても、朝から晩まで、どこに行っても英語である。駅・学校・トイレ・風呂、自分の頭の中以外、至るところに英語が溢れている。

いくら自分がイヤでも逃れることができない。逃げ出そうと思って乗ったバスも英語、道行く人もすべて英語、英語、英語の日々・・・これは自分自身を英語にさらす、英語漬けにするという意味で英語に対するエキスポージャーが超高いのである。

日本にいても両親はアメリカ人、アメリカンスクールに通い、家の中では常に英語という場合、英語のエキスポージャーが高く、日本語に対するエキスポージャーもまあまあある、という程度に表現できるのではないだろうか。なぜなら、テレビは日本語、外を歩けば日本語が氾濫しているからである。

さて、エキスポージャーの概念はおおむね理解していただけたと思う。

では、なぜこのエキスポージャーを強調するのか、一にも二にも、英語を聞けるようにするにはこのエキスポージャーが不可欠だからである。

2.3 酒とボールと英語の日々

突然だが、日本は世界第二位の経済大国であると言われる。

であるけれども東京はニューヨーク、ロンドン、シンガポールのような国際都市ではない。単一民族が人口の大部分を占め、ローカルな日本語という言語がいたるところに氾濫している極めて特殊な場所なのである。

であるので、日本に生まれここで暮らしている限り、英語に対するエキスポージャはごくごく限られたものになる。

私がこの日本語漬けの生活から抜け出して、相当な外国語のエキスポージャーを持ったのは、留学した時のことである。イタリアでビジネスを学ぶことを志したので、生活の拠点はイタリア、ミラノであった。イタリア語は8年近く勉強してきたから、イタリア語へのエキスポージャーはショックでも驚きでもなく、むしろ懐かしかった。

このビジネススクール、私がとったコースでは授業はすべて英語である。生徒はイギリス、ドイツ、フランスなどヨーロッパを始めアメリカ、アジアと世界の各国から来る。当然のことながらみんなが話す共通の言語は英語になる。

朝、学校の入り口で顔を合わせてから授業、休み時間、グループ作業そして放課後等々ほとんどのシチュエーションで英語が当たり前のように話される。こうして海外に来るまで日本でバリバリ日系の企業で働き、英語など皆無の状況にいたのである。

この突然の英語の氾濫、怒涛のようにあふれてくるエキスポージャーにただただあせりまくり、聞けない、話せない、こいつはヤバイと冷や汗を流している私であった。

そのとき私がしたこと、それは気合を入れて遊ぶことである。まだ授業もそれほど本格的ではなかったので、ほとんどの時間を仲間との付き合いに割くことが可能だった。

平日の授業が引けた後は、バール bar と呼ばれるちょっとしたバーで、ワインを片手にだべり、週末はクラブやディスコに繰り出し、二次会・三次会までとことん人と一緒にいた。

雰囲気を楽しんで心のそこからエンジョイしていた訳ではない。バーに行けば友達と授業の話やそれぞれの国の話、趣味の話などいろいろ語らなければならない。ああ、なるほどこういう表現をするのか・・・ということ数を数人で話す中で覚えていったのである。

ボストンのアメリカ人と中国についての話をしたとき、歴史の一コマに触れて、「チャイナはこのとき Happy ではなかった・・・」という表現を聞いた。それまでハッピーとは人の感覚やフィーリングを表す、とてもカジュアルな言葉であって、外交問題を語る際に、一国の政策の引き金にもなる動機を述べる言葉としてこのハッピーが使われるということに、ピンとこなかったのである。

飲み物の頼み方から、男あるいは女、異性の好みの言い方や色恋沙汰のうわさ話の仕方まで、こうした日常の英語は、モチロン私にはまったく縁の無かったしろものなので、バーやクラブでのエキスポージャーはとても貴重であった。

われわれ MBA で女子サッカーチームを結成し、ゴールキーパーとして練習していたときのこと、コーチになって教えてくれていたブラジル人青年は「ユキ、どっちからボールが来るのか予測 Anticipate しろ!」と言った。私はこのとき始めて予期というこの言葉を expect とは区別して、実戦を通じて学んだのである。

学生の本分である勉強から、あらゆる遊びまで、気合を入れて取り組んだ。どのシチュエーションでもすべてが英語で語られるという環境はそれまでにない、本当に貴重なエキスポージャーであったからである。

3 実践編

3.1 リスニングの基本的姿勢

3.1.1 では何をすればいいのか

さてエクスポージャーということの意味、これがリスニング力を高める上で以下に大切かはさんざん述べさせていただいたのでお分かりだと思います。

エクスポージャーとは徹底的に自己を英語環境に浸すことであり、海外留学などした際に存分に得られる体験である。日本にいて朝から晩まで日本語にだけ接していても、どこまで行っても、「これぞまさにエクスポージャー」という英語への「さらし」は無理かもしれない。

するとすると、するってえと、この文章で書いてあることによればだなぁ・留学でもしねえ限り、リスニングは上達しねえってことになるじゃねえか?とお怒りになる方もいるかもしれない。

だが、ちょっと待っていただきたい。私はエクスポージャーをとことん増やせとっているのであって、「絶対に留学しろ」などとは一言も言っていないのである。

現に海外で暮らすこと自体が、自分のステイタスにハクをつけるという理由からか、何の目的もなしに海外留学する人々がかなり多いのではないかと思う。そしてこういう人たちは結局、朝から晩まで日本人同士でつるんでしまい、英語のエクスポージャーを存分に高められる機会があるにもかかわらず、みずからそれを絶ってしまって、英語のえの字も話さずに帰ってくる人が多い。

これは日本人に限らないことだが、要するに永住するわけではないから、せっかく外国にいる機会があれば、アウトサイダーとしてその生活をエンジョイしようと思っている人がいることは事実である。

好きこのんで苦勞をし、通じるか否かも定かでない英語を勇気をふりしぼって話すよりは、日本語で用が足りる限り日本語を使わせていただくわ! というのは一見もったもなようであっても、実はかけがえのないエクスポージャーの機会をドブに捨てているようなものなのである。

さてさて、このエクスポージャーであるが、もちろん留学や移住をしなくても日本にいても考え方と心構えそして工夫次第で増やすことができるのである。

ボリュームでいえば海外で生活することに及ばないかもしれない。けれどもすでに指摘したように、留学したって「ありがたみ」がわからない人はたくさんいるのである。

チャンスがいやというほどありながら、みすみす無駄にしてしまうより、日本でのエキスポージャーの質を高めることの方が、英語学習には、少なくともリスニングにははるかに効果があることは言うまでもない。

3.1.2 えっと思う最短学習法

私自身小学生の時から英語を勉強しているので、かれこれ英語勉強歴は25年にもなるろうとしている。いろいろやったけれどもこれだけは自身を持ってお勧めできること、それは生活の中に取り入れることである。

NHKの英会話の講師を長いこと勤められた大杉正明さんがやめられるとき、テキストで大々的に先生へのメッセージを募ったことがあった。

なかでも印象的だったのはタクシーの運転手さんからのメッセージである。当然のことながら、仕事柄この運転手さんは始終ラジオを聴いていることになる。どういうきっかけでラジオ英会話を聞き出したのかはわからない、けれども午後、夕方、そして夜と合計して日に3回、5年間ラジオ講座を聞き続けたというのである。

ラジオ講座をお聞きの方はもうお分かりだと思うが、月曜から木曜まではダイアログ、そして金曜日は復習、土曜日は応用編とこの番組は途切れることが無い。日曜日と同じように、車の中か否かは別としてNHKのラジオを聴けば必ずといっていいほど英語放送がある。

こうして日に3回同じ番組を聴く、最初は意識したわけではないだろうが、英語を聞くことが日常になる、そういう生活を送って5年後、この運転手さんは単身アメリカ旅行を決行し、なんと現地で奥さんまで探してきたという。

今となっては、単身南米旅行を決行し、オットを見つけてきたわが身としてはなんとも言えない親近感をこの運転手氏に覚えるのである。

重要なのは、ここにいたって英語のプログラムに身を浸すということは彼の日常になっていることである。時には電波の届かないトンネルで渋滞し、一日三回のリスニングが1回の時もあったかもしれない。けれどもまた次の日からはいつものように、一日3回のエキスポージャーを自然に習慣付けていることである。

なんだ、そんなことかと思われるかもしれない。けれどもこの日常に取り入れるということが、実は以外にももっとも早く効果が現れる早道なのである。

英語を日常に取り入れる、これには基本的手段が二つある。今ある日常を生かしちよっとアレンジをする、あるいは英語と関係のある何かを日常にすることである。

三日坊主にならないために、そして成功率の高さからいって私は前者の方法をお勧めする。自分の日常をつらつらと、そして注意深く省みてどうやったら英語を取り入れられるかを発見することである。

この日常への取り入れ方には量と質は問わない。数十秒から数分でもいい、そして簡単なこと、くだらないことでもいいので、英語を日常に取り入れる工夫をすることが大切である。

たとえば日々読む新聞を英字にする。すべて英字だとイヤになって長続きしないので、株とかスポーツとか特定の欄だけ英字で読む。今は紙ベースだけでなく電子データが飛び交う時代なので、こうした自分だけのアレンジも結構簡単なのではないかと思う。

その他、朝の目覚ましをお気に入りの音楽ではなく、英語放送に換え、歯磨きをする間聞くようにするとか、ニュースを一部英語放送で見るとか、いろいろと思いつくことを試し、やりやすいように変えていくといい、

第二の方法、英語を用いた何かを日常に新しく加える、であるが、こちらは好奇心が旺盛な人はいろいろとオプションを考えられるはずである。話題の海外テレビドラマを見てみる、インド人の働くマックに通い英語で注文してみる、いつも乗り降りしている地下鉄駅をひとつずらし、この間、ラジオ講座をきくようにする、もっぱら英語しか話さない妻あるいは夫をもらってみる・・・などなど、考えはつきない。

ポイントは日常ということである。食べる、眠る、入浴、トイレなど誰にでも当てはまる日常はもちろん、仕事や趣味、生活パターンによって各人の日常はことなる。先の例では、タクシーの運転手にとって車を運転することは日常、そして渋滞情報チェック、眠気覚まし、お客さんとの会話づくり等の理由から始終ラジオをかけている、これも彼にとっては当たり前の日常だったのである。

日常にある英語であれば、文字でも音声でもその形式は問わない。まずはリスニングの力を伸ばすことが大切だから・・・と音声にこだわる必要はないのである。後から述べるが、日常に日本語とはまったく異なる言語が介在するだけで、エキスパーのレベルとしては十分なのである。

3.1.3 まずは、エクスポージャー

さて、いよいよ具体的な方法論に入る。

まず、何はなくとも、エクスポージャーを増やそう。日本で生まれ育ち、日本語づけになっている日常生活をすこしずつでも変えていくことである。家庭で英語を使わない限り、あるいは仕事などで英語を使わない限り、このエクスポージャーはほとんど無いと言ってもいい。

それなら、英語を聞けるようになるなんて不可能じゃないか？と怒らないでいただきたい。

工夫次第でエクスポージャーは増やせるのである。普段きいている音楽のジャンルをちょっと換える。ケーブル TV のプログラムも英語メニューが充実しており、アメリカ人の引きこもりさんが一日テレビを見てすごしたらこうなる、という世界を疑似体験できる。

今や DVD が主流になった映画も最も貴重なエクスポージャーを得る手段の一つである。種類を選べばアメリカにいるのと同じような体験ができる。唯一の違いは、自分が映画の登場人物にはなれないので、映画のシーンのエクスポージャーを実体験として得られないことくらいである。

映画、音楽はイマイチ、まあ、それほど好きではないという人も、海外ドキュメンタリーで自分の興味深い分野を探ることができる。私はディスカバリーチャンネルの「ツタンカーメンの墓の謎」から「キスの不思議」までサイエンス系に結構はまって見ていたこともある。

こうした特別なプログラムを探さなくても今はインターネットで自分の好きなデータがいくらでもとれる時代になっているから、ニュースでもチャットでも何でもリアルタイムで英語に接することができる。

エクスポージャーは何も音声に限らない。英字新聞を読む、英語でコメントの書かれた雑誌をしてみる、DVD の言語メニューを代えて英語字幕を出して映画をしてみる。

家族と暮らしている場合には限界があるが、自分ひとりで暮らしている場合、あるいは自分の自由になる空間をもっている場合、そこをエクスポージャーあるる場に換えることは可能である。

9ヶ国語を自由にあやつる数学者のピーター・フランクさんはかつて日本語を外国にいて勉強する際、自分のアパートをリトルジャパンのような空間に変えたそうである。日本の写真や日本語の書いたポスター、地図を壁に貼り、トイレとお風呂にはひらがな、カタカナ、漢字の表を常備し、ちゃぶ台に向かって正座をしながら、お箸でご飯をたべていたそうである。

お箸や正座は、まったく語学と関係ないじゃないか？と突っ込まれるかもしれない。しかし、彼はこうして日本語を生み出した風土、カルチャーというものを体験し、まさにこうしたエキスポージャーを通じて日本語の仕組みを知ることがインタレストィングと感じており、このエキスポージャーの質と量を増加させることに、とてもポジティブな興味を覚えていったのである。

できることならば、こうした小空間を作り出しなるべく長い間そこに身をおくようにすることである。その空間にあっては、思う存分英語に、あるいはアメリカや海外の英語圏に思いを馳せるといった独特の場所、こうした仕込みは語学を勉強するなかで非常に面白いプロセスなのである。

日本にいては考えられないことだが、ブラジルでは英語を学ぶことは非常に高価なことである。日本のように教材にあふれてもいないし、辞書はサラリーマンの一月分の給料ほどもする高価なものである。マンツーマンで英語を学ぶなどは、これまた人口の3%と言われる超金持ち階級のやることなのである。

そんな環境であるので、シュジンの英語へのエキスポージャーたるや超限られていた。そんな中でも彼はほとんどタダ同然で入手した、もらい物の海賊版CDをかき集め、これまた廃品同様のスピーカーをきれいに修理してCDプレーヤーとつなげ、自分の部屋に特注のオリジナルステレオを設置した。そして朝起きるときから寝入るまで、自分の好きな黒人音楽を絶えず聴いては歌っていたのである。

シュジンの部屋は自宅の屋上に、あとからこさえた、ほったて小屋（といったら怒られるだろうけど・・・）であったけれど、その中は、中古のサーフィン道具やスケボーがあり、シュジンの歌うジャクソンファイブが終始流れ、ソウフルフなR&Bが心地良くいたるところに沈んでいく、完全なアメリカだったのである。

3.1.4 誰もが陥るまちがい

早く、具体的な方法論をはじめてくれ！！とイライラされる方も多いと思う。

そもそもリスニング力が上がらなくて悶々としている人に、今しばらくまって・・・というのは酷だということも良く良くわかっている。けれどもここで、しばらく、いましばらく（歌舞伎）・・・である。

リスニングアップに苦勞した日本人として、誰もが陥る過ちを指摘させていただきたい。誰もが落ちる間違いは、英語リスニング能力の効果についての誤解である。

学習者の間ではもう当たり前のことかもしれないが、英語、とりわけリスニング能力のレベルの上がり方は特殊である。時間と効果（能力）が比例してあがってはいかないのである。時間をかければあがるのは事実だが、時間の経過とともに、勉強をつづけていくにつれて、じわじわと上がっていくものではない。

数学のグラフで言えば、比例直線は描けないのである。かといって二次曲線のような放物線でもなく、不連続な平行線のあつまり、という表現がわかりやすいかもしれない。ぐっと一直線に向上するのではなく、階段状にあがっていくのである。

リスニングのトレーニングをする、するとしばらく、まあ人によって個人差もあるのでなんとも言えないが、2ヶ月から3ヶ月はまったく聞けるようにならない、ほとんど平行線である。それではまったく効果が無いかというと、そうではない、2から3ヶ月くらいたって、ポッと点数が上がるのである。

ああ、やっぱり自分のリスニング力は伸びていたのだなあ、そういえばずいぶん聞けるようになった・・・これからもこの調子でガンガン上げていくぞ！などと決意してはいけない。また同じようなレベル、自分のリスニングが上がったかどうか判らない状況、同じような状態がしばらく、2から3ヶ月は続くのである。

そしてあるとき、またポッと奇跡のようにリスニングの点数の伸びが見える。

私の例で言えば、トフルのリスニングを伸ばすには本当に暗中模索であった。

最初は30点満点中、19点でスタートしたような気がする。3ヶ月くらい21、22をさまよい、4ヶ月目で24くらいになる。ところがその後、5から6ヶ月の間はずっと23か24というラインをいつもさまよっていた。

6ヶ月めになって、（当時点数を上げるはずのタイムリミットはとっくにすぎているのだが・・・）やっと26をマークしたのである。このときばかりは、リスニングの問題の理解度が明らかに違うということが私にもはっきりとわかった。

何も話せないでアメリカに行った日本人の例を紹介する。周りの人が話すことが本当に理解できず、ストレスの多い日々を送っていた。ところがある日2~3ヵ月、いや、もっと経ったころだったろうか・・・あるとき俄然わかるようになったのを実感したそうである。

その方いわく、暗い暗いトンネルをスパッと抜けた感じがした・・・そうである。

さて、ここで今一度、誰もが落ちる「あやまち」について述べたい。

リスニングの能力はすぐには上がらない、じわじわでもない、あるときスパッと階段を一段のぼるのである。そのときまでは、じっと耐えていないといけない。多くの方は、能力は直線状にグッと伸びるものと決め付けてしまうので、力をつけているフラットな時期に耐えられないのである。

こんなにやっているのに、一向に成果がでないなんて・・・この方法ではだめなのではないだろうか・・・とリスニングの力が伸びてくる前に、リスニングのトレーニングを止めてしまうのだ。

成果がでていないのではない。身につけていないのではない。現れるのに時間がかかるだけのことである。ここが、いわゆる他の教科を勉強する場合と英語、とりわけ生きた英語力を高めるためのアプローチの、最も基本的かつ重要な違いである。

教科の力を伸ばすには、まず理解してその後問題集などで自分の理解度をチェックし、間違いをあらためて先に進んでいく。理解、チェック、フィードバックの過程が正しく行われていれば、勉強の成果は確実に点数になって現れる。

ところが、英語、リスニングについては勝手に違う。勉強の仕方を教わって、それを実践し、問題集を繰り返しやっても一向に点数が上がらない・・・ああ、このやり方ではだめなんだとトレーニングを止めてしまう。

英語は教科書から学ぶ教科ではなく、あえてカテゴライズするなら体育である。理解して問題集をやったから伸びるものではない。学校の英語教育は、他の教科書から学ぶ教科と同じ並びで英語を位置づけるので、間違った勉強方法を生徒に強要し、生徒は永遠に伸び悩むことになる。

繰り返し言うが、リスニングの効果は直線的に現れるものではない。人の体、頭はそれほど単純にできてはいない。言うならば、プロの野球やサッカーと同じように一軍、二軍というグループ分けが5軍くらいまであり、どれほど才能のある子供でもいきなりプロデビューはできないのと似ている。やはり5軍から初めて、しばらくは5軍で下積み生活を送り、その後やっとクラスがひとつ上がる・・・そんなレベルアップの仕方なのである。

下積み時代のトレーニングは無駄なようでも着々と身につけている。それが目に見えてわかるようなレベルになるまで、ひとつ上のクラスに上げられるレベルになるまで、ある程度時間を要するのである。

くりかえしいう、成果が見えないからといって止めるようなことは、絶対にしないことである。

3.1.5 禁忌（タブー）

タブーと聞いて、カトチャンの「ちょっとだけよ・・・」を思い出すのはわれわれの世代である。「8時ダヨ全員集合」が全盛だった時代はムード歌謡なるもののハシリで、ちょっとだけのチラリズムに皆異様に盛り上がっていた。

英語、とりわけリスニングのタブーは、まさにこのカトチャンが言わんとしていることにすべて凝縮される。脚なり胸元なり、オシリなりいろんなところをちょっとずつみせるのがいいのであって、いきなりスッポンポンになって何もかもを見せてはいけないのである。

何がしたいかという、リスニングの勉強は決してやりすぎてはいけない、とうことある。なぜならば、「あんたも好きねえ・・・」というべき自分の興味がとことん失われて、継続することができなくなってしまうからである。

これはリスニングの向上を心がける前に、ぜひ肝に銘じておいていただきたい。

絶対に、決して、やりすぎてはいけない。リスニングの勉強および英語へのエキスポージャーはほどほどにすべきである。

とかく日本人は真面目であるので、一度「聞けるようになろう」と思い立つとあらゆる手段を講じてしまいがちである。けれども何度も繰り返すが、効果がでるまで、英語が少しでもわかる、聞けるようになるには時間がかかるのである。度が過ぎるとこの効果が上がる前に、英語自体がいやになってしまう。いやになると見るのも聞くのもイヤになる。

これは英語力アップの上で一番避けねばならない自体である。

何度も言うが、ちょっとだけよ・・・そして、あんたも好きねえ・・・がいいのである。逆に言えば、トレーニングは好きでいられる程度にとどめておかなければいけない。やりすぎれば嫌いになり、語学の勉強を継続することができなくなる。過ぎたるは、まさに及ばざるがごとしなのである。

3.1.6 沈黙はだめなりーもう一つの間違ったリスニング勉強方法ー

具体論をもう少し掘り下げる前に、リスニング勉強方法の、決定的な誤りを指摘しておく。それは、多くの学習者はリスニングの練習をするときに、声に出すこと、発声をほとんどしないということである。これは大きな間違いで、リスニングの為

の、聞けるようになるための訓練であるが、実は、この発声、実際に声に出してみることが聞けるようになるために不可欠な練習なのである。

リスニングの勉強について聞いているので、スピーキングについては聞いてないよ！というお言葉が返ってくるかもしれない。まず、耳をならすこと、英語を徹底的にきくこと・・・というマニュアルが巷に多く出回っているのも、これまた事実である。

意外に思われるかもしれないが、この自分の声で繰り返すこと、音読なくしてはリスニングは絶対に上達しない。少なくとも、英語という外国語を聞けるようになる、すなわち聞いて何をいっているのか意味がわかるようになる、というレベルには到達しないのである。

よくリスニングをはじめた人はエキスポージャーを高めるため徹底的に聞こうとする。音がとれなければ何度も何度も聞くことが大事と、滝に打たれる修行僧のように聞くことだけに集中しがちである。けれども聞くことだけをいくら繰り返していても、聞けるようにはならないのである。根性で繰り返し聞いて、仮にあるダイアログが聞けるようになったとしても、次のダイアログは最初から最後まで何をいっているのか、さっぱりわからないという状況に陥りがちである。

これは多分に自分の声で繰り返さない、音読をしないことからくる症状である。

聞いて聞いて、とにかく聞いて、口をつぐんで黙っているのはNGである。

実際に自分の口で、自分の声で発生してみる。これを繰り返しかえし自分の発音を頭に響かせる。自分の耳で自分の声を聞き、その声のイメージを脳が言語として認識するのである。

外国語はこれまで言語ではないと脳が認識している記号（音、文字）を言語として認識していく作業である。インプットだけではこの認識プロセスは成立しない、アウトプットがあって始めて一連の作業が完結する。このアウトプットが新たなインプットとなり、新しい音、文字を言語として認識していくというプログラムを作り出すのである。

リスニング力を伸ばすには、意外なようでも「沈黙はだめなり」という態度を肝に銘じてもらいたい。

3.1.7 愛しているといってくれ

さて言語能力向上に音読が不可欠であるという事実を、いくつかわかりやすい（とおもっているが）例をあげて説明する。

もう10年くらい前の話になるが、「愛しているといってくれ」というこのタイトルのドラマが一世を風靡した。

ほぼ日本中の女性がトヨエツ扮する榊コウジという耳の不自由な画家に恋をしたものである。この中でコウジが駅のホームの反対側にいる主人公ヒロコの名を叫ぶシーンがある。二人がお互いの誤解がもとで別れるかもしれないという危機にさらされる。コウジは自分のもとから離れていくヒロコを追いかけて、駅の反対ホームにたたずむ彼女を発見する。ここで彼女を引き止めなければ、彼女は永遠にもどってこないかもしれない。

コウジとしては何としても彼の存在を、彼女に気づかせなければならない。彼は常に手話を使うのだが、この非常事態には、長く使っていなかった声を出すというコミュニケーション手法を試みるのである。彼の発した声は声というより「叫び」にちかく、「ヒロコ」ではなく「イイローオー」と動物が咆えるような、切なく拙いものだった。

ロマンに浸るのはさておき、なぜ彼はヒロコと発音できなかつたのであろうか。考える答えは、自分の声を聞いたことがなかったからである。幸いこの決死の叫びはヒロコの耳に届き、彼女はコウジの存在に気づくのである。

コウジに気づいたヒロコに彼は手話で伝える、自分の記憶を呼び起こして、かつて発した自分の声がどうであったか思い出して必死でキミの名を呼んだと。

私がこの例を思い出したのは、イタリアでMBAをやっている最中、翌日のプレゼンの準備をしていたときである。私は風呂に浸かりながら、「さてここで計算結果をみてみましょう」と英語で言おうとした。ところが、最初の「Let's」すらまともにでてこない。たどたどしいのである。言葉を覚えかけの子供のように、簡単な言葉すら引っかかるのである。

ここに至り、私は気づいた。頭の中で認識しない音は発することができないのだと。耳を通して頭に音声の像を記憶させなくとも、美しい旋律を作り出したベートーベンのような天才は別として、我々凡人は頭の中に音声として響かせたものだけ、言い換えれば自分の発した声を通じて認識したもののみ、言語として発声器官に働きかけるのである。日本語なら小さいときから数え切れないほど話してきたし聞いてもきた。だから耳から脳に結んだ音声を生帯が再生する仕組みが整っている。だが英語についてはエキスポージャーでも述べたとおり、自分の声として発生するということが極めて限られているの

である。日本の義務教育で英語を学んだ場合、おそらくネイティブの言葉を覚えてたの子供よりも、発声回数が少ないのではないかと思う。

あとから、具体的な勉強方法として述べるが、私がイタリア語をネイティブ並みのアクセントで語るのにはネイティブのまねをする自分の声を録音し、行き帰りの電車の中で繰り返し聞いたからである。耳で認識した音を、自分の声を通じて再現している。再度、頭の中に響かせ記憶として定着させているのである。

ということは、英語も同様、自分の声で話す英語を音の記憶として定着させなければならない。私は手元の原稿、バーバードのケーススタディの英文を、声を出して読んでみた。自分の話す言葉としての英語を、音声という記号を言語情報として耳と頭に定着させるためである。意味が取りにくいところは何度も区切り、SVOCを意識しながら、大きな声で、人に説明することを前提にゆっくり読んでみた。最初はたどたどしくても、何回か繰り返すうちにだんだんとつかえずにいえるようになってくる。

さらに繰り返していると、文章によっては手元の英文をみないでつかえずに話せるようになってきた。

ははあ、そうかと私は思う。この段階でこの文章を誰か他の人が発音してくれれば、今なら自分は100%相手が言っていることを理解できると。

繰り返しになるが、リスニングを伸ばすには、自分の声で発音することである。耳は自分の発した声を聞いている。だから聞こえない人は音が出せない。

これは非常に有効なインフォメーションなのである。なぜなら、これを逆に考えてみると、リスニングの鍵が容易に理解できる。聞こうとするなら、音をださなければならない。何度も発音して自分の声で話されている英語を、脳に言語情報として認識させること、話せない言葉は聴けないのである。

3.1.8 アジダス

このエピソードを暴露したら弟からすごい剣幕でおこられるかもしれない。

が、あえて話させていただく。私の弟が小学校の低学年であったときのこと、ある日の食卓で母親にこういったのである。

「俺は、アジダスの帽子が欲しいんだよ！！」

これを聞いたとたん、私と姉たちは一気に吹き出し、「サンマだす、アジだす」などと言って弟をさんざんからかったものである。今にして思えばずいぶんな姉たちだが、こ

うした経験に耐え、女性を見る目を養って、弟は今では立派な家庭を築いている。（フォローになってないか・・・）

冗談はさておき、彼はなぜアディダスという発音ができず、アジダスといったのであろうか？理由は簡単、耳で聞いていない、聞きなれてない音だったからである。

もともと日本語にザジズゼズはあっても、ディ、ドウにあたる音は存在しない。すべて外来語から来た音なのである。したがって、大人たちの会話、友達同士の会話、テレビ・ラジオなどのメディアからこうした発音が聞ける機会というのは極めて限られている。

そうはいっても、30いくつにもなった今、いまだにアジダスと発音しているかといえ、もちろんそうではない。毎日のようにテレビのCMでアディダスという正しい発音を耳にし、これをまねて友達と「俺、アディダス買ったんだー」、「すげー、かっちょいいー、俺もアディダス欲しいー」など声に出して会話し、正しい発音を聞いてこれを自分の声で繰り返すという訓練を行ったからである。

子供は聞いたことをまねして言葉にする。もちろん日本語に固有の発音であっても最初からすんなりと発音できるわけではない。大人が話していることを真似して発音し、褒められたり笑われたりしながら徐々に正しい発音を覚えていくのである。だから正しい発音が聞けるようになってくるのである。

こうして新しい語を覚え、また聞いたこともない言葉を聴き、発音して覚える・・・これが聞き取る能力のまっとうな発展の仕方である。

であるので、修行、とばかりに英語をあびるだけ浴びて、自分の口からは何もださなくていいというやり方は間違いなのである。聞けるようになりたければ、まず話す練習、音に出して言う練習がもっとも大事なのである。

3.1.9 エイエノカガヤキ

さてさて、またまた私のオットの例で恐縮だが、われわれの結婚披露宴で最もウケた出し物、それは、オットが日本語で歌う「セイント星矢」のテーマ曲であった。

ああ、おそるべしと表現すべきか、あっぱれと表現すべきか、日本のアニメは海を越えた地球の反対側の国でも絶大な人気を誇っているのである。世界をちょっと垣間見たじぶんとしては、日本の電子機器を中心としたテクノロジーとこのアニメやキャラクター物だけは、ここ当分グローバルにみて日本の競争力が絶対的に強いのではないかと思っている。

さて、シュジンの住むブラジルでは、このアニメは少年青年を問わず幅広く支持を得ており、シュジンは20を超えた今であっても嬉々としてセイント星矢に見入っている。

当然このテーマ曲も日本語の意味もわからずサビの部分は暗記していた。日本に来てまだ半年しかたっていないけれども、これを日本語でちゃんと歌えば、自分に日本語を教えてくれている先生をよろこばせることができる・・・というわけで、急遽披露宴で、文字通り披露することになったのである。

繰り返しになるが日本語の意味を覚えているわけではないので、「まぶしいクロスまつて・・・」というところ、「貧しい、クロスまつて・・・」と歌ってみたり、「それは選ばれた戦士の証」と歌うべきところ「それは、えぼったあ、禅師の私」（なんのこっちゃ・・・）と口づさんでみたり、ほとんど「空耳アワー」の世界で私を大いに楽しませてくれた。もっとも本人は真面目なので大声では笑えないが・・・

ところが、ところがである、あるパートではたどたどしく、発音も自信なさげであるにもかかわらず、「永遠の輝き」と歌うところだけは活舌良く、エーエンノカガアキーと大声で歌い、そしてなぜかニヤつきながらその場にしゃがみ込む動作をするのである。あるときふと私がこのことを訪ねると、やはりニヤニヤしながらシュジンはこう答えた。

ポルトガル語でカガアキは「ここでウンチをする」っていう意味だよ。

ははあ、なるほど、道理でうれしそうな訳である。カガはポルトガル語でウンチのこと、アキはここ、すなわち「ここで用を足す」という意味になり、シリアスでドラマティックなメロディーと共にこの歌詞が流れれば、ニヤつくのも納得がいった。

ここで言いたいことは、そうした下ネタでも、うちのシュジンのバカ話でもない。なぜシュジンがこのカガアキをハキハキと活舌良く歌っていたかということである。

カガもアキもポルトガル語に存在する言葉なのである。それがたまたま日本語に同じ音が存在したので、聞いた途端に、おそらく真っ先に覚えることができたのである。母国語として何度も聞いて発音している、であるからこれと非常に良く似た音声に遭遇したとき、その音声のみを母国語と関連付けて覚えることができたのである。

これはポルトガル語を母国語とする人がまったく意味のわからない日本語を聞いたときの例であるが、日本語を母国語とする人がまったく意味のわからない英語をきいたときにも言えることなのである。

繰り返し聞いて、繰り返し音として発した言葉は言語中枢に働きかける。聞くだけでなく、自分の声を通じて発し、自分が発音した音声を脳に響かせたとき見知らぬ音は言語として定着するのである。

とかく、日本人に生まれ英語を苦手とする人は、英語が聞けないのはエキスポージャーが少ないからだと思いがちである。もちろんエキスポージャーは大事けれどもそれだけではない。こうした英語のリスニングを苦手とする人の中には英語を発音することに極端にコンプレックスを感じている人が少なからずいるのも事実である。

私もそうだが、ネイティブでない限り、とことんネイティブの発音とイントネーションを取り入れることは難しい。

けれども、考えて見てほしい。関西弁を母国語とする人、あるいは沖縄で生まれ育った人が、センター試験の国語でいい点数をとれないかといったらそうではないのである。絶えず共通語を聞き、関西アクセントがあっても共通語を話しているかぎり、彼らの脳は日本語の共通語を言語のシグナルとして認識する。

このように発音とアクセントは若干ちがっても、みずから標準語を話し、音声として頭に記憶させれば、標準語で話される日本語も容易に理解できるのである。

重要なことは外国語であっても馴染みの言葉として頭が認識するまで発音することである。発音とアクセントの微妙な違いを正していくのは二の次とし、まずは母国語の単語と同じレベルの親しみを感じるまで、発音をとおして頭に記憶させていくことである。

3.1.10 リスニングと坂上がり

私を含め多くの人が、鉄棒の「逆上がり」で苦勞した経験をお持ちなのではないかと思う。運動神経に絶大な自信を持つ人でない限り、「逆上がり」は苦手科目として認識されがちである。

私の経験から言って、「逆上がり」ができるポイントは二つある。まず、体を鉄棒にひきつけること、それと大地を大きく蹴り上げることである。ぐっとひきつけることによって鉄棒と自分の体が近くなり、軸になる棒にからまりやすくなる。距離がちじまれば、あとは遠心力をつけるパワーをつけるだけである。

パワーは地面を蹴り上げることによって得られる。蹴り上げる力が強ければ強いほど、体は上に持ち上がり、棒を軸に回転するスピードがでてくる。

この「引き」と「蹴り」が逆上がりをする最も重要なポイント、最近のはやり言葉で言えば「キモ」である。さらに、さらに重要なのは、どちらかが欠けても「逆上がり」はできるようにはならないということである。

いくら引きばかり強くしても、地面を蹴らない限り体は上には上がらないし、また「蹴り」ばかり練習していても体が芯棒から離れていれば軸を中心にまわることはできないのである。

体育で必須事項である逆上がりを習得するには「引き」と「蹴り」どちらも同時にある程度のレベルまで達成することが必要になる。「逆上がり」の練習をするときには、

「引き」と「蹴り」どちらも意識してトレーニングをしなければならず、「引き」ばかりの練習、あるいは「蹴り」のみの練習は不自然であるだけでなく意味がない。

お分かりだと思うが、この「引き」と「蹴り」はリスニングのトレーニングにおいては「聞き取り」と「音読」になる。リスニングの練習をするに、聞いてばかりいて音読をしないのは、引きつける練習ばかりして一向に蹴り上げる練習をしないのと同じである。

繰り返しになるが、語学の能力をたかめるのは勉強ではなく、身体トレーニングである。リスニングを、相手が何をいっているのか、理解できるようになることと定義するならば、相手の話す英語という外国語を日本人である自分の脳を通じて理解するために、聞くことと同様、自分の声で英語を発することもまた必要不可欠なトレーニングなのである。

3.2 リスニングのトレーニング

3.2.1 シャドウイング

さて、リスニングのためのエクスポージャーとしてまずはこのシャドウイングをお勧めする。

通訳の資格を有し、英語とロシア語、さらにアラビア語を話し、現在アメリカの大学で教鞭をとっている日本人の方が、一番にすすめたリスニング力アップ方法がこれである。

彼いわく、最初に通訳学校にいったとき、CNN か何かのニュースを聞かされ、ワンテンポ遅れてキャスターの言うことをすべて繰り返す練習をさせられたそうである。

文章で説明するのはちょっとわかりづらいのだが、例えば、ドキュメンタリー「アリゾナの平原で謎の飛行物体を見た！」などというタイトルの番組があり、地元住民へのインタビューシーンがあるとする。みるからにアメリカ人というおばさまがでてきて自分の経験を語り始める。ワンテンポ遅れて「もう、そりゃあ本当にびっくりしたわ、最初は雷か嵐でも来たかと思って外を見なかったんだけど、突然、紫色の光がみえたんで、あわてて外へ出たの・・・」
というような最もありそうな日本語での吹き替えが流れるとする。

この日本語吹き替え部分を日本語ではなく、当のアメリカ人が話す内容をそっくりそのまま真似て言うのである。この英語部分を同じようにワンテンポ遅れて繰り返すトレーニングをシャドウイングという。

いふなれば吹き替え字幕（英英編）がオリジナルの役者の台詞よりちょっと遅れてかかるようなものである。

あまりピンとくる例でなくて恐縮だが、シャドウ（影）になるタイミングと内容は理解していただけたでしょうか？

なるほど同時通訳者はまずネイティブのスピードになれなければいけないので、この音をすべて拾うという作業が必要になる。音をくまなく拾いきる作業として、まず有効なことは相手の話す音をきいたそばから繰り返していくことだろう。

私にこれを教えてくれた人いわく、トフルの点数が必ずアップするので、リスニングの力をつけたければ、絶対に続けなければいけないというのである。

このシャドウイングをする上で、とても大切なことが二つある。

ひとつ、意味を考えないこと

決して意味を追ってはいけない。まず音になれて、ひたすら耳で聞いた音を声帯まで落とし、自分の声で発すること、これが反射的にできるようになるまで繰り返すことである。意味をいちいち考えていては、頭の中が意味を捉えることで一杯に (Occupy) なってしまう。意味は二の次、とにかく音を拾って声に出す、このことだけに集中するべきである。

二つ、毎日つづけること

このシャドウイングの力はもちろん一長一夕につくわけではない。特に反射的に繰り返す練習であるので、よりスポーツ的要素が強くなっていく。水泳などと同じように、普段まったく使うことのない筋肉 (反射構造) を使うので、毎日継続することが必要になる。10分くらいから30分程度まで毎日キャスターのいうことをとにかく追いつけることである。

繰り返し言うが、運動神経なので、使わなければ必ず後退する。三步進んだところで一日休むとする、すると二歩下がるのではなくて、実際は三步か四歩くらい後退するのである。次にシャドウイングの勘を取り戻すには大変な苦勞があるので、自分の後退具合を肌で感じるができる。

疲れきっているとき、旅行や出張などでTVの前にいる環境が作れないとき、英語の勉強に嫌気がさしたときなどは特にこのシャドウイングの練習ができないものである。けれどもなんとか継続する工夫をしていただきたい。できないときはほんの5分でもいいので、ネイティブの発音とスピードを反射的に繰り返す習慣を絶やさないことである。

シャドウイングの対象になる教材はやはりCNNなどのニュースが望ましいが、その場の状況に応じて、ドラマや映画で代用することも可能である。移動中の飛行機の中では二ヶ国語放送のニュースやドラマで代用できるし、テレビを見れる環境にいなくてもラジオなどの英語放送を追いかけて必ずシャドウイングをしていただきたい。

重要なことは、本当に何度も言うが、絶やさず続けることである。

3.2.2 教材を使ったリスニング

先のシャドウイングを適切なやり方で、毎日繰り返すだけでも、2から3ヶ月すればリスニングの点数が確実にアップする。実力上昇の程度と速さに個人差があることはすでに述べたが、リスニングの力がつくことには間違いがない。

けれども、しかし、ある一定以上のリスニング能力が要求される人、試験対策でリスニングがネックになっている人には、それだけではやはり十分ではない。確実に点数を上げたい、あるいはできるだけ効率よくリスニング能力向上させたいと思っている方には、下記に述べる、実際にリスニング教材を使ったトレーニングをお勧めする。

3.2.2.1 教材の選び方ハード編

リスニングの教材であるので、まず音声があること、これはネイティブ、なるべくなら、アメリカ英語ネイティブが望ましい。TOEICなどのテストの多様化と、これに対する対策は別途項目を改めて述べるとして、何はなくても音声がいかにしっかりあるものでないとリスニングの教材にならない。取り越し苦労かもしれないが、蓄音機で再現したようなカスレタ音声ではなく、できることなら、クリアに録音されているものを使うべきである。

デジタルデータであること。インターネットのオークションなどを当たれば、カセットテープのリスニング教材も山ほど出てくることと思う。であるが、多くの場合カセットテープの教材は比較的試験難易度がさほど高くないときに作成されたものも多く、また聞きにくい箇所を繰り返し聞くことにあまり適していない。さらに、速聴といって通常録音されたスピードよりも早いスピードで聞き、ネイティブのスピードに慣れるという訓練を行う際に、このカセットテープデータは適さないのである。

今はほとんどDVD、あるいは直接インターネット上でダウンロードできるものだと思うので、カセットテープ教材の心配はあまりないが、人から **used** を安く手に入れる場合などはやはりちょっと注意すべきであろうと思う。

さらにもうひとつ、教材の選び方のハード面での注意事項であるが、音声教材は、そのトランスクリプト（発言内容再現）が存在するもの、あるいはトランスクリプトを入手することができるものを入手すべきである。

リスニングの力を試す段になり、英語をがーッと言われ、何がなんだかさっぱりわからないと、一体ぜんたい何を言っているのか、今しゃべられたことは一体何を言っていたのか知りたくなるものである。

一言一句チェックして、自分の聞いた、あるいは聞こえた内容と実際に語られた内容を比較確認できるものとして、文字ダイアログの印字されているものがなければならない。

3.2.2.2 教材の選び方ソフト編

3.2.2.2.1 会話系リスニング

そして、音声の質よりも、印字の精密度よりも、実はこれが一番大切なのだが、教材を選ぶ際には、話されている内容について気を使わなければいけない。

これは多くの試験で問われるパターンに合わせて説明する。ヒアリングのアプローチは大きく別けて理論系と会話系に大別できる。

判りやすいほうから説明するとして、まず会話系であるが、これはネイティブが二人、あるいは複数、日常のことなどを話している場面のダイアログを聞かされ、その内容の理解度を問われるものである。日常での言い回し、ボキャブラリー、音を捉えることの正確さがこの手の会話系ダイアログを聞けるか否かの決め手になる。

この会話系の理解度は見事に自分のエクスポージャーの多さに比例する。いかにネイティブの人々が経験する、日常の多くのシチュエーションに慣れ親しんでいるかが鍵になるので、留学経験が無く、日本のみで勉強している人には一番つらい部分である。

日本にいながらにして、この会話系ダイアログを 100%聞けるようになるのは実に難しいのだが、この会話系対策に最も効果が高い勉強法はやはり映画であろう。

シャドウイングならびにリスニング教材の中の会話系ダイアログを勉強するのも効果があるが、やはりここは英語へのエクスポージャーがバックボーンになっている部分であるだけに、意外に効果が現れるのに時間がかかることを肝に銘じて映画などをじっくり勉強することである。

「話せない音は聞けない」ということを肝に銘じて、音が消える表現、英語のリエゾン、ガッディ(I've got it)、ゴナ(I'm gonna)、などなど英語独特の言い回しを自分の声を通して発音し、脳に記憶させるように心がけることである。こちらも地道な努力であるが、毎日繰り返し発音していれば必ず、100%とはいかないまでもある程度は聞けるようになってくる。

インタビューものは、なれないうちは避けた方がいい。最も大好きなミュージシャンのインタビューとか手記などは、自分をもっとも興味を持って英語へのエクスポージャーを増やすものとして使うのは大いに結構だが、リスニング教材として勉強するには、話

し手の癖、ものの考え方、答えに対する返答の適切さが、リスニング勉強者には判断できないので、聞けるようになろうという段階では、なるべく避けるほうがいいと思う。

3.2.2.2.2 理論系リスニング

さて次に理論系リスニングに移る。

その試験の性質によりいろいろ違うが、ビジネスでの商品説明、天気予報、写真等の状況説明、大学の講義・セミナーなどのレクチャーフレーズが流れ、その内容をどれだけ正確に把握できたかということ进行测试するものである。

この部分に関しては、私はトフルの講義ダイアログ、別名パート B 対策のダイアログをお勧めする。特にお勧めはサイエンス、科学系の講義ダイアログを勉強することである。これは人文、経済、アート、ビジネスすべての分野を目指している方にあえてお勧めすることであるが、理系の説明ダイアログをまず理解できるようになるべきである。

それはダイアログを聞き、勉強することを通じて、英語の理論的な組み立てを理解できるからである。この理論的な英語の組み立ては、ネイティブにとっても重要視されるものであるし、ましてやノンネイティブならなおさら、重きを置いて体得しなければいけないものである。どうやってダイアログを勉強するかは後から詳細に述べるが、サイエンス系のダイアログは、自然科学を扱っているだけに理論が明確で判りやすく、こうした英語の理論を体得するには最適のものであると私は確信している。

トイックを受ける方には、トフルのリスニング用テキストはポイントがずれているのでは・・・と指摘を受けるかもしれない。しかし、トイックも英語の実力、実際の社会でどれほど英語ができるのかを問う試験であるので、理論的なリスニング姿勢は必ず役に立つのである。

はなはだ余談だが、実際の外国人とのコミュニケーションで非常に苦勞するのは、だれもがこの試験対策用のレクチャーダイアログのように理論の流れに沿って会話をしてくれるとは限らないことである。多くの場合、要するに何が言いたいのかが見えなくて、批判や感情だけを並べている議論が多い。私はネイティブに声を大にして言いたいのだが、ネイティブこそ、こうしたところにしっかり気を使わなければいけないし、理論的筋道のない話し方は、話しての当の本人、ネイティブ自身のためにならないと力説したい。

まあ、文句はさておき、ネイティブとの会話にあっても、誰もがしっかりした理屈を、理論だてて判りやすく説明してくれるとは限らない、この事実だけは学習者の方々にも最初に肝に銘じておいていただきたいのである。

だから、声を大にして強調するのである。まずしっかり筋の通った話を理解できるようにならなければいけない。

まずこれ以上ないくらい筋道の通った話しが理解できなければ、雲をつかむようないたい全体何が言いたいのか判らないネイティブと遭遇したとき、すみません、Xとおっしゃったようですが、それはAですか、それともBですか?とき聞き返すことができないのである。

いやまったく違うYについて話していたんだ、というのか、AともBとも取れるとういのか、X、A、Bの話はしていない、問題はZだ、というのか・・・、いずれにしても、まず理論的な話がわからなければ、このように相手の反応に応じて、自分の考えを明らかにしていきながら、話をすすめることができなくなる。

最初にのべたが、理論的な言葉のやり取りができなければ、外国語はその最も基本的な昨日、コミュニケーションのツールとしての言葉という役割を達していないのである。いくらボキャをふやし、ネイティブと同じ発音スピードで英語をまくし立てることができたとしても、その場合の英語は、言葉であって言葉でない。

外国語という意味で英語であるが、コミュニケーションの手段としては全く機能していないので、英語以外を母国語とするものが意思疎通をはかるツールにはならないのである。

まず英語の理論的な仕組みを理解すれば、少なくとも自分と同じように理論的に自分の意思を伝えようとする相手の言っていることは理解できる。あとは自分が、自分の考えを理論的に表現できれば、相手はおそらく理解してくれるであろうから、コミュニケーションが成立するのである。

重要な点なので繰り返すが、英語の理論的組み立ては、肌で覚えこむべきである。

少なくともビジネスを前提として、英語をコミュニケーションのスキルとして使うのであれば、筋道の通った英語は聞けるようになるべきであるし、自分もまた筋道の通った英語を相手に返していかななくてはいけないのである。もちろんビジネスの世界に駆け引きはつきもので、いつも自分の考えをストレートのあらわしてばかりはいられない。しかし、こうした駆け引きを心配するのは、英語のレベルを上げてからの話である。

日本語で聞いてみて、ああ、そうかなるほど、と納得できるような内容が、正しい英語で話されるのであれば、きちんと聞けるようになるべきである。もしも聞き手がサイエンティストでその分野についてナニガシかの知識があれば、このダイアログで言うことには納得できない、との意見が出るかもしれない。しかし、トフルのパートBは学説の真偽は問うていないので、心配は無用である。

あくまでもダイアログの理論的組み立てに集中するべきで、ダイアログの理屈にもとづけば、次のどれが正しいですか、というのがパートBの「肝」である。

要するにトフルパート B の出題とは、この筋道の通った内容を正しい英語、適切なスピードの英語で聞かされ、その理解度をこれまた直球で、素直に聞いている問題なのである。

どんな試験を受けるにしろ、物事の筋道を追い、理論的考え方を身につけるには、トフルパート B はまさに持って来いの教材なのである。

3.2.2.2.3 理論系その 2

リスニングができない人の決定的弱点として、ボキャブラリが無いことを理由として掲げる人がいる。これはあたらすしも遠からずで、話される言葉のさすがに半分以上が意味不明の言葉であれば、手も足も出ないのは最もである。

けれども、ある程度のレベルの英語の試験を目標としている学習者を前提にすれば、リスニングの鍵はやはり、決定的なエクスポージャーの少なさと自らの音読の少なさが原因している。少なくともボキャブラリーのなさよりも、リスニングのコアとなる基本的なことをやっていないという方が、リスニング力が伸びない理由としては信憑性がある。

そうはいつでも、ボキャブラリーはあって困るものではないので、増やすにこしたことはない。リスニングの練習をしながらボキャブラリーも併せて増やしたいのなら、トフルの単語増強用のテキストがいい。

私が使ったものは仲本氏の「TOEFL テスト CBT ボキャブラリー」というテキストで基本、応用合せて 4000 語程度が収録されていた。この本の良さは、こうした頻出単語が 3 分から 5 分ほどの短いダイアログの中に、万遍なくちりばめられていることである。

ダイアログの中で活きた使われ方をされている単語であるので、覚える上でも使う上でも、もちろんこれを耳にしたときにも、ああ、なるほどあのことを言っているのかと、知らない未知の単語が、自分の慣れ親しんだ既知の言葉として自分の脳に記憶されるのである。

内容も人文、コミュニケーション、歴史、科学などと分かれており、こうした細かいダイアログを通じて自分のボキャブラリーをふやすことができる。アメリカの歴史や、アメリカ生活が背景となっているダイアログも多く、これまたトフル、トイックの問題としては、いかにも出そうな内容である。これを二冊しっかり勉強していけば、相当な力はつくのではないかと思う。

3.2.2.3 リスニング教材の勉強の仕方

3.2.2.3.1 会話系

3.2.2.3.1.1 最初の聞き取り

教材の選び方については、詳細に述べたので、次は具体的にこうした教材をどのように使っていくか、どのようにして実際にリスニング力アップのトレーニングを行うかを述べていく。

会話系も理論的にもおおまかな作業は同じである。最初に聞く、そしてスクリプト（文章）をみて意味を理解する、音読する、最後に暗唱（暗記）していくことである。このプロセスを一通り終わらせてはじめてひとつの教材のトレーニングが終わる。何も見ないで、さながら実際のリスニングテストの実戦のように初めて聞くところから、そのダイアログの暗記をするところまで、このプロセスが終わって初めて次のダイアログ（リスニング教材）に移ることができる。

面倒なようでもあせらずじっくりとこの地道な作業を繰り返すことが、リスニング力を高める一番の近道である。

まず、会話系の教材について、その CD なりオーディオテキストを入手したら、ひとつの完結した会話を、最初に集中して聞いてみる。

リスニング用の教材であれば、おおむね男女が二、三回会話をやり取りして、ひとつのダイアログが終わるように編集されている。

単語自体は難しくないが、話す表現が高度（会話としてこなれている）なこととスピードが速いのが特徴である。

おそらく第一回目は何をいってるんだかさっぱり判らないだろう。

であるので、そこでもう一度聞いてみる。今度は第一回目と同じ態度で聞くのではなく、ちょっと心構えを代えていただきたい。それは、最後のスピーカー発言者の言うことを、真剣に、集中して聞くことである。慣れてくるとできるようになるが、できれば最後の台詞を一度聞いて丸暗記できるようになるほど、真剣に集中して聞いてもらいたい。

なぜならば、会話系ではこの最後のスピーカーが言ったことが鍵になる場合が多いからである。

特に TOEFL の場合、最後のスピーカーの言うことがすべてである場合が多い。

たとえば、下記のような典型的なダイアログを想定すると・・・

あー、やっと試験も終わった！

ほんとねえ、これでやっとバーに繰り出せるわ・・・あなたも来るでしょ？

I would love to but I don't think our group work for the marketing assignment will finish before midnight.

最初の一、二文はほとんど、アメリカの FOX か何かのドラマの吹き替え版のようなイントネーションだが・・・そこは、我慢していただいて、問題は最終文、このラストスピーカーのいうことである。実際の音声では”I would love”のところを本当に行きたそうな、うきうきする声で話されるので要注意なのだが、would love は「本当だったら超いきたいんだけどなあ・・・」というニュアンスを含んだ否定後である。ポイントは but が聞けるかどうかで、これが聞ければその後に言われている言葉、マーケティングの授業の宿題になってるグループ作業が今夜中には終わらないだろうな、とのつながりが理解できる。ここで言ってるのは、勉強は終わらない、だからいけないだろう、ということである。

会話系のリスニング問題はだいたいひねった出題が多いので、ここの選択肢もおそらく下記のようなになるはずである。

What does the man mean? この男性は何を意味しているのでしょうか？という問いに対し、

- A He doesn't want to go to the bar tonight.
- B He will check the market tonight.
- C He will have to study with his colleagues.
- D He is planning to come to the bar tonight.

などという選択肢が出される。まず、うれしそうな声で、I would like to と似たような表現である love をつかっているので、D の「バーに行くつもり」という選択肢を選びがちであるが、実はこれは引っ掛けである。

B の「マーケットをチェックする」は問題ダイアログ内のマーケティングと音が似ている単語を持ってきた sound alike のこれもまた引っ掛けである。さらに注意するのは A で、彼は本当は行きたいのだけれども難しいだろうと言っているので行きたくないなんて、ひとつことも言っていないのである。Would と but だけ聞いてその後の理由を集中して聞かないと、A と C はかなり迷ってしまう。この場合、この最後

のスピーカーが話していることから、唯一、明らかなことは、今夜仲間と宿題をする（すなわち勉強する）と言っているので、正しい選択肢はCとなる。

会話系に慣れるのにも少々時間がかかるが、最初の方の二言、三言は、言葉も簡単、言い回しも凝っていないので比較的早くに聞き取れるようになる。会話系のリスニングの鍵は、なんとと言っても最後のスピーカーの言っていることで、ここを真剣に聞き取らなければいけない。

まず一回目は普通に、本番のテストのつもりで聞く、二回目は最初の会話の「前振り」がわかっているの、特に最後のスピーカーの言うことに集中して聞く、二回目でも何を言っているのか判らなければもう一度・・・とまず十回くらいは本番を想定して何も見ないでがんばって聞いてみることである。

3.2.2.3.1.2 会話系の意味をとる

もうこれ以上は何を言っているのか判らない、というところまで聞いたら、ダイアログを見てみよう。いったい全体、何て言ってんだ、どんな単語を話していたんだろうと、興味深々になっていることと思う。

もともと会話自体はそう長いわけではないので、ダイアログをパッと見ただけで、どこがネックになっていたのか、大まかな予測はつくと思う。まずはそのネックになっている箇所を重点的にチェックしていただきたい。

なぜ聞けなかったのか、その理由と対策方別に、チェックポイントを挙げると次のようになる。

1 音がとれない、聞き取れない

英語も、もちろん文明社会で生活をする人々がコミュニケーションをはかるための手段であるので、実際の会話では、一つ一つの単語をいちいち切り離している訳ではない。日本語でも同じように単語と単語の間は隙間なく、なめらかなつながりをもって発音されるのが常である。

であるので英語独特の音のつながりを聞きなれていないと、一連の言葉がまとまって発音されたときに、何をいっているのか意味がとれないのである。

良く言われる例であるが、I am going to は I'm gonna アムゴナに、早い人によっては、アとゴしか音としてリスナーの耳に届かないケースもある。こうした単語のつながり、あるいは省略によって音が消えることが日常会話では良くあるので、会話をスクリプトを見てチェックする際にはこのリエゾンを注意して見ていく必要がある。

後から項目を立てて述べるが、アメリカ英語とイギリス英語では同じ単語でもアクセントの係り方、このリエゾンの聞こえ方に差異がでてくるので、混乱しがち（耳という器官が迷ってしまう）なので、どちらかの会話スタイルで慣れるべきである。

まず最初にアメリカ英語を教材用にすすめたのは、試験対策ではいまだ本流だということ、日本人にとっての汎用性の高さ、そして母音を取りやすいという理由からである。

2音は聞けているが意味がわからない

先の例でいけばアガッティ (I got it) アゴナ (I'm gonna) などの音自体はきちんと聞き取れているが、これが一体何を意味しているのか、意味がわからないというケースである。これには大きく別けて基本動詞の使い方がネックになっているケースとイデオムなどの独特の言い回しを理解していない、覚えていないために意味がとれないケースに分けられる。

会話系のダイアログの場合、あくまでも日常会話をどの程度理解できますか（聞けますか）？ということが出題のポイントであるので、経済や法律、科学など特殊な業界や産業の専門用語、あるいは新聞などでしかお目にかかれない、口語体には通常使われない単語というのは基本的に出题されない。

仮に出題されたとしてもそれは問題の本論ではなく、解答を導く上で直接のキーにはならないことが多い。

であるので、「音は正確に捉えられていても、その意味がわからない」理由としては、基本動詞の使い方を十分に理解していないケースと良く使われるイデオムなどの表現に慣れていないケースに分けられ、この二つを注意して勉強していけば、会話系のリスニング力アップにつながるはずである。

まず、基本動詞の使い方を理解することから説明する。

これを考えるたびに、私はいつも、英語は非常に機能的にできている言葉なのだなあと感心してしまうのだが、英語の基本動詞は非常に多くの意味を **imply** 内包し、いやになるくらい多くのシチュエーションで使われる。この現象をポジティブに捕らえれば、いろんな意味で上手く活用されている、と形容できる。

基本動詞とはベーシックな意味のほかに、**HAVE** など時制を構成する助動詞として使われる語、**MAKE, GET, LET** など使役の意味を有する語、**TAKE, GIVE** など目的語あるいは補語をともなって様々な意味を表す語のことである。

たとえば、日常では **make** という語はイベントなどに出席できる、約束を履行することができるという意味で使われる。日本語に訳すと少々硬いが要するにちょっと

食事やバーに行くなど、みんなでつるんで遊ぼうという話があったとき、これに行けるのかどうなのか自分のスタンスを表す動詞として使われる。**Are you going to come to the party tonight?** と聞かれたとき、その前に約束があったり、仕事が終わるそうもなかったり、イマイチ乗り気でなかったり、メンバーによって考えようかと思っているときには、**I 'm not sure if I can make it.**とすることができる。どうしてなのか、どういう条件を整えば **make it** 来れると言えるのかは別として、とりあえず相手からの質問には **make** を使って返すことができる。

いろんな条件をクリアして、イベントの会場に行けば、**Oh, you made it!** ああ、間に合ったんだ！（来ることができたんだ！）と語りかけられるのである。

さらに **GET** は目的語+補語（現在分詞、過去分詞、形容詞、不定詞）の形で本当に良く多用される。これは、ネイティブも好んで使う表現であり、なおかつ日本語の概念には存在しない（説明しにくい）文型であるので、試験では頻出である。

MBA のグループワーキングをしている際、だれもケース（具体的なビジネス例のこと）自体を読んでいなかったの、アメリカ人のチームメイトが「**Everyone has to get the case read by tomorrow** とにかくみんなこのケースを読まれた状態にしてこななければならない（直訳）」と言った際に、ああなるほど、「読んでくること、最低でも目を通してくること」とは **Get** を使って、こう表現できるのかと新鮮な驚きを感じたものである。

英語では、基本動詞のコアの意味を中心に、複数の語を伴って様々なシチュエーションを描写し、語るることができる。英語にこなれた人、あるいはヨーロッパ系言語に慣れた人々はこうした発想方法を生まれたときから体得しているので、特段苦労は必要ない。けれども、特にわれわれ日本語ネイティブの民は英語に対するエキスポージャーが極端に少ないので、こうした表現に特に気を使わなければいけない。

スクリプトを見る際には、まずこうした基本単語の使われ方をじっくりチェックするべきである。

さて、次に話されていることの意味が取れない理由として、イディオム（熟語）を知らないことが挙げられる。

このイディオムには、前回述べたように基本動詞を中心としたものと、動詞とは関係のない、純粋なイディオムがある。会話では良く使われるが、**at the end of the day** といえば、つまるところ、結局は、最終的などころという意味になり、文字通りの「ある特定の日の終わり」を指しているわけではないのである。

このイディオム問題に対する対策としては、やはりエキスポージャーを増やすことが一番になる。試験対策のイディオム集をやってみることは、短期的に点数を上げるには効果があると思うが、こうしたある特定分野に対応した問題集は頻度の高い

ものに焦点を当てていることが多い。試験での出題の頻度の高さが実際の会話での使用頻度の高さに対応しているとは限らない。

逆に試験で全く習わなかったイディオムに遭遇することが実際の会話ではままたまおこるのである。MBA の授業でも、友達との会話でも、今のビジネスレベルでもいろんな人が使う *in terms of* 「～に関して」というイディオムは勉強中には全く触れなかったし、また私の持っている辞書のうちある特定の辞書に記載があるが、載っていない辞書もあるのである。

やはり試験のための教材は、試験という目的のために誰かが作ったものであるもので、ナマの日常会話のすべてのイディオムを網羅することは不可能である。

さらにこうしたテキストはイディオムを覚えさせることを目的としているので、音声が付いている場合が多い。せっかくイディオムを覚えてもそれが実際の言葉で話されたときには意味が取れない、何をいっているのか皆目検討もつかない、ということが起こりがちなのである。

繰り返しになるが、イディオムの力をつけるには、エキスポージャーを高めることである。日本に生まれて暮らしているのであれば、こうしたエキスポージャーを多くすることは難しいが工夫次第である程度は増やせるものである。

映画やドラマはイディオム力アップのためのエキスポージャーには持って来いである。この勉強の仕方は別途項を改めて述べる。

ダイアログを細かくチェックしてみて、言っていることの内容は明らかになったと思う。もうダイアログを最初から最後まで通して聞いてみて、意味不明なところはないはずである。

3.2.2.3.1.3 発音

さて、それではこのダイアログを終わりにして、次のリスニング題材（テキスト）に移る・・・これが初心者が陥りがちな過ちである。繰り返しになるが、聞くことと話すことはワンセット、意味がわかったら、今度は実際に自分の声で繰り返してみなければならない。

まず、最低でも 20 回はスクリプト（文章）を見ながら実際に声に出して読んでみるべきである。こうした音読の際も自分のネックになっていた箇所、音が聞き取れない、意味が聞き取れない場所は重点的に意識しながら読んでみる。

音のリエゾン、日本語にない独特の音はできることならネイティブの発音に限りなく近づけるように真似してやることである。お勧めは、最低一回は自分の発音がど

う聞こえるのか、ネイティブにチェックしてもらうことだが、機会が限られるのでネイティブの発音を注意深く真似ることに注力すべきだと思う。

私の場合は日本人にありがちの、RとLの使い分けができなかったので、ネイティブとマンツーマンで会話のレッスンを受けているときは、これを話す度に先生であるこのネイティブに聞いてもらい、どこが悪いのか指導を仰いだものである。

意味がとれなくて聞こえなかった場合は、会話が話されている実際の状況をなるべくクリアにイメージし、英語の表現をシチュエーションと関連づけながら音読のトレーニングをすることである。

勉強仲間がいるなら、お互いに役割を決め、実際の会話を行っているように読んでみるのもいい。20回読んだら役割を変えてまた20回読めば、トータルの会話を最低20回は繰り返したことになる。

家族やパートナーが相手になってくれそうなときは、積極的に協力をお願いしよう。恥ずかしくてもなんでも、心身が緊張した状態で臨んだトレーニングはかならず効果がある。

練習場所にもよるが、できることならなるべく大声で音読しよう。これまで十分述べたように、自分の声を脳天に響かせ、言葉として認識させることが目的であるので、自分ですら聞き取れない蚊のなくような声でボソボソつぶやいては、音読トレーニングにはならないのである。

3.2.2.3.1.4 暗唱

さて、音読も終えて、ここで学習者の皆さんは、次のダイアログ、まったく新しい会話を聞こうかなあと考えていることと思う。しかし、が、しかし、今しばらくまっていたきたい。ここで次のダイアログ、その次と移っていったら、せっかく勉強した内容が身に付かないのである。

聞き取り、意味のチェック、音読、その後に必ずやっていただきたいことは、ダイアログ自体の暗唱である。短い会話文なので覚えるのにさほどの苦労はないと思う。繰り返し聞いて、さらに自分の声で読んでるので、脳はある程度言語として認識している。けれども脳に、未知の単語をつながりという意味をもった一連のシグナルとして認識させるには、この暗唱という作業が不可欠になる。

ネイティブであれば、日常会話の一こま一こまを発音するのに暗記は必要ない。けれども日本人が外国語としての英語を発するときには、同じようには行かない。音読をあれだけ繰り返しても、さあ、今読んだ言葉をそらで言ってごらんさいといわれたとき、おそらく読んだ言葉のおそらく50%も出てこないのではないだろうか？

一文、一文を丁寧に暗記し、これらがきっちり言えるようになったらダイアログ自体を通して言えるまで暗唱してみる。実際に暗唱してみようとすると、細かい発音のつながり、当たり前と思ってチェックしていなかった事項、基本的単語の生きた使い方が体に染み込んで覚えられるようになってくる。

外国語を話すことが、黙読、朗読という受身の経験ではなく、能動の生きた自分の経験に近い感触で覚えることができる。英語は学問よりもスポーツであると言った理由はこれで、誰かに支えられて、手取り足取りゴルフのスウィングの練習をするだけでは不十分であり、実際にボールを打ってみて始めてスウィングの練習になると似ている。

ダイアログ自体を暗記して、発声することを最低20回は繰り返す。そうすることによって、英語はより自分の言語中枢の奥深くに染み込んでいく。

一度覚えたものは忘れてしまってもかまわない、過去のことにも神経質になりすぎると勉強自体が進まなくなる。日々新しいエキスポージャーを取り入れることに比べれば、過去覚えたことの定着度は、ここではあまり重要ではない。

重要なことは、暗記という緊張を脳に与えて、文章と文章のやりとりされた生きた会話を身をもって覚えていくことである。

最初の聞き取りから意味の確認、音読、暗記を終えたら、次のダイアログに移り同じ作業を繰り返す。試験対策の問題集ではいくつかの会話がまとまって収録されている場合があるので、複数の会話ダイアログを一度にやることも可能である。けれども必要なことは、各ダイアログについて、聞き取り、ダイアログチェック、音読、暗唱の作業は決して省略しないことである。

3.2.2.3.2 理論系ダイアログ

次に理論系トレーニング方法について説明する。

まずリスニングにあまり慣れていない人にとっては、トフルのパートBのダイアログを最初に聞いたときに陥りがちなシチュエーションは次のように描写できる。

はじめの一文、二文は理解できるが、読まれるスピードが早すぎるのか、意味不明な単語の羅列になるためか、とにかく話の流れについていけなくなり、あたかもお経が頭の中に響いているかのごとく、ダイアログが終わるまで、ただ音声だけを無意味に聞き流してしまうという状況である。

心電図のシグナルに例えると、最初にいくつかの心音の反応があるが、そのあとツーッと一直線になる状態が続いているようなもので、いわば本人に意識（聞いて理解するという脳のシグナル）は全くなく、あれよあれよという間に、気が付けばダイアログが終了して、問題がだされていた・・・こんな状況は初心者ならばだれでも経験しているはずである。

かくゆう私も例外ではない。最初は、よし聞くぞ！と意気込んでヘッドホンを硬く耳に押し当てたりするものの、自分の頭がダイアログについていけない。蚊に刺された脚のふくらはぎなどを引っ搔いては、ああ、いかんいかん、ダイアログに集中して！と言いつけさせるが、もう何の話なんだがさっぱりわからず、気が付くとさて問題です、のタイミングになっていた・・・ということは本当によくあった。

トフルの勉強を始めた人に言うておく、あなただけでは、皆こうした冷や汗をかきような瞬間を経験しているのである。

こんな状況であるので、最初のうちは、理論系リスニングの点数がでなくて当たり前である。正解率は20%いけばいいほうではないだろうか。これを地道なリスニングトレーニングによってほぼ70%から90%にすることを心がけていただきたい。

少々高いハードルのように思われるかもしれないが、今から思い返せば、トフルで出題されるレベルの理論系リスニングは、癖もなく、理論もしっかりしているので、もしこれが聞けないとすると、実際の英語のレクチャーを本場アメリカで聞いたときは、かなりヤバイのである。

最初の一回目を聞くときは、頭の中が無反応信号ツラを発するままであっても良い。問題は二回目以降で、下記に述べる事項を特に注意して、理論の流れを追ってほしい。

ポイント1 これはなに？

科学系のダイアログの場合、ほとんどまず先にキーワードがでてくる。それも専門用語であるのでほとんどの人にとってはなじみのない言葉である。けれどもそこで、ああ、まったく畑違いの分野のことだ、手も足もでねえや！とあきらめてはいけない。このキーワードは判りやすく言うと、別の言葉で言うと・・・と言いつけ換えされ、より詳細に説明されるのである。ネックとなるのはこうした、Aとは何でしょうか？、言いつけ換える・・・、つまり・・・、という問題提起とそれに対する答え方の表現を英語で理解できるかということなのである。

これらもちろん、英語のエキスポージャーが少ないとなかなかピンとこないが努力次第でかなりわかるようになってくる。私がトフルのリスニングで自分の最高点を取ったときのパートBのダイアログの一つは、科学的実験において、測定機器を設置すること自体に起因する測定誤差をどう解消するか、という内容であった。もちろん私にとつてはまったく畑違いの分野ではあるが、数年たったいまでもこうして思い出せるほど、その内容を理解することができたのである。

ポイント2 異同

Aという概念がでたら、それがそれ以外のキーワードBC、あるいはDと同じなのか違うのか、こうしたことは必ず説明される。講義の形式をとる場合でも、AはBの発展型だと前回の講義で説明したが、重要な違いがあったね、覚えているかな？というトークは本当に良く耳にする。「同じ」という単語に、**same similar, identical, close**と様々な語があるのと同様、異同を表現する文章にもいろんな言い回しがある。やはり問題はこれらが英語で説明されたとき、同じことを言っているのか、違うことをいっているのか、それはなぜなのか、ということが理解できるかどうかである。

ポイント3 対比

先の異同のうち、理論的文章でより掘り下げて論じられるのは異、ことなる部分である。何がことなるのか、どうことなるのか、なぜことなるのか、これらの説明が問題提起の次に待っている理論の流れである。であるので **While, on the other hand, whereas** などの対比語の使われ方に十分注意すべきである。

ポイント4 時間と場所

話の流れを論理的に整理するのに、面的な異同と時間軸という概念は常に意識しておくなければいけない。特に科学系レクチャーにおいては、問題のほとんどはこの二つの概念を軸にして展開される場合が多い。当然前述の、異同、対比もこの時間、場所の概念をミックスした複合形で説明されることになり、ほとんどのリスナーが頭が混乱して、ごちゃごちゃになるのはこうした整理ができないからである。

さて、以上をまとめると、言葉の定義をとらえ、平面と時間軸を中心にした異同に着目し、対比される内容を流れに沿って理解していくことが理論系リスニングの鍵になる。

これらのキーポイントに注意して何回かダイアログを聞いてみる。会話系と違い、リスニングのトレーニングが十分でない間は何度気合を入れて聞いてもあまり判るようにはならないので、聞き入るのはせいぜい5回ぐらいで止めておいて、意味のチェックを慎重に行うようにする。

専門用語についてはあまり神経質になる必要はないが、トフルくらいででてくるサイエンス専門用語は、英語の日常ではパートAで出題されてもおかしくない専門用語がほとんどである。

このダイアログを、まずじっくり読んで理解する。意味のわからない単語は辞書で意味を調べるべきだし、言葉やフレーズが省略されているなら何が省略されているのか、否定語や比較の言い方、関係代名詞の使い方など、日本語にない文法項目をはじめ **a** と **the** の使い分け等日本人にとっては最も苦手とされる項目を丁寧に理解する。

もちろんこのときわからない事は徹底的に人に聞きいて解決するようにする、学校の先生でも友達でも日本人、ネイティブに関係なく人の意見を聞いてみるべきである。一人の人の意見で何となく腑に落ちないなら、自分の腑に落ちる説明をきてみるべきである。

余談になるが、私が参考書を買うときのポイントとしてチェックするのもここである。特定の疑問点についてどの参考書がもっとも自分にわかりやすく説明しているかを確認するのである。その問題すら取り扱っていないものもあるので、このような本は選択肢から外し、納得のいく説明をわかりやすくしているものの中から選ぶようにする。あとはデザインやコストパフォーマンスをみて最終的に絞り込めばよい。

話はまた少々それるが、文法についても若干の考慮が必要である。高校くらいまでの英語で文法はすべてカバーされているが、もともと文法に苦手意識を持っていた人、あるいは文法の中で苦手分野がある、細かいところがうる覚えの人は実際に目にする文章を見ながら苦手な文法事項を確認していく方がいい。

ポイントは再リスニングの時に述べた、定義、異同、対比、時間軸と平面軸であるので、これらの概念を文法に沿った正しい実際の英語ではどのように表現されるのか、ということを理解すべきである。

3.2.2.3.2.1 日本語で言うてみる

内容を理解したら、日本語で意味を声に出して読んでみる。この場合、同時通訳になったつもりで、頭から英語の流れに沿って訳して見るのがいい。

シャドウイングの項で触れたように、単語の固まり、意味のあるまとまったグループで区切り、そのグループごとに頭から訳してみる。これは一見意味のないことのように見えるが実は意外に重要である。頭の中で訳してみても判ったつもりでいても、いざ言葉にだして日本語の置き換えようとすると、実ははっきり判っていなかったということが明らかになり、単語の意味をチェックしたり文法をチェックしたり、というよりポイントを得たチェック作業に戻れるからである。

特に時制や関係代名詞など日本語の文法にもともと概念がないものは注意してチェックする必要がある。

最初のリスニングから、ダイアログのチェック、日本語での音読がすんだら、もう一度、ダイアログを繰り返し聞いてほしい。今度は最初のリスニングとは違って、きちんと意味がわかるはずである。

まずは同じものを最低20回は聞いてみよう。判らない言葉、文型はなくなっているはずであるので、今回はより集中して対比概念を頭の中で捉えていこう。

会話系と同じように、その次がリピーティング（音読）になる。一文ずつ声を出して読んでみる。会話系のように奇妙なリエゾンはないが、それでも自分にとって発音しづらい箇所がでてくる。こういうところがでてきたらチェックし、オリジナルの文章をもう一度丹念に聞いて発音を覚えていく。一文ずつよんでひとつの文章が終われば、頭からもう一度読んでみよう。今度は別のところをつかえるはずなので、また今一度本文にかえってできなかった発音を確認しながら、一つのダイアログをすんなり読めるまで音読をするべきである。

何度読んだか判らなくなるので、正しいという字を書いて回数を数え、リスニングの勉強を始めた初心者のうちは、最低50回くらいは音読をするべきである。

3.2.2.3.2.2 暗唱

さてお決まりのように次は暗唱を行っていただきたい。

まずは一つの文をトランスクリプトをみないでそれと言えるのかためしてみる。一文が間違えずにすんなり出るようになったら次の一文を同じように暗記する。こうして、パラグラフすべての文章を暗記したらパラグラフ単位で言えるかどうか、暗唱していただきたい。

仮に最初の意味のチェック、あるいは音読がおろそかであっても、暗唱する段階になってみれば、さすがに意味と音を意識するはずである。文法をしっかりとチェックしていなければ、重要な語が抜けたり、have だったか had だったかうる覚えの箇所では必ずつまづくので、暗唱というのはリスニング力を伸ばすには不可欠のトレーニング手法になる。

パラグラフをすべていえるようになり、さらにいくつかのパラグラフを集めた文章全体、ダイアログを最初から最後まで通していえるようになって、はじめてリスニングのトレーニングとして意味のあるものとなる。

この暗唱の際に効果的なのはやはり、友達や家族、第三者にチェックしてもらうことである。チェックする相手に文章を見てもらい、自分の抜けた箇所、間違っていて覚えているところ、発音がおかしいところを指摘してもらう。こうした訓練を積み上げていくと自分の弱点がわかる。転換語をいつも抜かすようだと全体的な起承転結を正確に捉えられていない可能性があり、単数複数・時制を間違える場合はおそらく文法問題でもこうした箇所がネックになって、点数が上がらなくなっているはずである。

こうしてダイアログ自体を暗唱し、20回くらい間違えずに言えるようになると、かつて最初に聞いた際には、お経のように頭を通過していた言葉が、しっかりしたつながりを持ったメッセージとして頭に響くようになってくる。

さて、ここで理論系リスニングの肝、もっとも肝要な点について今一度ふれておく。

理論系、たとえばトフルのパート B は、ある理屈のある文章が流れとその内容の理解度を問うものである。

それでは、この理屈のある文章をもっとも良く理解しているのはだれであろうか？

それはいわずと知れたスピーカーであり、授業のダイアログであれば説明者の教授ということになる。もっとも発話者がきちんと筋の通った話し方をするということを前提にしての話であるが・・・

であるので、理論系トレーニングの仕上げとして、実際に聴衆の前でレクチャーをする、あるいは、教壇に立ったつもりで話してみる、という手法も有効である。

大きな声で発音すれば、脳天への響き、言語としての認識もより効果的に行うことができ、緊張をもって言語を話すことができる。こうした緊張は記憶として定着する。しかし実際は、緊張が加わると覚えていることの8割も上手く言葉になって出てこない。だからより真剣に覚えるようになる。

こうした状況に慣れ、すくなくとも最初から最後までつかえずにいえるようになるまで、ホワイトボードを背に、誰かに向かって覚えた講義内容を説明してみることである。

こうしたダイアログへのアプローチを繰り返していけば、あるときふと、話の最初から最後まですんなりと耳から頭の中に入り、ダイアログを聞き終わった途端に、ほう、面白い話だったとつぶやくことができるようになる。

3.2.2.4 速聴

会話系、理論系、そしてこれと平行した映画の勉強・・・と聞けるようになるための英語のトレーニングが着々とすすんでいることと思う。

さて、こうしたトレーニングが軌道にのってきたら、ぜひ試していただきたい英語の「聞き方」がある。

デジタル化された音声データであれば、ほとんど、どのファイル形式でも可能だと思うが、通常の再生スピードよりも若干早くして英語を聞く、速聴である。

私の場合は、リスニング教材などの音声データをいったん MD に落とし、ソニーの MD ウォークマンで速聴モードにして聞いていた。この MD ウォークマンでは 5% から約 50% 程度まで自分の好みに合わせて再生スピードが調整できたような気がする。

この速聴、まずは 10 から 15% くらいで聴いてみることを勧める。これでもかなり早口で、何をいつているのか本当にさっぱりわからないと思う。会話系、理論系でも述べたとおり、意味をおさえて、自分の声で音読を進めているとこうした速聴できいても一つの音のつながりが、はっきり判るようになってくる。もちろん聴きなおす回数と自分の音読スピードにもよるが、とにかく一度この速聴でひとつひとつの音がしっかり聞けるまで一つのダイアログを聴いて発音してもらいたい。

このスピードになれると、CNN などのアナウンサーの話すスピードはずっとゆっくり感じられるはずである。さらにトフルやトイックのリスニングテストでのダイアログもかなりゆっくりと感じられ、話される英語の内容を余裕をもって検討できるため、何を話しているのかの会話の内容に集中することができる。

速聴で聴いた内容を、同じレベルのスピードで発音することを訓練する必要は無いが早いスピードでもパニックったりしないで、おちついて単語を追うようにする、この訓練は行うべきである。

実際の会話でもテストなどで出題される会話でも、比較的早い英語に遭遇することはしばしばである。日本人の多くは、最初の取っ掛かりであきらめ、耳が単語を追うことを止めてしまう。スピードに慣れていれば、ぺらぺらとまくし立てられても付いていけるはずである。

どうか速聴によって速さに慣れ、スピードで圧倒しようとしている英語に食いついていていただきたい。

繰り返し言うが、自らスピードをつけてベラベラとまくし立てる訓練は必要ないが、早く話される英語に慣れておくことは有効である。

3.2.2.5 テスト

ある程度まで、人によって違うが、2～3ヶ月理論系のトレーニングをしたら、自分の成果を試してみよう。

簡単にできるのは、二ヶ国語解説のあるセミナーなどに参加することである。

私が身をおく不動産金融業界でも不動産会社や金融機関、格付機関など様々なところが定期的にセミナーを行っており、どれもだいたい外国人スピーカーがでてくるので、このパートは二ヶ国語解説となる。

逐次解説の場合もあれば、同時通訳のこともあり、あるロジックのある内容が英語で話されるので、その内容の理解度をチェックするにはちょうどいい機会になる。

学生であってもこれから進んでいこうとする分野、あるいは興味あるテーマには積極的に参加することを勧める。多くの場合無料であるので、たとえ自分とは関係の無いテーマであっても積極手にオーディット（聴講）しよう。

業界の人を対象にしているなので、専門用語についての細かい説明はないが、意味は判らなくともそのキーワードを一体どうするのか？何が問題なのか？とういうことは語られると思う。これまでのリスニングの勉強がしっかりできていれば、全く畑違いの内容であっても、要するに何が問題で、それをどうしようとしているのか、という骨子はつかむことができるようになっていくはずである。

スピーカーの話し方如何にもよるので、100%の理解を目標とせず、ようするに、Aということが問題になっているようだけれども、いまのところ、対応策はBしかなくて話かな？くらいわかれば十分である。

理論系のリスニングテキストはやはり試験という目的のために作られたものであるため、実際のビジネス実務に独特の言い回しはカバーできない。であるので、なるべく生きたレクチャーのエキスポージャーを増やし、自分の英語に対する耳をチェックすることである。

3.2.3 映画の勉強の仕方

さて、大変お待たせして申し訳ないが、映画の勉強方法の解説に移る。

さらに、これから映画で英語を勉強しようと思気込んでいる人に大変申し訳ないのだが、最も大切なことを肝に命じていていただきたい。

それは、映画が一番難しい教材である、ということである。映画は主としてハリウッド映画を好む大衆、すなわち標準的なアメリカ人が理解できるように作りこんである。癖も、方言もあれば、法廷など特定の場所でしか発言されない言い回しもある。これらが主としてアメリカ人が通常と感じるスピードで話されるのが映画である。

したがって、映画が全くわからない、本当に難しいと感じてもそれは普通のことであって、落ち込むことでもヒケメを感じることもないのである。

さらに、教材を作っている会社から難易度が付されるが、この難易度は必ずしも自分の感じる難易度とは一致しない。地震の震度と同じであくまでも主体である人間、特に日本人が感じる難しさの程度であるので、個人差があるということをあらかじめ理解しておくべきである。

さて、前置きはこのくらいにして、まず映画の選び方から解説する。

映画を勉強するに当たっては、まず自分の好きな映画を選ぶことである。

好きなものが一番だけれども、特に最初のうちは何をしゃべっているのかの「台本解説」があるものをすすめる。

台本は、アルク出版とスクリーンプレイ、そして DHC の三社がだしており、各 HP にいけば映画の DVD やビデオもいっしょに買うことができる。

ちなみに私がチェックしたところによると、各出版社が出しているトランスクリプト付きの映画は、私が勉強していたころよりも若干数が増えている。その数ある映画のうち、私が独断と偏見で選んだお勧めを紹介する。

交渉人

サミュエル・L・ジャクソンとケビン・スペイシーの演技、言葉の駆け引きはなかなかであり、私が最も真剣に勉強した映画の一つでもある。

サミュエルの黒人英語もそれほど癖があるわけではなく、アメリカ、特に北東にいれば良く耳にするテンポである。ケビン・スペイシーの英語も聞きやすい。特にこの映画の彼の役どころは、あくまでも人質の無事救出を第一に考える刑事（交渉人）の役であるので、それほど早口でまくし立てるわけでもなく、活舌良く理解しやすい英語である。もしも外資に勤めて、ちょっと物わかりのいい、スマートなアメリカ人上司を持ったらちょうどこんなカンジ・・・というノリである。

刑事ものなので犯罪に関する用語も多く出てくるが、Lieutenant（警部補）という言葉は、後述するフォレスト・ガンプでもダン隊長のことを Lieutenant Dan と呼んでおり、私が見る海外映画では比較的良く耳にする言葉なので、知っておいても損はない。

Hostage(人質), conspiracy(陰謀)なども、自らの体験で覚えていて良かったなあと思った訳ではないが、比較的良く耳にする単語なので、これまた覚えておいても損は無い言葉である。

主人公である警察官が仲間殺しの容疑をかけられ、自ら人質をとって立てこもる、その交渉シーンで”How do you know that?なんで、お前がそれをしている?”という台詞がでてくる。これもこなれた英語の表現だが、なんでそれがわかったの? どうしてしているの? という疑問文には Why は使わない、代わりに How をつかって、このように問いかける。

イタリアのビジネススクールで私が友人に、補習は別の教室だよと教えたときに、友人の一人から全く同じ「How do you know that?」を使って聞き返された。教授のアシスタントに聞いたから、と答えながら、私はこの映画のフレーズを思い出し、生きた英語を学び、実戦で使うとはこういうことかと感慨に浸ったものである。

これ以外にも make, have, get など基本動詞の使い方を実際のシチュエーションを通して勉強できる、なかなか優れた映画だとおもう。

真剣に英語を勉強していたときから4年あまりたった今、この映画を見返してみた。

字幕を確認したくなるシーンがいくつかあるが、だいたい役者の話している内容は把握できる。いまから思うと、英語の内容としても難しい、かなりの上級者向けだと思う。が、内容の面白さと駆け引きの巧みさを、基本用語を通じて勉強できるので、アクション、サスペンス好きの方には、ぜひお勧めする作品である。

ゴースト

これは私が最初に勉強した映画教材である。今あらためて見返してみると、パトリック・スウェイジ、デミ・ムーアの英語はこれまた北東部でありがちなスピードとイントネーションだなあという印象で（ともに役者としてのキャリアがあるので・・・）それほど癖があるわけでもないとおもう。

難易度はそれほど高くないが、ウーピー・ゴールドバーグの黒人スラングなど慣れるのに少々時間がかかる。悪役のアメリカ人も典型的なニュー Yorker で早くて聞き取りにくい英語を話す。こうしたところに注意して勉強すれば、テキストとしてはきわめてスタンダードなものだと思う。

ウーピー扮する黒人霊媒師が、銀行から 400 万ドルの小切手を引き出すシーンで 4-million dollars!! と絶叫する。これは文法で良く出題されるのだが、4 と複数形であっても million は形容詞となるので複数にはせず、かわりに単位のみを dollars と複数形にする。文法の問題でこのパターンは頻出であったが、これがでるたびに、私はこの映画の彼女の台詞を思い出していた。

エキスポージャーを増やしてそこから英語力をつけるとはこういうことである。

ボディガード

試験の点数が伸び悩んで、5ヶ月くらいの間スランプに陥っていたときに勉強していた映画なのであまりいい印象はないが、これもやはりホイットニー・ヒューストンの黒人英語になれば、ケビン・コスナーのボソボソしたしゃべりに慣れれば、音楽好きの人は特に気に入って勉強できる教材ではないかと思う。

以上はスクリーンプレイ出版のトランスクリプトであるが、ここからは評決やザ・ファームなど法廷ものもでてくる。最初から裁判ものを勉強するのはやや抵抗があるかもしれないが、法廷ものはある程度理屈がしっかりしていること、陪審員などに説明するため比較的、語りが活ぜつ良くわかりやすいことから、映画の勉強をはじめて、まだ間が無いころであっても、割とすんなり入っていけるテキストではないかと思う。

特に法学部の人、海外で活躍したいと思っている人には必見であるし、また訴訟社会と言われるアメリカを垣間見るにもいいテキストではないかとおもう。

私に映画の勉強の仕方を教えてくれた先生は、ロバート・デ・ニーロのミッドナイトランを勧めた。実際に話される英語の巧みさ、面白さ、言葉の駆け引きの上手さを実感できるのはこの作品なのだそうである。ただ、残念なことにこのトランスクリプトが絶版

になっており、映像もなかなか入手できないことが難である。オークションなどででてくれば、ぜひ買って見てみることをお勧めする。

余談だがデ・ニーロの英語は本当にききづらい。ニューヨークに多いイタリア系アメリカンなので、トランスクリプトを見ながら聞いても、どうやってもそうは聞こえないよ！と突っ込みたくなるような癖のある英語なので、聞き取れなくてもあまり気にしないで勉強していただきたい。

アルク出版も人気になった映画はいろいろ出しているようである。

トム・ハンクスが好きな私としては、アポロ13、ビッグ（子供がある日突然大人になってしまう話）などをお勧めしたい。彼の英語も最初はちょっと聞きにくいがそれほど癖があるわけではない。

前述の三社以外からトランスクリプトが出ているが、フォレスト・ガンプは私のブログでもたびたびお勧めしている、なかなか良い映画である。ガンプの天真爛漫さがウケているのか、ガンプの親友ババが黒人であるからか、シュジンはいたくこの映画を気に入っており、たびたびガンプのセリフを真似したりなどしている。

ボストン出身のアメリカ人に聞いたところ、トム・ハンクスは独特の南部（アラバマ）訛りを上手く表現しているようで、流暢なアメリカ英語を身につけようと思っている人には弊害があるかもしれない。

けれどもガンプの成長に合わせて、アメリカの歴史上有名な人物が次々に登場し、ベトナム戦争なども取り上げられるので、アメリカの歴史自体、アメリカ人というものを非常にコンサイスな形で理解しようとする人には格好の学習教材である。

このアルクのスクリーンシリーズの中でもシェークスピアもの、ロミオとジュリエットなどは、原作のセリフが忠実に出てくるので、シェークスピア文学を研究している人にはいいが、現代のコミュニケーションの手段としての英語を身につける場合にはお勧めできない。少なくとも英語を勉強する初級の段階では、避けた方がいい教材である。

DHL のシナリオも映画の背景や言葉の使い方など、細かいことを解説していてとてもいいと思う。

「海辺の家」は建築家の家族、とは言っても別れた奥さんだったり、反抗期の息子だったりするのだけれど、と病を抱える彼、建築家自身の話である。私も何度か字幕を見ないで見てみたが、コメディタッチのところも多く、比較的理解しやすい英語が話されていたように思う。

「海の上のピアニスト」という邦題の原題は「The legend of 1900」といい、豪華客船の中で拾われた赤ん坊の名前「1900」に由来する。これは再度チェックできなかったのだ

が、ティム・ロスの話す英語もそれほどアクセントが強くなかったと記憶している。監督はトルナトーレで音楽がモリコーネなので、映像と旋律が絶妙にマッチしていて美しい。イタリア人の作るニクイ演出を知ることができる一品である。

さて、これはお勧めなんだけれども、ちょっと注意していただきたい映画としては、ラブ・アクチュアリーがある。これはいくつかの小さいラブストーリーを全体としてまとめて描いているもので、この中で私が特に好きなのは、恋人に浮気された作家と傷心の彼の世話をするポルトガル人女性のエピソードである。

お互い言いたいことはたくさんあるのだけれど、共通の言葉が無い。クリスマスの休みを取って国に帰った女性は真剣に英語を、作家である彼はこれまた真剣にポルトガル語を勉強するのである。

またまた私事で恐縮なのだが、かつて私とシュジンも同じようなことをしていた。ブラジルから日本に一時帰国した際、毎日シュジン宅の電話にでる姑と話すため、私はポルトガル語を勉強し、シュジンは私の残していったメモに書かれた私の名前を毎日漢字で書く練習をしていたのである。

これ以外にもほのぼのとするエピソードがちりばめられており、とてもお勧めの映画なのだが、注意することが一つ。

ここで話される英語はほとんどブリティッシュなのである。前述のエピソードの作家であるコリン・ファースやヒュー・グラントなど見事なブリティッシュであるので、アクセントや言い回しなど、自分のコミュニケーションのツールとして身につける英語としては混乱する恐れがある。

もっともイギリスに留学することを考えているとか、ブリティッシュを身に着けなければいけない理由があれば別だが、やはり学習材料の英語エキスポージャーとしてはブリティッシュは混合しないことをすすめる。

日本語の訳が入手できるのは以上のトランスクリプトだが、アメリカのサイトからも映画のシナリオをダウンロードできる。

私もこれで、めぐり逢えたら（トム・ハンクスとメグ・ライアン）やメリーに首ったけ、などのシナリオをダウンロードしたが、実際の映画とは多少ことなることもあり、キチンと勉強できる教材とは言いがたかった。

さて勉強する映画も決まり、このトランスクリプトも入手したら、着々と勉強を進めていきたい。

このスクリプト台本と映画は別々に勉強する。

まず映画は映画で一度、通して見てみる。このときにはもちろん日本語の字幕をみても構わない。ごくごく普通の聴衆のように、内容を純粹に見る。

一度みて内容を理解したら、今度は字幕を自分の理解度に合わせて換えながら見ていく。最初は日本語字幕、次は英語、そして字幕なしなどだいたい10回くらい繰り返して見る。

これと平行して台本をよんでいく。最初は意味を理解し、特に会話系リスニングのトレーニング方法でも触れたように、**make, have, get, take** などの基本動詞、独特の言い回し（イディオム）の使い方に注意して理解していく。

次に実際に声にだして読んでみる。

まずは、一ページにつき、三十回くらい読んでみることをすすめる。いちいちその場で実際の発音をチェックしなくても構わないので、自分の日本語アクセントがあっても気にせずに、音読を繰り返す。

そのあと、その一ページに書いてある台詞(セリフ)を暗記してみる。重要なことは、ただお経を読むように暗記するのではなく、きちんと感情を込めるということである。

もともと映画は実際の人間世界に起こるあらゆるシチュエーションを役者がシミュレーションしているものであるので、ここでの会話は人間の感情や日常生活の背景とは密接不可分のものなのである。

映画としてこれらの感情や背景に映像がついている分だけ、感情を込めたり、自分がそこに入り込みやすい。たとえば電車に乗り遅れるシーンがあれば、その英語表現と「遅れた！しまった！」という感情は関連づけて脳に記憶される。であるので、同じような経験をして同じような「しまった！」という感情にはそこにフィットした英語がでてくるようになる。

もちろん、覚えた内容はすぐ忘れてしまっても構わない、神経質にどれほど覚えていられるかをチェックする必要は無い。また新たな表現を勉強しているうちに自然とこうした感情と一体になった表現が増えてくる。

日本で生活しエキスポージャーが限られる中では、こうして感情とくっついた表現を記憶していくことは新たなエキスポージャーを得るのとほぼ同じような効果が期待できるのである。

その場その場のシチュエーションを思い浮かべて、シナリオの一ページ文を暗記する。この一ページが終わったところで次のページも同じようにやってみる。また次のページも・・・と三ページくらい読みすすめたところで、この3ページをまとめて言うことができるか試してみる。

ここでも会話系のトレーニングで述べたのと同じように、覚えたつもりであっても、重要な話の転換語、基本動詞を使った言い回し、関係代名詞など、自分の苦手な箇所がネックになるはずである。

であるので、こうした暗記をおろそかにせず、実際の生きた会話の中では、どういう使い方をされるのかに重点をおいて、じっくりと覚えていくべきである。

暗記は三ページ分くらいを一つの目途とする。三ページ分の暗記が終われば、また次のページから意味を理解し、音読し、暗記していく。3ページまで暗記したらこの3ページをまとめて言えるか試してみる。こうしてひとつの映画の最初から最後まで、台本を見ながら内容を理解し、暗記を繰り返していく。

映画も一日に全部見きれないわけではないので、おそらく10から20分くらいでやめ、翌日に続きをみる、一本を見終わるのがおおむね4から5日くらいというところだろうか、最後まで終わったらまた最初から・・・という見方をしていく。

並行して読んでいる台本の読み込み・暗記を1冊終えるくらいのところが、平行して見ている映画をおおむね10回程度繰り返してみたあたりになる。もちろんこれはあくまで目安であるので、映画自体の長さによってはもう少しかかる場合もあるし、映画の勉強を始めて、最初のうちは一冊終えるのに時間がかかるが、慣れてくるとスムーズに英語が定着するようになってくる。

一つの映画を終えたら、次の映画をゲットして、トランスクリプトと映像を切り離しつつ（別々に並行して）、理解しながら見ていく。

なれないうちは、本当に面倒くさい作業のように見えるかもしれない。けれども、繰り返しになるが、日本にいて日本語漬けの生活環境にいるのだから、この限られたエキスポージャーの中で英語のエキスポージャーを高めていくには、映画はとてつもない材料なのである。

見るのも嫌になるほどやる必要はないが、毎日少しずつでも進めていくことである。こうして地道にコツコツつづけていけば、あるときふと、自分のリスニング能力、聞ける力がついているのがわかるようになるはずである。

3.2.4 教材を使わないリスニング

3.2.4.1 英語で考えよう作戦

これは私が英語の点数があがらず、四苦八苦していた時代に、すでに私の目指す学校の卒業生となって、日本でバリバリ活躍していた方から教えていただいた方法である。

繰り返しになるが、日本にいて、朝から晩まで日本語を使っていたら英語に対するエキスポージャーは限られる。今日中に仕上げなければならない企画書をそっちのけで、CNNのテープを聴いていたら、上司からどやさされるだろうし、周りの人の目を気にしながら電車の中でボソボソ英語を繰り返していても、あまり頭に入らない。

ではあるが、誰にも邪魔されずに英語のエキスポージャーを高める空間があるとすれば、それは自分の頭の中である。日本にいて日本語のシャワーを浴びてはいても、常に頭のなかに思い巡らせる言葉を英語にすれば、英語へのエキスポージャーは高まる。

朝起きてから、寝るまでの間、ああ・・・もう朝か、起きるのやだなあ・・・今日は何があるんだっけ・・・そうかあのミーティングがあるのか、いかにくちなあ・・・というようなことを英語で言えるか試してみる。

もちろん完璧でなくてかまわない。英語としてこなれた表現でなくても、自分のボキャブラリーのなかで少しでも英語で考える習慣をつけることが大切なのである。

非常に地道な努力ではあるが、もちろん終始日本語漬けの生活に比べればはるかに英語へのエキスポージャーは高まっている。

この英語で考えよう作戦を実行するにあたって注意することは、無理をしないということである。生まれてこのかた何十年も日本語で思考する習慣がついているのだから、考える言語も自然と日本語に戻って構わない。神経質になって英語思考パターンを無理やり自分の頭に強要するのではなく、ああ、そうだったな、英語英語・・・と思い出したら続ける程度でいいのである。

思考をすべて英語にしようと思うと、この表現は英語でどう言ったらいいのかなあ、と疑問に思うことが必ずでてくる。自分で訳すところだけけど、果たしてこれでいいのかしらん・・・と迷う表現だらけだと思う。

こうした表現は書きとめて文章にし、あとでネイティブにチェックしてもらおうといい。さらに、こなれたネイティブの作る英語をこれまたネイティブの発音で実際にしゃべってもらい、それを録音しておく。こうした音声データを覚えるまで聞けば、その表現は確実に自分のものになる。

人が作った文章を覚えこむより、自分が本当に言いたい英語を正しく誤解のない表現で、正しい発音で覚えるという意味ではるかに身につくし、表現力を高める上でもとても有効なのである。

3.2.4.2 ホストマザーの暮らし

もう10年近くも前のことになるが、私は自宅に海外留学生をホームステイさせていたことがある。

学生の国籍はアジアであったり、イタリアであったり様々だったが数週間から数ヶ月、自宅の空いている一室を提供し、日本での生活をいろいろ面倒みたりしたものである。

家賃が高いことで有名な都市、東京にあって便利で快適な居住空間を提供していたことは、まさに情けは人のためならずであり、彼ら留学生の便宜のみではなかった。人助けという趣旨もあって始めたホームステイだったけれども、私の英語のエクスポージャーを高める上で、大いに役に立っていたのである。

一般にアジアのなかでもシンガポールなどは英語が共通語の一つになっており、みんなごく普通に英語を話す。アジアでそこそこ裕福な家庭の子女は、とりあえず英語を問題なく話すように、比較的小さいときから教育されるようである。

思えば当時の私の英語は、それほどこなれた英語というわけではないが（今もそんなにこなれた英語を話してはいないけれども・・・）、我が家に滞在していた彼ら達がいろいろな気を使ってくれていたのだと思う。私のお粗末な発音と、異様に不自然な言い回しも、年長者である私が話す言葉として敬意を払って聞いてくれていた。

もちろん日本での生活習慣の違いから、朝起きてから寝るまでの間、いろいろな話題を英語で話さなければならず、また生活をともにするという意味で気苦労が絶えない。

しかしながら、こうしたホストマザーの暮らしも、エクスポージャーを高め、日常生活に英語を取り入れるという意味では、非常に有意義なものであった。

今でこそ、一つの家なりアパートなどを他人とシェアする習慣が認識されるようになったが、10年ちかく前は、海外からのホームステイ学生を受け入れる日本人はよほどの物好きと思われていたようである。

ホストマザーの生活が私の英語力を格段にアップさせたとは思わないが、少なくとも外国語へのエクスポージャーを高めるという意味でそれなりの効果はあったものと確信している。

3.3 プラスαのテクニック

3.3.1 会話学校の選び方

会話学校に通えば聞けるようになる！と信じている方に対するアドバイスである。

もちろん何もしないよりはエキスポージャーが高いので、その意味での効果は期待できる。であるけれども、やはり使い方を間違えるとコストばかりかかってあまり効果が期待できない・・・という事態になるので、大いに注意が必要である。

まず学校を選ぶ際の注意事項を挙げておく。
基本的には、大手であれば、どこも大差はないとおもう。

それよりも、変更ができること、グループレッスンであること、内容を録音できること、この三つが語学学校を選ぶ決め手になる。どんなテキストを使っているか、どうやって授業をすすめているか、については意外と思われるかもしれないが、会話教室ではあまり問題にならない。

まず、変更できることであるが、これは仕事をしている人には特に必要なことである。忙しくて行けないこと、歓送迎会などのイベントで会話学校を休まなければいけないことは、多々ある。こうして欠席した分がたびたび出てくると内容がわからなくなり、わからなくなるとイヤになっていかなくなるので、休んだ分はきちんと埋め合わせできる、変更（振替）制度があるところを選ぶべきである。そして行けなかった日は早めに振り替え、英語のエキスポージャーを得る経験にあまりインターバルをあけないようにすべきである。

有料で振り替えができるところもあるので、費用対効果はこうした振り替えの可否も考慮して比較するべきである。

さて、次にグループ学習を進める理由である。

日本にある英語会話学校は、生徒のほとんどが日本人である確立が非常に高いので、プライベートよりもグループレッスンを勧める。自分とは仕事や生活、趣味の違う人が集まっておしゃべりをするからこそ、自分の守備範囲以外の言葉や表現も覚えることができる。

子供の話、料理の話、コンピューターの話、自分と趣味や環境が違う人が集まってお互いの語れる内容を語りあって初めて、そのネタを互いにシェアすることができる。であるので、そこで、ある特定のテーマが話しに上ったときの相槌のうちかた、受け答えの仕方、質問の返し方が勉強になる。

プライベートで勉強すると、内容はどうしても自分の得意な内容、すなわち話せる内容になり、そこから先の話題の広がりが無い。

たとえばある生徒がニュージーランドに旅行に行ったとする。先生が、どうだった、ラグビーは見たかい？と話をふったとき、仮にプライベートのレッスンでこの当の生徒がラグビーに全く興味を持っていないときには、いいえ、行きませんでしたという単純な受け答えが返ってくる。他に話をふる先がないので会話はここで終了、もうこれ以上ラグビーの話にいかないだろう。

けれどもこれがグループレッスンで、グループの中に一人でもラグビーの好きな生徒がいれば、キミはそういえば、ラグビーが好きだったよね、と先生が話を発展させる糸口を見つけることができる。この別の生徒とのやり取りを通じて、回りの生徒も、ゲームの内容の話し方、ラグビーというスポーツを語る時の独特の表現、相手の好みの聞き方、試合状況の説明方法などを英語でどう表現するのか学ぶことができる。

内容によってはマニアックになりがちであるし、また日本語のアクセントが随所に混じってしまうのだが、ネイティブがきちんとフォローする限り、自分の知らない分野の英語のエキスポージャーがダントツに得られる手段としてグループ会話は有効なのである。

さらにもう一つ重要なことがある。会話スクールで「みんなが会話する」といってもほとんどは外人の先生が話す割合が圧倒的に大きいと思う。この先生が話していることを録音できるところ、授業の録音可能な学校を選ぶべきである。学校によっては録音を認めないところもあるので、こういう学校は基本的に除外している。

英会話学校に行って、1時間を費やし、先生と簡単な挨拶程度を交す。もうし訳ないが、この程度では効果はゼロである。人の頭はコンピューターのように瞬時に何もかも記憶できるわけではないので、やったことはすぐに忘れてしまう。学校の授業ならノートを取る事ができるが、会話学校のミソ（肝だろうか・・・？）は英語で話されている日常会話である。であるので、これを記録（録音）しないでは、何の効果も期待できない。

録音すると何がいいかというと、録音された内容は繰り返し、いつでもどこでも聴いて復習する（覚えこむ）ことができるのである。電車の中やお風呂の中でも繰り返し、覚えるまで聴くことができる。であるので、自分の話している箇所だけでなく人が話しているところもすべて録音するべきである。なぜならばそれはネイティブが他人の提供した話題（多くの場合は日常会話だろう）についてコメントしている音声であり、貴重な活きた英語へのエキスポージャーになるからである。

3.3.2 本当に三ヶ月が可能か？

ネットでリスニングトレーニング、英語上達というキーワードを入力してリサーチしていると「三ヶ月で〇点アップ！」など、ほとんどダイエットCMに近いような文言に遭遇する。

何度もこのブログでいやというほど強調しているが、リスニング力アップには時間がかかる、最低でも二から三ヶ月は実力がついていくことが目に見えてくるまでにかかるのである。人によってはほんの少し点数が上がるのに5ヶ月から半年かかる場合もある。

この間、毎日つづけること、という鉄則があるので、多くの人はこの鉄則を信じてことができず、どうせこんな努力をつづけていてもちっとも聞けるようにならないや！とあきらめ、「ほんの少しの地道な努力」を忘れてしまうのである。

二ヶ月、三ヶ月つづけても効果が出ない人は、こうしたコピーに激しい興味を覚え、なかば救世主を見つけるかのごとく、彼らの提供するプログラムにサインインしてしまうのではなかろうか？

これはイカン、そんなはずはない、という気持ちで「学習者の喜びの声」欄をつらつらと覗いてみた。

ほほう・・・なるほど・・・である。あまり詳細には語れないのだが、これはどうも私がアメリカで体験した英語力パワーアップ大作戦を、日本で同じような環境を作りだし、強制的に実行するようなものらしい。このパワーアップ大作戦の詳細は、また別途述べるとして、パワーアップは総合英語力のアップなので、当然ながらこの中にはリスニング力を高めることも含まれている。

私がアメリカにいたとき、真剣に力をいれたのは英語でスピーチをすることであり、私のスピーチが終わったとたん、一旦静まり返った会場から、聴衆からの大きな拍手が聞こえるようになった頃、普通の授業あるいは講演会やリクルーティングのプレゼンテーションでも、ああ人の言っている英語がずいぶんわかるようになったなあと実感したものである。

さて、戻ってこの広告の真意であるが、要するに私が実行したように、みずから教壇にたって講釈をたれるくらいにあなたの英語能力をあげられれば、聞くのもさぞかし楽になる、というのが言わんとしている内容のようであった。

だがこれは、あくまでもある程度の基礎ができているレベルでの話である。

私の例で行けば、英語圏（英語のエキスポージャー溢れるという意味）で生活し

1年以上がたったころである。それでもアメリカ英語のスピード、独特のニュアンスなどについていけず、イラついていたとき、あるコミュニケーションスキルをアップさせる講座にでて、ああ、こうすれば、今なら英語が格段に伸びていくなあという確信に後押しされて始めた特訓であった。

ベースとなるある程度の英語力があり、エキスポージャーがこれ以上にならないほど溢れ、かつネイティブの的確なサポートがあり、さらに実戦の場が定期的に与えられていたのである。

このような環境であれば、間違いなく総合的な英語力が伸びる、であるのでリスニング力もしっかりである。

けれどもここで、注意して聞いていただきたい、このような基礎力、環境、集中力のうちどれか一つでも欠けていたら、短期間でみるみるアップは望めないのである。

どうか、教材や予備校を選ぶ前に、広告の甘いわなと真の英語力のアップ、そして聞けるようになるには、ということをよくよく考えてみていただきたい。

重ねて繰り返す、英語という特別な能力を身につけるには、地道に毎日つづけるのが、一番の近道なのである。

3.3.3 真剣に集中するために、半身浴

さてさて、この「聞けるようになろう」をはじめてからはや二ヶ月あまりが過ぎ、英語のエキスポージャーを高める練習、あるいはリスニングのトレーニングをはじめてから、少なくとも1ヶ月以上はたっているものと思う。

私も本当に苦勞したことだが、地道な音読と暗記はどこまでもストイックになれるので、へたをすれば自分を追いつめることにもなる。コツコツと暗記を繰り返すことは時として本当に孤独な勉強になりがちである。

試験の点数が伸びたり、努力の成果が形になって現れればいいが、何度もいうようにこれにはかなり時間を要する。であるので、地道な努力を続けていても、暗中模索、はたしてこれでいいのかどうか不安になって、スランプに陥いるのもこの時期にありがちの症状なのである。

であるので、こうした状況を乗り越え、英語の理解も暗記もスムーズにでき、学ぶことが楽しくなる方法をご紹介します。

インスピレーションと記憶力を高め、頭を常に冴えた状態にする勉強方法、それは半身浴である。

まず、お風呂の湯船に座り（座椅子を使っても可）、みぞおちの辺りまでお湯をはる。注意するのはこのお湯の温度で、熱すぎても冷たすぎでもいけない。時間がたつとぬるくなることを考えて、「ちょうどいい」か「やや熱いかなあ」くらいの温度ではじめていただきたい。温度は40度よりも低く保つようにし、冷たく感じるようになったらお風呂の栓を抜いて冷たい湯を出し、暖かいお湯を注いで湯船の中全体を一定の温度に保つようにする。

両手はお湯につけず出しておく。この状態で20分以上経つと、内臓および脳がシャープになり、頭がシャッキッと冴えてくる。疑っている方に、どうぞ、だまされたと思って一度試していただきたい。

私は齡（よわい）三十台半ば過ぎにして、海外のMBAスケジュールをすべてこなし、なんとか卒業できたのは、この半身浴をしながら勉強および暗記をしたからだと自信をもって言える。

この下半身をあっためる作戦は全体の気のめぐりを良くするので、頭に血が上ってカッとしたり、怒ったりすることからくる弊害をすべて防いでくれる。内臓のめぐりも良くなるので、ほとんどの病気には実はこれが一番よく効く治療法だということも、東洋医学では広く理解されているのである。

もし、バスタブに漬かれなかったら、足湯でもいい。バケツにお湯をはって、足をつけるのである。くるぶしから15センチ上くらいまでお湯に浸せば経絡をカバーしているので半身浴と同じような効果がある。

足をつけただけで、じんわりと気持ちよく、リラックスできるはずである。20分以上つけているとしっとり汗をかいた状態になり、頭も冴えてくる。私は良くこの状態で履歴書を書いたり、ブログの内容をワープロ打ちしたりしていた。

一つ付け加えさせていただけば、こうした集中した環境では、いい言語をより多く聞くようにするということである。MBAをやっている間は階級や点数主義、国家ベースでも個人ベースでもいわゆる利己主義を強く感じ、周りの人の発言をききたくないと思うことがあった。

ストレスを感じるたびにキーンという耳鳴りがいつもしていたのを覚えている。あとから気功の先生にきくと、ストレスも耳鳴りの原因の一つだというのである。つまり、聞きたくない言葉が発せられたときは、頭痛や耳鳴りがすることが実験的にわかっていると教えられた。

であるので自分の集中力や暗記力が高まっているときは特に本当にいい英語を聞いていただきたい。これは何も発音やイントネーションの美しさのみをいうのではない。やさしさと尊敬、思いやりにあふれた言語に多くふれるべき、という話される言葉の質を問

題にしているのである。人間と同じで、外見がどれほど美しくても、その内面がうすっぺらであったなら、いい感じを与えないのと似ている。

さらに、こうしたいい英語は簡単に覚えやすい。覚える労力が同じならば、嫌味や皮肉ではなく、いい表現を覚えることにエネルギーを費やした方がいい。

暗記力、集中力で悩む方へ、ぜひぜひ一度、半身浴をしながら良い英語をきくことをお試しください。

3.3.4 試験を受けよう

ある程度勉強を継続させたら試験をうけてみよう。ほとんど確信を持っていえることだが、試験というのは客観的に自分の実力を測るいい仕組みである。努力すれば成果が出るし、勉強しなければそれまでである。勘はほとんど当たらない。

試験の受け方について一つアドバイスをさせていただくと、トフルなど一ヶ月に一回と受験制限があるものについてはその予約のしかた、実際のレベルチェックのインターバルに若干のテクニックが必要である。

何度も言うがレベルの上がり方は比例直線的ではなく、階段状で次の段階へと実力があるのに最低二ヶ月は必要になる。であるので、毎月一回の受験制限があるものをほぼ毎月、30日ごとに受けるのは全くナンセンスなのである。

たとえば5月の初めに勉強を開始したとする。7月の最初はおそらく実力をチェックする意味でとてもいいタイミングであろう。個人のもともとの英語レベルにもよるが早い人はここで点数のアップが見られる。ほとんどの人はここではあまりリスニング力の極端なアップは見られない。ああ、こんな地道な努力をいつまで続けるのか・・・とあせりと諦めがみえるころである。

ここで一ヶ月じっと頑張って8月の最初に試験を受けてはいけない。なぜならベースアップにあと二ヶ月はかかるからである。試験は8月の最後に入れる。さらに、この試験では、ああ、しまった・・・失敗した！と思うことが必ずどこかに出てくる。試験というのは実力以下の評価はされても実力以上の評価はされない。こうした判っているのにできなかったというパフォーマンスの悪さがあるからである。

この、しまった！を挽回するために、次の試験はほぼ間髪を入れない時点、おそらく9月の最初頃に入れる、ここでは数日前の失敗があるので、気持ちも落ち着いてより集中して実力を発揮できるはずである。リスニングトレーニングを開始してからはや4ヶ月は経過しているので、8月末で思いどおりの結果がだせなくても、こちらでは何らかの結果が、おそらくリスニングの点数の伸びは期待できると思う。

ここで得た結果が実力なので、その次はまた二ヶ月程度レベルアップにつとめ、10月の終わりと11月の最初という具合に試験を受けてく。こうして受験していけば少なくとも実力を反映した試験結果が得られるはずである。

実際の試験でのテクニックであるが、会話系・理論系トレーニングでも十分述べたが、各ダイアログの肝になっている事項に留意して、おちついて聴いていただきたい。わからない言葉が出てきてもあせらないことである。その単語がわからないと問題が解けないというほどの重要さはないはずである。特に理論系リスニング問題では、わからない単語がでてきても、かならず後から説明される。先入観であきらめてしまわず、じっくり聞いてみることである。

集中すれば、おおむねこういう意味なのではないか、とあたりをつけることができる。会話系、理論系などポイントを忠実に守っていれば、あたらずしも遠からずで意味がとれるようになってくる。

さらに、トピックなどは内容の改革にとりくんでいるようだが、ほとんどはアメリカ英語である。だが、実際グローバルに考えてみると、旧イギリス領であったところ、オーストラリア・ニュージーランド、香港、インドなど、そしてヨーロッパの多くの国では方言はあるもののブリティッシュが話されているので英語汎用性としてはブリティッシュの方が高いかもしれない。

両者の違いはというと、発音とイントネーションに限って言えば、母音にアクセントを置き、子音にかかるエネルギーを極力少なくしたものがアメリカ英語、子音をとことん強調し、母音にかける時間を極端に短くしたものがイギリス英語というのが私の印象である。

もちろんこれはどちらが良い悪いの話ではない。重要なのはこうした違いを理解して、いろいろな英語になれる必要がある、ということである。

3.3.5 バタレンとハゲタカ外資

あるリスニングテキストで読んだ内容であるが、英語が聞き取れない理由の一つとして、聞き取ろうとする素材の背景的知識がわからないため、というのがあった。

これは非常に良くあることである。たとえば、友達同士会話をしていて、片方がハックションとくしゃみをしたとする。日本人同士であれば、風邪？大丈夫？などとねぎらいの言葉をかけるのが一般的であろう。けれどもアメリカなど英語圏では「Bless you（発音的にはブレッシューと聞こえる）」と言う。

西洋ではくしゃみをすると魂が抜き出て、悪魔が体の中に入り込もうとする、と言われていた。これを防ぐために、God bless you 神のご加護がありますように、と相手の精神

および肉体が健全であることを気遣う言葉をかけるのである。日常会話では God は通常省略され、Bless you だけが習慣として言われ、同じような習慣はキリスト教圏では多く浸透していると思う。

日本には全くない概念なので、ブレッシューと言われたら、一瞬どう答えていいのかわからず、キョトンとしてしまうのではないだろうか？このような背景的知識が得られれば、自分の健康を気遣ってくれた人に「Thank you ありがとう」と返すことができるのだが、こうしたことのインフォメーションが得られないと言葉自体は聞き取れても、何を言われているんだかさっぱりわからないという状況になる。

言葉の背景となるカルチャーを理解する、このこと自体はリスニング力をアップさせる上で非常に重要になる。けれども他国のカルチャーを理解する上で忘れてはならぬ姿勢がある。

それは偏見を捨てる、差別や先入観で他国を見ないということである。

私が結婚式の招待状を出した際、「あなたはバテレンと一緒にいると思っていました」とコメントを返してくれた方がいる。おそらくこの方は、シュジンの横文字の名前を見て、金髪、青い目、長身の北ヨーロッパ系の男性を想像したに違いない。この人物の頭の中には、黒い肌とアフロの髪をもち格闘技の技を繰り広げるブラジル人の姿は夢にも思い浮かばなかったのである。

歴史上でも、ある意味、差別的な用いられ方をされたこの「バテレン」という言葉を見たとき、私は正直、閉鎖的で陰湿なニュアンスを感じないではいられなかった。

バブルが崩壊したとき、「ハゲタカ外資」という言葉もよく耳にした。不況にあえいでいる日本経済をここぞとばかりに奪取する、けしからぬ輩、誇張せずに言えばおそらくこんなニュアンスを秘めた言葉ではないだろうか？

このような差別的な（少なくとも私が差別的と感じる）言葉は、差別する対象も自分もお互いをよくよく理解してから、その上であえて使いたいなら、意を決して使うべき言葉である。

もちろん日本人としてのアイデンティティを持つのはいいことだし、個人的には日本人はもっとプライドを持っていい国民だと思っている。けれども日本人には見慣れないものを、相手のことを知りもせず、一方的に極悪と決め付けるのはいかがなものか、とりたいのである。

私が留学を決意したのは、自分の目でみて確かめたかったからである。日本人が本当に欧米のスタイルを金科玉条のものとして受け入れなければいけないのか、ということ。我々が単一の民族のもとに築き上げて来たものがそれほど劣るものなのか、ということ。を自分なりに理解したかったからである。

私はヨーロッパにいるときも、アメリカにいるときも、世界中どこにいても日本人としての誇りを失わないでいたつもりである。日本にいるときよりも強く、日本人であることの優位性をアピールしようとしたかもしれない。であるので、私が何よりも悲しいのは、日本に戻って私が弁護しようとしていた日本人に、この私の真意が理解されないと痛感することである。

話が少々それたが、要するに言葉を習う上では、相手のカルチャーを尊重し、理解しようとする姿勢がなければ言語の背景的知識を取り入れることはできないのである。

英語を勉強する主体に、差別や偏見があるのであれば、英語の勉強自体を止めたほうがいいと思う。マイナスのエネルギーを燃やして努力することは、健康に良くないだけでなく、いくら勉強しても成果は望めないからである。もっとも、ハゲタカやバテレンに真剣に喧嘩を売ろうというのであれば話は別だが・・

言語の背景にある文化を知ろうという尊敬と謙虚な姿勢が言語の理解を助けてくれるのだと私は信じている。

3.3.6 留学の効用

日本でいくら勉強していても、ラチがあかないので、いっそのこと留学してしまったらどうか、こう思っている方も少なからずいるはずである。

会話学校と同様、お勧めする点と留意点を述べておきたい。

リスニング力アップのための留学、これはまず大変結構なことである。留学すれば日本では限られていたエキスポージャーが格段に増える。朝起きてから寝るまで生活のあらゆるシーンが英語漬けになるので、日常生活を実際に英語で体験することができるので、これ以上強いエキスポージャーはない。

さらに、英語がネイティブの学生のみならず、他国からの留学生とも交流できるのでこれまた英語の勉強になる。特に自分の発音についてのコンプレックスをなくす上で大いにプラスになる。インドはじめアジアの国々、中南米、ラテン系の人々は、ネイティブと比較するとアクセントが強い。かといってこうしたインターナショナルな生徒達が無理にネイティブの発音を意識しているかということそうではない。自国の母国語なまりがあっても堂々と英語を話している。そうすると、仮に日本人訛りの強い英語であってもヒケメを感じることはないのだなあ自分の英語に自信を持つことができる。ネイティブのような発音で話せるに越したことは無いが、何よりもネイティブに限らず外国人の話す英語を聞き取れて、これに受け答えができることの方がはるかに大事である。

「聞けるようになろう」の最初の方で述べたが、英語はコミュニケーションのツールであって、それ以上のものでもそれ以下のものでもない。できないからといってヒケメに感じるものでもなく、またネイティブ並みの発音で話せてもコミュニケーションが取れなければ、何にもならないのである。

デメリットはこうしたメリットを考えてみると自然に判ってくる。せっかく海外で留学しているのに、日本人ばかりとつるんで日本語漬けになっていては何の意味も無い。

留学とは海外で生活することなので、日本とは勝手がちがいで、いろんな意味でストレスが溜まる経験である。遠きにありて、みな初めて日本という故郷（ふるさと）を思うものである。日本人とのコミュニケーションをゼロにしろとは言わないが、ほどほどにとどめ、現地でしか得られないエキスポージャーを大切にすることである。

こうしたデメリットを避けるためには、まずは自費で留学することを勧める。親や家族など他人の金では、勉強するにも本気にならない。これは親にも責任があり、留学をもろ手を上げて勧めるのではなく、たとえば日本で勉強していて、試験である程度の点数がとれたら留学費用を一部バックアップするなど、あくまでも本人の留学が意義あるものになるようにサポートするべきである。

私自身の例で行けば12年間働いていた会社を辞めて単身海外に行った。それまでは勉強のみならずいろんな苦労があった。だからこそ、企業派遣や親援助の人とは違った意味で貴重なエキスポージャーを捉えることができたのだと思う。

Chapter2 話せるようになろう

4 はじめに

4.1 話せない日本人

4.1.1 お粗末な親善大使

私をはじめ海外で、日々英語づきの生活を送ったのは、今から7年前、台北の研修センターに滞在していたときのことであった。研修といっても語学研修ではない、中南米やアジアの国、まだ政府による課税制度が整備途上にある国の課税官吏を集めて、資産評価に係る研修を行う制度が、台湾政府と非営利法人のバックアップによって行われていた。講師を派遣したり技術援助をするのはアメリカのリンカーン財団である。アジア人、アフリカ人など人種は極めて多様で、当然のことながら授業はすべて世界の共通語、英語で行われていた。

日本はどちらかというと自国の制度を紹介し、参加国のバックアップをはかるご意見番として考えられており、毎年日本の名の通った企業からこの研修に派遣される枠がもうけられており、会社に10年在職したご褒美か、私にこの役割が回ってきたのである。

さて、いわゆる日本の学校教育で英語を勉強しており、その後コツコツとラジオ講座などを聞いて地道に英語を続けてきたとはいえ、私にとっては日常のすべてを英語で話さなければいけない経験は全く始めてのものであった。

参加者の大多数は英吾のほかに、スペイン語、フランス語を話し、教室ではいろんな言語が飛び交っており、こうした突然の言語シャワーを一気に浴びたせいか、あるいは英語という日本語とは全くことなる言語のエキスポージャーが一挙にしかも急激に高まったせいか、急性アルコール中毒のように、私の言語機能がまったく働かない状況に陥った。

まず、相手ははなすことが聞き取れない、何度も聞き返すのも、忍びなく、あてずっぽうな答えをかえす。その答え方も、文法も使う用語も英語としてお粗末なものであったので、相手から「聞きたいのはそうじゃない」とか「何を言っているの？もう一度？」などと突っ込まれ、タジタジになった。ほとんど Yes とか No とか中学一年生でももともともな英語を話すだろうというくらいお粗末な受け答えをして、早々にその場を去ることになる。

ああ、どうしようと自己嫌悪に陥り、ドミトリーの別途に横たわってはため息を着く毎日であった。

本来なら、日本の実務で採用されている内容についてキチンと説明しなければいけないのに・・・自国の不動産税課税制度をみんなに発表するカントリープレゼンテーションの順番も近づいている。それなのに、コミュニケーションの基本的なところが、全くできていないとは・・・今から考えてみれば、それはそれはお粗末な親善交流大使であった。

4.1.2 帰国子女の特権

この台湾研修の際、ベッドに横たわり、ドミトリーの天井をぼんやりと眺めながら考えていたのは、「ああ、もし私が帰国子女であったら・・・」という無理な願いであった。

私の通っていた高校はいわゆる進学校であったので、女ばかり50人ほどのクラスの中に少なからず帰国子女がいたのである。親の仕事の都合で、幼少のみぎりをアメリカで過ごしたというクラスメートが3から4人いたような気がする。この高校は文科系のクラスと理科系のクラス、各能力別のクラス編成を行っており、こうした帰国生達は当然のことながら、英語の授業では常にトップのクラスに属しており、実力テストでも必ず上位にいたことは今も記憶に新しい。

普通の日本の学校と同じように、英語の授業といっても、先生はネイティブではなく、全部日本人であり受験英語を指導していたが、あるとき英語上級者クラスで評判の先生が言った一言を、私はこの台湾の空の下で思い出していた。

「英作文は帰国生が一番うまいですね。表現の仕方が全くちがいますねえ」

高校を卒業して20年近くたった今、現在の状況をいろいろ考えてみれば、人は千差万別様々な人生を経験しており、高校時代あれほどコンプレックスに感じ、その境遇をうらやんだ帰国生の英語能力は、別にそれほど気に留めるほどのことでもない格差だったと思う。けれども志望大学に合格するべく英語に多大な時間を割いていた我々ノン帰国子女からすれば、当時の帰国子女達の能力は羨望の対象だったのである。日々彼らの能力を目の当たりにしては、ドメドメ（ドメスティック）の仕事をしている我が両親を恨んだものであった。

さて、現代の日本に目をやると、今でこそ日本の外資も変わったところも多く、英語の能力が全く要求されないところも多い。けれどもやはり英語を少なからず使うことを要求される外資では、やはり圧倒的に帰国子女の割合が高いように思う。

三十いくつにもなって、留学生として学生に混じっていた自分を含め、私の回りで働く人々も大抵人生の中の過去数年間を海外で過ごしたという人がほとんどである。日本で生まれ育ち、ずっと日本で働きながらいわゆるビジネスレベルの英語を身につけた人というのは本当に数えるほどしかいない。

とすると、外資で働く日本人のほとんどは帰国子女ということになり、これまで海外で生活する機会をもつことができた、いわゆる一部の特権階級の人々でなければ、外資で働くチャンスはないということになる。

ここで少し考えていただきたい。インターネットなどで良く目にする「ゴールドマンサックスの新入社員はボーナス1千万」などというコピーには、もちろん誇張もあるが、

日本の外資で働くことの価値の高さを物語っている。これはすなわち、通常の仕事に加え、英語が話せることの付加価値とでもいい。

こうした付加価値を含んだ給料を得ることができるのは、本当に帰国子女だけなのであるか？帰国子女という特権階級だけがこの恩恵を与えられるにふさわしいのか？

いや、決してそんなことはない。私がこの本で声を大にしていいたいのは、そこなのだ。日本に生まれて育った純粋な日本人であっても、ビジネスで使える英語を話すことは可能である。

残念なことに日本の英語教育は、この国際社会で実際に使える英語をほとんどと言っていいほど意識していない。それどころか、本当に使える英語とはまったくかけ離れた別の種類の学問になってしまっている受験英語を徹底させることに未だ余念がないのだ。であるので、日本の英語教育で英語を学んだ日本人は、改めて「本当に使える英語」を学びなおさなければいけない。

ヒアリングのコツでも述べたが、学びなおすといっても、何も新しい学術分野を知ることではなく、一つの運動感覚を鍛えるつもりで、新しいスポーツを始めたと思って、英語を日々の生活に取り入れ、徐々にエキスポージャーを増やし、五感を適応させていかなければいけない。

逆に言えば、これまでの受験やいわゆる試験勉強とは異なり、全く違った認識とアプローチで、これまで使っていなかった特殊な器官を慣らしていけば、誰しも必ずといっていいほど、この帰国子女だけが持っていた特権を享受することができるのである。

ただし、繰り返すが、これまで日本の試験社会に慣れてきた人、ある意味学歴社会を勝ち進んで来た人々が、自分の地位を確固たるものにしたある種の「ガリ勉」アプローチを捨てて、果たしてこんな方法でいいのか？と思えるトレーニング方法を信じて従えるかどうか、そこが一番難しいのである。

英語はコミュニケーションの道具（ツール）であって、それ以上のものでもそれ以下のものでもない。できないからといって、パーソナリティが否定されるものでも、できたからといって人に自慢できるものでもない。

これまで多くのエリートの方が成績を上げるためにコツコツ努力してきたように、過去問を見て傾向と対策を考え、解法を覚えこんでいくという勉強方法では全くといっていいほど効果が上がらない。

一つの感覚、運動神経を磨くことが一番重要であるので、バカバカしいと思えることでも絶えず継続し、人間の感覚が自然に養われるまで、じっと我慢してトレーニングを続けられるかどうか、その忍耐が問われるスキルなのである。

固定観念を捨て、赤子のようにただ何も考えず、無心で真似して繰り返す、大のオトナに、しかもそこそこ社会的地位のあるプライドを持った人に、これを強いるのは甚だ申し訳ないが、帰国子女達が謳歌した特権を、同じ人間である自分も同様にもっていいはずだと疑問を抱くなら、一にも二も無くこの「話せるようになろう」で薦める方法を実践していただきたい。

変なプライドと自分なりのやり方は捨てることである。言葉という新しいツールに肉体が慣れるためには、これらは障害になりこそすれ、何の役にも立たないからである。

4.2 話せることの必要性

4.2.1 同時通訳の危機

外資系企業主催の会議や、グローバルセミナーに出席されたことのある方は少なからずこうした経験をされていることと思う。

座席にイヤホンが設置されており、会場の前方脇のほうにチャンネル1日本語、チャンネル2 English と指示がある。イヤホンを耳に掛け、この指示に従ってチャンネルを選ぶと英語か日本語どちらかの翻訳が聞けるようになっている。発表者がすべて英語ではなしているときは日本語訳が、日本語で話しているときには英語訳が流れ、国際会議の中で日本語が話される場面であっても、参加者はすべて発表内容を理解できる仕組みになっている。

けれども、この同時通訳というのが意外に「くせもの」で、日本語・英語間のコミュニケーションを助けるためのものであるのに、コミュニケーションを難しくしてる場合がままある。同時通訳のおかげで、英語で話されたのではチンプンカンプンの内容が、日本語にきれい置き換わってすんなり理解されるはずであるのに、同時通訳を通じたことによって、内容が余計にわかりにくくなる、ということが往々にしておこるのである。

それは何故か？

翻訳者が話の背景になる地域、社会、業界の実務や専門用語に精通し、よくよく理解しているとは限らないからである。

たとえば不動産業界では、「Key money」というと礼金を意味する。「Security Deposit」が契約終了時には基本的に返還される敷金を意味するのに対し、礼金というのはオーナーに支払ったきり戻ってはこない。いうなれば、「これからテナントとして入居します、よろしく願います」という趣旨の一種の「お礼」金なのである。

けれどもこの Key money という単語が「礼金」を意味するとわからないと、(問題の鍵を握る)「重要なお金」と訳してみたり、あたらずしも遠からずの訳で「鍵交換のお金」と訳してみたりすることになる。同時通訳者は多くの場合、海外経験の長い日本人であったり、英文科を出た日本人で通訳の専門学校に通ったりと、不動産以外の畑出身の人が圧倒的に多い。したがって同時通訳者として選ばれた人がこの業界の知識を持っている可能性は極めて低いのである。

これは不動産業界に限らず、同時通訳を頼むときには考慮しなければいけない事項だと思いが、通訳のプロはその業界のプロではないので、彼らが業界の専門知識をもって翻訳をしてくれるだろうと期待することは、ほとんどムリな話である。中では、医学関係の国際会議を多くこなした人とか、電子機器メーカーの通訳として数年働いていたなど

というキャリアを持つ人もいるだろうが、こうした人は例外であって、翻訳のプロはやはり翻訳業を淡々となし、特殊な業界の内情については一般人と同じ程度の知識しか持たない人々と考えの方が妥当であろう。

業界独特の背景がわからなければ、英単語は単なるカタカナの翻訳になりかねない。先の例ではキーマネーとカタカナで置き換えられた言葉が日本語チャンネルから流れてくることも良くあることなのだ。

さらに、実務では日本にはあるが海外にない制度、あるいは海外にあっても日本にはない制度も多く存する。この場合、ある単語の適切な翻訳は外国語には存在しないことになる。特に日本にない制度を説明する場合、発言者がこの事実を意識しないと、翻訳者は適切な訳語が見あたらない言葉について、むりやり訳語をみつけだし、話の間中この無理な訳語を使い続けなくてはならない。

私の仕事に関連している専門用語だと「mortgage lending value」という概念がある。ドイツ独特の制度で、金融機関が融資をする際のひとつの判断材料にしている単語であるが、いわゆる Market が多少上下に変動しても銀行のポジションがある程度保証される価格という意味で、Market Value よりも低い価格を示し、我々はこれを「sustainable value 維持しうる価格」ともよんでいる。仮に翻訳者の前にポッとこの言葉が投げかけられ、こうした業界の背景知識がなければ、この“mortgage lending value”を「担保価格」と訳してしまいかねない。聞いている人は、この「担保価格」なるものが、「担保物自体の価格」か「何かを担保にとって貸せるお金の総額か」、はたまた「貸したお金が返ってこないときの最低補償額」なのか、要するに何をさしているのか理解できず、混乱することになる。

「Mortgage lending value」なるものがどういう概念であって、実務的には何を意味しているのか、話し手と翻訳者の意思疎通を図る必要があるのだが、ほとんどの同時通訳の場で、これが 100%行われていないのが実情であろう。それどころか、話し手の方で聞き手がこの単語を理解していると思いついでいる場合、MLV と省略した語を使い、翻訳機から流れてくる日本語は

「MLV が LTV をモニターするベンチマークとなる場合・・・」などカタカナ交じりの訳文となり、ほとんど日本語訳があってもなくても同じ、あるいは無い方がマシな状況も往々にしてでくわすのである。

4.2.2 今、最高値を更新するであろう人材

このようなカンファレンスの場で本当に必要とされるのは、専門的知識を日本語でしっかり理解し、さらに英語の能力も高い人が同時通訳となることである。しかしながら、このように専門的知識を持つ人は通訳になるよりも専門家として企業に雇われた方がは

るかに経済的に安定するので、こうしたインターナショナルセミナーに同時通訳として現れることは、まず無いのである。

さらに強調したいのは、実際、現在の日本において、高度に専門的な知識を持ち、なおかつ英語でその専門内容につきディスカッションのできる人間、いいかえれば、ビジネスレベルの英語をきちんと話す専門家は極めて少ないということである。

弁護士、会計士、税理士、不動産鑑定士など、日本で資格商売と言われる資格を持ち、かなりのキャリアを積んで、なおかつ英語ができる人間はきわめて限られているのである。日本ではこうした資格を取ることが既にチャレンジングであり、大学入試のように一旦希望大学に合格すれば将来の就職がある程度約束されるように、目標とする資格を手に入ればある程度の所得は保証されるだろう。そうなってくると、これ以上の試練、勉強はいやになるというのが本音だろうと思う。

私も資格試験に合格した際は、同じ勉強は二度とできないと実感したものである。けれどもこうした資格者あるいはプロフェッショナルの世界も国内のみを自分の活躍の場とするのか、それとも他国との相違を理解しながらインターナショナルに活躍するのかでは、資格の生かし方、プロとしての成長の仕方が異なってくる。

私自身は国内よりも海外を活動の場としたかったので、資格をとって数年たった頃から留学のための英語の勉強を始めた。当時はこうしたバイリンガルのプロフェッショナルは本当に少なく、今にいたってもビジネスレベルで英語を使う専門家が劇的に増えたとは思えないのである。

プロとしての実務は十分にわかっているが、これを英語で話すスキルがない専門家達はたくさんいる、また逆に、海外での生活経験は十分にあり英語も得意だが、日本での実務経験が無い、日本の実務に対する理解がプロフェッショナルのレベルで無い人、こうした英語の資質があり実務経験に欠ける人も少なからずいるのである。

であるが、外資が実務で求める人材は双方を兼ね備えた人物である。海外のロースクールを卒業し、英語はそこそこ話すのが日本の借地借家などのシステムがまったくわからず、どのようなことに注意しなければいけないのか、マネージメントに説明できないようでは困る。また日本の判例、調停や和解には詳しいが、これらを英語で説明するとなると別の通訳が必要になる、というのでは先ほどの同時通訳の危機と同様、この専門家のアドバイスを的確にマネージメントに理解させるのは難しい。

英語をキチンと話す専門家は希少であるがゆえに、市場でも高値で取引される（相当の報酬をもらえる）と考えていただいても間違いはない。もちろん経験やポジションにもよるが、少なくとも英語を話せる、そして専門家であるということのプレミアは考慮されることは間違いのないであろう。

4.2.3 なぜ英語をキチンと話す専門家が生まれないのか

英語をキチンと話す専門家を創出しようとするなら、考えうるアプローチは二つである。英語が達者な人に専門的知識を与え経験をつませるか、あるいはこのような知識と経験のある人に英語の能力をつけさせるかである。

費用、期間と現実性の観点から、前者よりも後者の方が実務的には実現の可能性が高い。プロとしての実務を積ませるには数年かかるが、英語を鍛えるのは1年以内でも十分可能である。

専門家でビジネスレベルの英語を話せる人というのは、帰国子女であったり、留学したりと海外生活から英語を話せるようになった人々がほとんどである。特に自ら海外で留学し、経験を通じてビジネス英語をブラッシュアップした人は、どうすれば「話せるようになる」のか身を持って体験した人々であり、彼らから指南をうけるのが、実際に使える「ビジネス英語」習得の近道とも言える。

では、なぜ彼らの勧める英語学習方法についての指南書がないのか。

まずもって、このような人は忙しすぎるのである。海外に留学して専門的スキルと語学能力を身につけた人は、たいてい日本の外資系金融機関で働いており、勤務時間は長く深夜勤務が常である。土日にも出勤することが多く、自分のゆとりある時間が見つければ何よりも休養をとったりより優先順位の高いことをするはずで、とてもこのようなマニュアルを作り、人助けをしている時間は無いであろう。

また留学のサポートが企業派遣という人はいいが、すべて自費で自腹を切って留学しているのに、多大なコストをかけて習得したものを何を好き好んでおいそれと人に伝授できるのだ、と考える人もいるかもしれない。概してアメリカに数年留学しMBAなどを取得することを考えると最低でも2から3千万はかかる。自分がこれだけの費用をかけて得たスキルを、人からタダで教えてもらおうなどとは虫が良すぎる、と思う人もいるのではないだろうか？

また、一般的に日本人で語学が話せるというだけで就職の選択肢がグッと広がるので、特に専門化で英語が話せるという人は、自分のマーケットビリティを確保したいと、供給は制限されたままの市場が望ましいと思うかもしれない。

いずれにしても、ビジネスレベルで英語を話す専門家の人々にとって、英語スキルを人に伝授することは、あまり自分のためにはならないので、どうすれば「話せるようになる」かが語られることはなかった。教える人間にとってのインセンティブが無かったので、このような日本人による英語マニュアルが存在しなかったのである。

巷には、日本人・外国人を問わず、いわゆる英語教育者による英語マニュアルがあふれ、実際の実務社会ではたらく専門家によるビジネス英語マニュアルはほとんど存在しないのである。

教わる機会がほとんど無ければ、自ら海外に留学して学ぶほかは無く、専門家としてある程度のキャリアを持つ人にとっては、時間・費用の制限があるので、実際に留学ができる人間はさらに選ばれた人だけになる。

これが、英語をキチンと話す専門家が日本に極めて少ない本当の理由なのである。

5 実践編

5.1 話すときの心構え

5.1.1 日本人が英語を話すとき

- 黒板の理屈、ボンッと黒板がでてきて、ここから作文をはじめ。あとは自然についてくる・・・果たしてそうだろうか？答えはNoである。なぜなら、中学までの英語を終えた自分がMBAの教室、あるいはセミナーにボンとほおりこまれて、そのまま何の問題もなく授業についていけるとは思えないのである。
- そして、今から考えてみても、某進学校として有名であった私立高校の、生え抜きの英語教師の英語が、「通じる英語」としてそれほどこなれていた、とは思えないのである。

5.1.2 コツその1 ゆっくり話そう

何はなくとも、みずから英語を話そうとするときは、できるだけゆっくり話すべきである。

とにかく外人と面と向かってきてこれから英語で話しなさいと言われると、リキが入ってしまい、また、覚えたことを忘れないうちにしゃべってしまおう、あるいはボロがでないように「こいつは英語がデキル」と思わせようなどという思惑が働いて、とにかく早く話してしまいがちになる。

だが、実際に英語を話すときには、とりわけ初心者のうちには自分が意識できる範囲でできるだけゆっくり話すことである。

もう少しゆっくり話していただきたいと思うのは、中国人とインド人の英語である。チェンチー、

こうして話すと

長い単語を話すとき

5.1.3 コツその2 覚えた単語は使わない

これは意外に思われるかもしれない。だれしも英語がうまくなりたくて勉強しているのである、せっかく覚えた単語はすぐにでも使いたい、ちょうど新しく買った服を着てすぐにでも外に出かけて友達に見せたい、そういう衝動に駆られるように、新しく覚えた単語は嬉々として使ってみたくなるものである。

が、しかし、ここでよく考えていただきたい。

まず、多くの会話は中学英語で十分足りるのである。

簡単な日常会話、基本的な動詞の使い方、学習するマテリアルに若干問題はあっても、ほとんどの会話は中学までで習った単語でこと足りる。さらに、これも英語を学ぶ上で非常に大切な要素なのだが、過剰なことはしない、**simple is best**、つまり必要にして十分であることが、英語では最も望ましいフォームだと言える。

さらに具体的に、覚えた単語を使ってはいけない理由を説明していこう。

ほとんどの日本人は義務教育の中学生の段階までで、基本的な英語を習得しているのである。自分の身の回りの生活を語ることから、ちょっと日本を紹介するところまで、基本的な単語と一通りの文法を含め、すでにベーシックなところは習得しているのである。

であるので、社会人になって勉強している英語はいわゆるビジネス、はたまた海外に留学するにあたって必要になる英語、であるはずである。主としてビジネスや自分の学部専攻内容に深く関連した単語を新たに習得していくことになる。

ここで、考えていただきたいのは、こうした単語を果たして日常生活で使うであろうかということである。いうまでもないと思うが、答えはノーであり、ビジネスや学部課程で勉強する単語を日常使わなければいけないとしたら、コミュニケーションがとりにくくなって仕方がない、ということを理解しなくてはならない。

私自身の例で申し訳ないが、トフルと GMAT の勉強を着々と行っていた頃、おそらく GMAT 必須単語集に”**Lucrative**”という語があった。何度かボキャブラリー集で見かけたのと、当時英語学習として見ていた映画「ゴースト」の中で霊媒師を演ずるウーピー・ゴールドバーグが自分の預金を引き出そうとする際、「いや一儲かる商売みつけちゃったのよ」という時にこの”**lucrative**”を使っていたので、この単語を覚えてしまった。

覚えたまではいいのだが、これを実際のエッセイ（海外の大学等に提出する志望動機書）で使おうとしてしまったのである。それを添削していた私の英語の先生ラッセルが一言、”**sounds strange**”と発し、この単語の不自然さを説明してくれたのである。この単語はいわゆる”儲かる”という意味に使うが、あまりポジティブな意味では使われない。日本語でこのニュアンスを含む言葉を捜そうとすれば、まさに「ウハウハの商売」というところではないだろうか？

順当に利益が上がり、なかなか見通しがいい、という意味では”profitable”を使う。私自身もこの”profitable”は使ったことも聞いたこともあるが、“lucrative”に関してはこの身をもった間違い体験のみであって留学している間もビジネスの間でも未だに lucrative という言葉が話されるのを聞いたことがない。

英語を勉強する中で仕入れる単語は、知っていて損はないが、率先して使うべきではない単語というのが多々含まれている。せっかく覚えてうれしい、使いたくてたまらないのはわかるが、そこは節度をわきませて、使うべき単語と自分の知識にとどめ、ストックしておくべき単語に選別していくことが大切なのである。

覚えた単語をつかわない、ということは同時に聞き手にとって思いがけない返答をしないということでもある。

とても幸せ、うれしい、よかった、私は満足、などという感情を表すときには I am happy といえば良く、さらに日本語でいうところの、調うれしいを表すには I am very happy といえば本当に十分である。しかし、これを仮に知っていることが望ましいが、あまり日常では使わない語を使って、I am extremely happy と表現すると、言われた相手は、まさかここで、このシチュエーションで「私にはなはだ幸せでございます」と言われるとは思ってもいないので、”Excuse me?”と驚きと当惑の色を隠せない返答をせざるをえない。

Very と誰もが使う、中学英語の基礎中の基礎でもある単語を使えば、コミュニケーションは至ってスムーズだが、extremely といういわゆる書き言葉でよく使われるフレーズを使おうとすると、途端に会話がギクシャクしてしまう。Extremely を発した本人は、せっかく覚えた言葉を使っただけなのに、相手に通じないというショックやフラストレーションを抱き、英語というツールを使って意思疎通をはかるといって、英語を学ぶ最も基本的な目的が達成されないのである。

相手にこのような誤解を与えないためには、まず極力簡単な言葉を使うこと、習ったからと言ってやたらに慣れない単語を使わないこと、を心がけなければいけない。

試験の弊害、実際ではあまり使わないが、仮定法は受験生の間違が多いので、よく出題される。

5.1.4 コツその3 お腹の底から声を出そう

その昔、出世する男の三大ポイントを聞いたことがある。

ひとつ、朝が早い、二つ、酒が強い、三つ、声がでかい、であったような気がする。どれも仕事の能力とはいまひとつ直接的に結びつかないような気がするが、人に覚えてもらおう、自分の意見を相手に聞かせる（理解してもらえるかどうかは別として）ためにもこの三つ目のポイント、「声がでかい」ことは非常に重要な要素となる。

実はこれは結構むずかしいことなのだが、英語に限らず、言葉を発するときには、意識して大きな声で話すようにすべきである。

もともと英語は母国語ではない。したがって、おかしい発音やアクセントで話す、さらには間違った文法で話してしまうリスクがある。間違えたらどうしようという気持ちからか、どうしても英語は小さい声でボソボソと話してしまいがちである。

けれども、こうしたリスクを考えても、できるだけ大きな声で話すようにしなければいけない。

時と似ている。が、学習の過程で覚えた単語は、めったやたらに使ってはいけない。使いたい！ **I am extremely happy.** 相手にとって予期しない言葉であります。怪訝な顔をされ、自分の英語に自信が無くなるもたになります。簡単な言葉で、短い文章にすること、ゆっくり話すこと、大きな声で話すこと、を心がけましょう。

なぜなら、相手があわせてくれやすくなります。自ら墓穴を掘ってはだめです。長い単語は特にはっきりと。

この時期からやっておけば後が楽です。

5.2 話すためのトレーニング

5.2.1 トレーニング基礎編

5.2.1.1 最も効果的な方法

外資の面接が来週に迫っている、来週にはヨーロッパから A 社の重役が来日する、本国のオリジネーションの Head が来週早々確認の電話を入れるとか言ってたっけ、まずい、とにかくなんとか面接を乗り切れるようにしなければ・・・グローバル化が当たり前の認識になりつつある昨今、こんな切羽詰った状況に追いやられるビジネスマンも少なくないと思う。

そこで、このようなどにかく何とかしなくちゃ、即効でコミュニケーションを取れるようにする方法、誰か教えてくれーと泣きついてくる人に、まずお勧めしたい方法がこれである。一も二もなく、まずどうにかしたいという人にはほとんどこの方法以外に、効果を発揮する方法があるとは到底思えない。

その方法とは、ネイティブと交わされる会話を録音し、それを徹底的に覚えこむことである。ネイティブと交わされる会話とは、短期間に何とかすることを目的とすれば、できれば自分とネイティブのみが望ましいが、ほかに何人かノンネイティブが加わる、すなわちグループレッスンで録音したものであってもかまわない。さらに、徹底的に覚えこむとは、その会話の内容をソラで暗記して、一言一句間違えず言えるようになるまで、そして会話の中のネイティブからの質問が自分に不意に投げかけられても、次の返答が反射的に出てくるまで、会話の内容を体で覚えこんでいくことである。

私自身の例を話すと、ポルトガル語試験直前対策がまさにこれにあたる。

私自身30代も後半、もうたいがい、いい年なので、試験勉強をするにしても直前にならないと真剣に取り組めない。いや、仕事がとか家の用事がなどと言い訳はしていても、実際直前の数週間になって、「やばい、このままでは落ちる」とお尻に火が点くまでは、体の試験勉強に対する機能が働か出さなかった、という表現の方が適切かもしれない。

即座に私がとった対策はこれである。ネイティブと数回のプライベートレッスンを設けて、その内容をすべて録音し、聞きなおし、書き写しながら覚えこむことであった。

ネイティブといっても、オットではない。身内ではなあなあになりお互いにとっていい結果を生まないの、身銭を切って、われわれ夫婦のよく知っている日系ブラジル人女性にお願いした。

プライベートレッスンの最初から、もっともブラジル人のカルチャーだと思うが、「いったい、なんでまた試験を受けようと思ったの?・・・ははあ、そうだよねえ家でご主人としゃべっていたって、ポルトガル語が上達するとはかぎらないもんねえ・・・そうよ、うちも全く同じ、主人は日本人だけど、私の日本語は本当に上達しなかったよ・・・」などと、面接の過程で出てきそうなことをポルトガル語でペラペラとしゃべってくれるのである。

もっとも普通の会話でこの言葉のやり取りを何度か繰り返す程度では、全くといっていいほど身につかない。会話はその場で消えてしまい、残念ながらわれわれ人間の記憶力とはその場で一度お目にかかった音声を事細かに、正確に記憶しておくほど精巧にできてはいないのだ。

であるので、こうした会話はすべて録音し、後から何度も聞き返してみることである。こうしているうちに、自然と質問の文章自体も覚える。ははあなるほどこういう表現を使うのか、という基本的な言葉の使い方から時制と人称に応じた正しい動詞の活用を覚えていく。

しかもとてもいいことは、これらはすべてネイティブのイントネーションと発音で語られているのである。であるので、これを何度も聞き、自分も同じように真似して話す訓練をすれば、自然とネイティブが語る質問と受け答えの双方がわかるようになってくる。

であるので、このプライベートレッスンでは、自分が聞き取れないところは、何と云っているの、もう少しゆっくり発音して、とか、あるいは、この質問に対する答え方は?これでいいの?どうしてこっちを使わないの?など、プライベートを指導するネイティブになるべく多く質問をして、自分が後からこの録音データを聞きなおして理解しやすいように、疑問点を解決しながら進めていくべきである。

私の場合、特に今回お世話になった先生は、私が書くことがあまりできないといったので、単語のつづり、およびポルトガル語ではとても重要になるアクセントもその都度説明してくれた。であるので、通常辞書でなければ確認できない単語のつづり、しかも自分が苦手として書けない単語の綴りが音声データとして確認できるようになったのである。

こうしておけば、いつでもどこでも復習ができる。たとえば二時間のレッスン内容でもいつも聞いていれば一日最低1から2回、時間があれば3回程度は聞き返しが可能になる。行き帰り電車の中、スーパーやコンビニの中、歩いているときにも、一日一回は書けなかった綴りを正しい発音とアクセントを伴って語ってもらえることができるので、これはサルでも覚える、といったらちと言いすぎかもしれないが、いやでも、覚えていくスキルアップの手法なのである。

先ほどのレッスンの最初では、私の先生は、そうよねえ、家だとなかなか上達しないよねえの次に、こんな表現を教えてくれた。「Santo de casa non fas milagolos 家にいる

聖人は奇跡はおこさない。」これはブラジルのことわざだそうで、日本でこれにあたる翻訳というところちょっとピンと来ないのだが、ブラジルではよく使う表現なのだそうである。

もしこれを録音していなければ、この聖人の諺は単なる雑談のひとつで終わってしまう。いくらプライベートで練習していても、こうした諺はいちいちノートに書き留めないであろうし、みずから進んで覚える必要のないものとして記憶に定着しないかもしれない。

しかし、注意してもらいたいのは、こうした諺は自然な会話の流れで、スピーカーの口をついて自然にでてきた言葉だということである。レッスンを録音しておけば、この自然な会話のながれをそのまま再現することが可能である。自分の体験はその一瞬、数時間でなくなってしまうとしても、録音データを聞き返すことによって、何度もその体験を追体験することが可能になる。

レッスンテープを毎日聴くうちにこの諺も自然に覚えてしまった。実際の面接のとき、試験管が私にどうやってポルトガル語を勉強したのかと訊ねた。

「・・・はい、独学です・・・ええ、もちろん主人に何度か聞こうとしましたが、ご存知のように《家の聖人は奇跡をおこさない》ですから・・・この試験のために、数回プライベートレッスンをうけました。」

試験管が私のこのセリフを聞いて思わず微笑んだのは想像に難くないであろう。

彼らはもちろんブラジル人であり、この諺が使われる状況を実体験から知っていたのである。私の先生も実体験から、まさにこの諺を使うべきところで自然に使い、私に使い方を教えてくれたのである。自分の境遇をネイティブの言葉で適切に語っているので、これ以外の説明は必要なく、「ああ、あなたは結構ポルトガル語を話しますねえ」というコメントをいただいたのである。

さて、ポルトガル語の例で説明したが、会話とは自然な言葉のやり取りであり、日本語で意図しているこの内容を尋ねるにはどうすればいいのか、それに対してどのように答えればいいのか、ネイティブの視点からみて添削され、また正確な発音とアクセントで語られた、いうなれば「生きた教材」なのである。

そして、本当に話せるようになりたければ、この「生きた教材」と真剣に格闘し、自分の五感の中にその内容を定着させていかなければならない。会話学校に通うもいいが、その場限りでおわってしまい、その内容を録音することができなければ、本当に何の役にも立たない。本当にいつでもどこでも勉強できる「生きた教材」を絶えず聞き、自分のものにしなければ、「今そこに迫っている危機」を乗り越えることは不可能である。

たったの一度数時間ネイティブと練習するだけでもいい。就職面接なら考えうる QA 集を、取引先の重役なら、世間話を含む日常会話から簡単な仕事の内容まで、想定される

聞ける・話せる MBA 留学試験対策

By ユキーナ・富塚・サントス

内容を、まずネイティブとじっくり会話形式で話し、その内容を録音することである。一日数回聞いて、自らも繰り返せば、準備時間は少なくともその内容のほとんどをソラでいえるようになる。

こうした準備をしたのとしらないのでは、実際の本番、いざ英語を話さなければいけない状況になって、自分の話す力には雲泥の差が出ることを肝に銘じていただきたい。

5.2.1.2 会話スクールの選び方

最も効果的な方法は、ネイティブの会話を録音し、繰り返し聴いて覚えることと述べた。であるので、会話スクールを選ぶときにはまずこうした「生きた教材」を作り出すことを念頭においていただきたい。

そうすると自然と選ぶべき会話スクールの条件、録音ができること、というのが見えてくる。繰り返しになるが、一回の会話スクールで話されることはほとんどゼロとっていいほど、頭に残らないものである。何回会話スクールに行こうとも、録音して「生きた教材」作りをしなければ、自分の精神をストレスにさすだけで、ネイティブが繰り返し教えることは一向に身につかないとっていただきたい。

さらに、あと二つほどポイントを挙げる。それは、変更ができること、さらにグループレッスンができることである。

まずグループレッスンであるが、これは英語で言いたいトピックを効率よく覚えるため、そして、自分のエネルギーを適度にセーブするために、ぜひ試していただきたい。

グループだと他の受講生の悪い発音や間違った表現を覚えてしまうリスクがあると懸念されるかもしれない。しかし、日本にある英語会話学校は、生徒のほとんどが日本人である確立が非常に高く、日本人と同じようなノンネイティブの人のいのおかしな発音を覚えてしまうというリスクはさほど高くない。

それよりも、プライベートレッスンによって会話の題材になるトピックを短期間で多く覚えられるというメリットの方がより大きいということを強調しておきたい。自分とは仕事や生活、趣味の違う人が集まっておしゃべりをするからこそ、自分の守備範囲以外の言葉や表現も覚えることができるのである。

子供の話、料理の話、コンピューターの話、自分と趣味や環境が違う人が集まって、お互いの話せる内容を自由に語りあうことができる環境にあると、そのネタを互いにシェアすることができる。であるので、レッスンの場である特定のテーマが話しに上ったときの相槌のうちかた、受け答えの仕方、質問の返し方を「生きた」英語でどう表現するか、録音して自分の音声教材に加えることができるのである。

プライベートで勉強すると、内容はどうしても自分の得意な内容、すなわち自分が話せる内容になり、そこから先の話題の広がりが無い。

たとえばある生徒がニュージーランドに旅行に行ったとする。先生が、どうだった、ラグビーは見たかい？と話をふったとき、仮にプライベートのレッスンでこの当の生徒がラグビーに全く興味を持っていないときには、いいえ、行きませんでしたという単純な

受け答えが返ってくる。他に話をふる先がないので会話はここで終了、もうこれ以上ラグビーの話にいかないだろう。

けれどもこれがグループレッスンで、グループの中に一人でもラグビーの好きな生徒がいれば、キミはそういえば、ラグビーが好きだったよね、と先生が話を発展させる糸口をみつけることができる。この別の生徒とのやり取りを通じて、周りの生徒も、ゲームの内容の話し方、ラグビーというスポーツを語る時の独特の表現、相手の好みの聞き方、試合状況の説明方法などを英語でどう表現するのか学ぶことができる。

内容によってはマニアックになりがちであるし、また日本語のアクセントが随所に混じってしまうのだが、ネイティブがきちんとフォローする限り、自分の知らない分野をこなれた英語でどう表現するか、これまたネイティブのキチンとした発音でかたられるので、他人が会話しているところも大いに聞いて覚える価値あるものになる。

また、プライベートというのは自分と先生とがサシで2時間近く話さなければいけないこともあり、高い集中力が要求され、自分の頭の疲労度もとても高くなる。グループであれば、他の生徒が先生と話している間も、あとからしっかり聞きなおして記憶すべき内容はやり取りされており、レコーダーでしっかり撮っておけば自分が集中していない時間も、着々と「生きた教材」の作成が行われるのである。後は数日かけてこの自分を含むノンネイティブとネイティブとのやり取りを次のレッスンまでの間、始終聞き込んでじっくり覚えていけばいい。

まず普通の会話を話せるようになろうという段階のときは、このグループレッスンを勧めるが、面接など切羽詰った個人的な目標があるとき、あるいは話したい内容が明確に決まっている時は、プライベートの方が断然効果が上がる。私は人前でスピーチをするという、少人数ゼミ形式のコミュニケーションの授業をとっていたとき、毎回スピーチ内容を考えそのトレーニングに励まなければいけなかった。そのとき、今こそ、プライベートレッスンを行わなければならないと痛感し、至急先生を探し始めた。

アメリカに住んでおり、いやというほどエキスポージャーにあふれていたところに、なぜ英語をお金をかけて習わなければいけないのかと不思議に思われるかもしれない。しかし、スピーチは非常に貴重な、おそらく生涯で一度と思われるほどの実践の場であり、ここをあやふやな英語やうる覚えの表現、お粗末な発音アクセントで、バータリ的に乗り切ってはいけない、それは千載一遇のチャンスをドブに捨てるようなものだと感覚的に理解した（ひらめいた）のである。

そして今から思うが、あのときの経験がなければ、今の私の英語力は決して得られなかったであろうと確信を持って断言できる。

さらに変更であるが、これは仕事をしている人には特に必要なことである。仕事が忙しくて行けない、あるいは歓送迎会などの半強制的なイベントで会話学校を休まなければいけないことは、日本社会で働いていれば多々経験する。こうして欠席した分がたびた

び出てくると内容がわからなくなる。わからなくなるとイヤになっていかなくなる。こうして勢い込んで高い受講費用を払っても、結局会話学校の期限が切れて、自己紹介ひとつできない・・・という日本人は少なからずいるのではないか。

会話学校を選ぶ際には、継続して通うことが実際に可能になるように、休んだ分はきちんと埋め合わせできる、変更（振替）制度があるところを選ぶべきである。そして行けなかった日は早めに振り替え、英語のエクスポージャーを得る経験にあまりインターバルをあけないようにすべきである。

有料で振り替えができるところもあるので、費用対効果はこうした振り替えの可否も考慮して比較しなければいけない。

5.2.1.3 会話スクールの活用方法

5.2.1.3.1 文法・発音・作文

外国語を習うときの鉄則として、多くの方がご存知だと思うが、外国語を習うとき、文法は母国語で習い、発音と作文はネイティブに外国語で習うのがベストだといわれている。したがって日本人が英語を習う際には、文法は日本語で日本人から教わり、発音と作文はネイティブから英語で教わるのがベストな方法といえる。

異国に生まれて育った場合は別だが、多くの日本人はある程度の大人になってから、すなわち日本語での読み書き会話にほとんど支障のないレベルまで、日本語を習得してから、英語を習い始める。一旦、日本語で言葉のシステムを理解しているため、他の言語で言葉のシステムを理解しようとするなら、すでに慣れ親しんでいる仕組みに照らして説明されると非常にわかりやすい。

疑問文はどう作るのか、動詞はどのように変化させるのかなどどの言語にも共通に存する概念から始まって、関係代名詞など日本語以外の言語には馴染みの概念も日本語には存しないので、こうした日本語に概念すら存在しない言葉の使い方は、母国語で説明されるのがベストである。

この言語を習う上での鉄則を理解すれば、ネイティブにふんだんに接する機会がもてる会話学校では、何を聞いて何を習得しなければいけないのか、おのずからわかってくる。良く何から何まで英語漬けにするために、文法事項も英語で説明する会話学校もあるが、文法を理解するにはそれなりの英語力が必要になる。

もっとも英語の基本的な会話を習いに来るレベルの生徒が、文法用語をすべて英語で理解しているとは信じがたく、そのレベルでネイティブから英語で文法を説明されても、クエスチョンマークが頭の中を飛び交うだけで、時間の無駄になる。

こんな間違ったスクールの使い方は止めて、こなれた英語表現（英作文）とこれを正しい発音で言ったならばどう言うのかを教わるべきである。特に日本人は R と L の区別をつけづらいし、t h の発音も母国語にない音であるだけにネイティブについて正しい発音をすることを心がけるべきである。

もちろん発音だけがすべてではなく、日本語なまりがあつたら全く通じないかということ、決してそうではない。現に私もいまだに R と L の区別がつかない場合があるし、自分がほとんどネイティブ並みの発音で話しているとは夢にも思っていない。しかし、発音を意識しないよりも意識したほうが、自分のいい言葉を手により理解してもらい易くなるということは、経験から断言できることである。相手がネイティブであっても

ノンネイティブであっても、間違いなく、正しい発音で話した方が伝わりやすいのである。

5.2.1.3.2 作文すなわち会話

さらに、発音はもとより話す内容により注意を払っていただきたい。これこそを英語で話したい、これを伝えるような英語の表現にするとどうなるのか？そこに重点を置いて、自分が話したい内容をまず自分なりの英語で表現してみることである。

あるシチュエーションを想定してみる。

あなたは外資系企業あるいは英語を使うポジションの面接を受けるための準備をしているとする。あなたのレジュメに書かれたボランティア活動、すなわち外国人に日本語を教えた経験、これを具体的に説明して下さい、と突っ込まれたら、あなたはどうか答えるだろうか？

まず日本語で言いたいことを考える。

「彼女は日本語の挨拶も数もわからない、その上英語も少しの単語しか使えませんでした。」

日本語で表現すれば、ああなるほどと思う内容だが、これを理解される、つまり伝える英語にするにはかなり注意が必要である。

まず、最初の部分、あなたはこのように訳したとする。

At first, Marcia understood neither greetings nor the number in Japanese. Besides, she was able to make out only a few English words.

日本の学校教育のみで英語を習得した人は、往々にしてこのような訳文をつくりがちであるが、これではネイティブが聞いてピンと来ない、聞き手がよっぽど想像力を働かせないと意味を理解できない英語なのである。

5.2.1.3.3 「生きた教材」作り

まず、understand は文字通り訳せば理解するのだが、これは物事の背後の仕組みを含んである事象を理解するということなので、話し手が言いたい内容、初歩的な言葉がわからない、は know を使い、単純に知らなかったとした方がわかりやすい。

さらに neither を使うと本当にゼロという印象になる。おそらくいくら初心者とはいえ、コンニチハくらいは知っていたかもしれないので、not either を使った方がいいだろう。

加えてこれも日本人が間違えるところなのだが、the number という特定の数字をさす。翻訳案だと、既に何か数字がトピックに挙がっており、その数字の意味すらわからなかった、というニュアンスになる。話し手が言いたいのは、イチ、ニ、サンという数字と 10000 をイチマンと読み、「じゅうせん」というように英語のような読み方はしないというルールも含めた日本語での数字の数え方である。であるので、単純にその数というよりも、how to count numbers in Japanese とする。

そして次の表現、これをゆっくりしゃべればおそらく、相手に理解してもらえるかもしれないが、話しての発音の仕方、はなし方によっては、”Excuse me?...Excuse me?”と何度も聞きなおされる可能性がある？なぜなら、普通に使う言い回しではないからである。確かに英語も本当に数えるほどの単語しか知らないのかもしれない、が要するに英語はコミュニケーションのツールとして使うほど上手ではなかったということがこの話者の伝えたい内容である。

であるので、単純に「She didn't speak English well」とする。Be able to はもちろん can の意味で良く使うが、相手の知能や知識のレベルに対するクレームともとられかねないので、会話で相手が英語を話すかどうか聞くときには”Do you speak English?”とたずねる。”Can you speak English?”でももちろん意味はわかるが、あなた英語本当にしゃべれるの？という、ちょっと失礼な意味にも取られかねないので、特に公共の場や初対面の人には Do を使うべきである。

繰り返しになるが、多くの方は、外国語のボキャブラリーが少なく、母国語で〇〇という言葉が、外国語で**ということを知識として知らないのであって、いったん教えてもらえれば次回からは使うことができる。このような単純に知っているか知らないかにかかるとは know でいい。言語を understand しないというといくら教えても、どの場面で使うのか全く使い方が分からなかったというニュアンスになる。

原文のままのニュアンスは一ほんの少しの単語だけ、意味だけでなく、どうやって使うかを理解することができた一であり、ほとんどの単語は教えても教えてもまったくわかってもらえなかった・・・的になちょっと批評のこもった内容にとられかねない。

ここで大切なのは、自分のこのドメドメ日本人の発想をもって考えついた英語を、こなれた、伝わる、自然な英語にネイティブの力を借りて変換していくということである。

この添削の過程では、なぜ動詞 **understand** の代わりに **know** を使うのか、**be able to** はどのような時に使うのか、**Can** と **do** の間にはどういうニュアンスの違いがあるのか、**the number** と言ってはなぜいけないのか、どういう風に誤って解釈されるのか等など、英語の表現つまり作文の根幹となる概念について、ネイティブの意見を聞くべきである。

分かりにくければ具体的な例を使ってなるべく簡単に説明してもらおう。こうしたネイティブの説明は適切な発音ですべて録音されているから、あとから聞き返したとき、自分の苦手なポイント、どういう表現が使えないのかについて、正しい例文つき音声教材ができあがる。

これこそが、「生きた教材」であり、こうした内容を、ただ聞きっぱなしにする（録音せずにその場限りで終わってしまうものにする）のではなく、繰り返し聞いて口に出して練習し覚えていくことによって、「話せる力」は確実に伸びていくのである。

5.2.1.3.4 会話の緩衝材

こうした言葉は会話の中の緩衝材として以外に重要な役割を果たす。相手が言ったことに大して無反応だと、座がしらけてしまい会話も途切れてしまう。

受け答え、相槌のうちかた、切り替えしの仕方、いいねー、お大事に

5.2.1.3.5 費用対効果

私のポル語の出費は1万円程度である。けれどもこれをしくじった場合費やすレベルアップ費用と、機会費用はバカにならない額である。

5.2.1.4 和製英語を改革する

5.2.1.4.1 和製英語とエキスプージャー

日本人が話す英語が通じない理由として、基本的な姿勢、ゆっくり、簡単な言葉で、大きい声で話すこと、これができていないことはもっともネックになる理由だが、この他に話される単語が英語の話し言葉としてこなれていないということもコミュニケーションを疎外する深刻な理由になる。心がけてゆっくり話し、簡単な言葉をつかっているにもかかわらず、言葉の基本的な使い方がまちがっていると、相手から何度も何度も聞きなおされ、結局自分の言いたいことが伝わらずがっかりするということが多々ある。

MBA のクラスメートと今夜バーに繰り出す話をしているとき、学校からバーに直接行くのか、それとも家によって着替えていくのか訪ねたくて、**Are you going to go there directly?** と聞いたら、何度も何度も聞き返された。後からネイティブに確認したが、こなれた表現だと **Will you go straight?** というらしい。**Will** と **be going to** の違いはここではあまりネックな表現の誤りではないが、**go straight** という表現を聞きなれている人に、**go directly** というあまり使わない表現を、しかも日本語のアクセントでもってぶつけてしまったので、話しかけられた相手にとっては理解するのに若干時間がかかったのである。

とにかく日本人はエキスプージャーが極端に少ない中で、受験英語で文法や英文の和訳ばかりを奨励されるので、実際にはほとんど通じない、いわゆる「和製英語」を話してしまいがちである。だから、この日本人の感覚で発せられる和製英語の誤りこそが、エキスプージャーによって最も改善される部分なのである。

日本人の伝わらない英語は、和製英語のまま、試験対策として英作文を書いても、ネイティブに指摘されることがほとんどないような学校英語から来る弊害であるので、会話学校でネイティブと触れる機会が得られる今こそ、自分の奇妙な英語を直し、普通の会話で話される英語に慣れていくことが必要である。

帰国子女の特権でも述べたが、彼らと日本で生まれ育った日本人の決定的な違いは、こうしたエキスプージャーを通じた生きた語法を学んだか、それとも受験英語の中で歪められた和製英語を修正する機会をもたなかったかの違いだけである。要するにエキスプージャーを通じて学んでいないなら、自分の和製英語もエキスプージャーのもとで鍛えていく必要があり、それが、日本人が英語を「話せるようになる」には、一にも二にもエキスプージャーだと繰り返し言っている理由である。

5.2.1.4.2 ワードチョイスで泣いた夜

今でこそは私の親友にもなっている異性の友達、ニュージーランド人ラッセルは、最初に私の和製英語のお粗末さをぴしゃりと指摘した人物であった。

ユキ、君のエッセイ（出願理由明示書）にはいろいろ問題があるけど、なかでもひどいのはワードチョイス、英語の言葉の使い方だね、適切な単語が使われていないところが多々あるよ・・・

これを淡々と述べられたとき、思わずその場で唇を噛み締めて、私はキッとラッセルをにらんだ、悔しさをぐっところえていても、溢れてくる涙を止めることができなかった・・・

相手のラッセルはといえば、生徒の英語指導が彼の仕事であるので、涙を浮かべる私には眼もくれず、ひたすら使い方のまずい単語たちを羅列していったのである。

こんなに一生懸命やっているのに、単語の使い方すらできていないなんて・・・日本に生まれたんだからしゃーないやんか・・・またしてもこのどうにもならない悔しさを思い、私は自分の前にある英語という壁にぶち当たって、くじけそうになっていたのである。

5.2.1.4.3 適切な言葉使いを学ぶ

Training, Happy ダイナミック、determination comfortable commit relevant

イディオムの使い方

In terms of

5.2.1.4.4 日本人の知らない基本単語用法を覚える

It works、Does it still work for you?

Can という語もいわゆる和製英語で使う場合と実際の会話で使う場合では大いに用法が違う言葉である。

学校では Can の基本的な意味、いわゆる「～することができる」の意味を習うが、実際にはかなり応用範囲が広く、とても便利な言葉である。

私がスクールビジットをしにニューヨークに行く際、滞在先の日本人の友人がタクシーの乗り方、頼み方を指示してくれた。彼女いわく、目的のストリートにさしかかり、マンションの前まで来たら、”You can go in”と言って、エントランスの方を指差すようにとのことであった。

当時まだ面接のために英語を話さなければいけないと思うとドキドキするほど、英語のエキスポージャーの少ない私であったので、この時の Can の使い方に非常に驚いたものである。こっちに入ってください。和製英語だったら、Please go this way とでも訳していたのだろうか？そして間違いなくタクシーの運転手に”What?”と聞き返され、伝わらない英語を嘆きながら、身振り手振りでエントランスを指差していたに違いない。

こうした簡単な命令から、仕事上でも〇〇しても大丈夫、別に差し支えない、という意味の時には You can を使う。相手をお願いするときにも私はなるべく丁寧な表現を使おうと could you please を使うことが多いが、送られてくるメールなどを見ると can you please と can を使って簡単に聞いてくるパターンもある。

さらに、Can の使い方的印象的なのは、「ラストダンスは私に」である。この歌は日本語に訳されて越路吹雪さんが歌ったときには「どうぞ、おどってらっしゃい・・・」が冒頭の歌詞であった。ところが、映画等で流れるおなじみのこの曲は You can dance... と歌っているのである。この場合のニュアンスは「あなたは踊ることができる！」という、挫折したバレリーナへの励ましのような日本語よりも、どうぞお好きに、あなたの好きな相手とおどっても私はかまわないわ、という一種の許可、この場合は男女の恋愛における女性の余裕を含んだ許可なのである。

このように基本単語の Can は、することができる、という意味だけではなく、タクシーの指示から、ラストダンスまで幅広く使える用語である。

こうした実際の会話で使われる語法は和製英語とは違ったニュアンスがある。ネイティブに接して生の英語に触れる機会がふんだんに与えられているときには、この和製英語

の不自然さを大いに指摘してもらい、自然で、こなれた、生きた英語へと改革してもらうようにレッスンするべきである。

- マンツーマンレッスンと講師の質
- ある英会話学校の、ネイティブ講師の採用試験合格率は非常に低いと電車の広告で見かけた。言い換えれば、この英会話学校はネイティブだからといってだれかれかまわず採用しているわけではなく、その中でも選りすぐりのネイティブだけを採用している、ということがウリらしい。これは「話せるようになる」ための実践には非常に大切なポイントである。講師の質、むろんこうした和製英語の改革を多く手がけており、この日本人生徒が一体何を言わんとしているのか、経験から理解することができる講師がいるところがいい。ひとたび良い講師だと思えば次回からはプライベートでもこの講師を指名する価値はあると思う。

5.2.1.5 文法をチェックする

文法は母国語で、発音と作文は Native に、R と L、長い単語はゆっくりしゃべる

- この場合にはマンツーマンレッスンをすすめる。
- スクールビジットの際に言われたフリークエント、たとえ流れるようにすらすらと話さなくても、時制と単複があっている英語を話していたら、このコメントは無かったかもしれない。
- 短く区切る、私はアメリカに住んでいました。そのとき学校に行っていました。そこで私はホテル経営に興味を持ちました。そして授業をとりました。今日本はバブルです。ホテル投資も盛んです。私は自分の知識を生かしたいです。
- ここでは、非常に基本的な内容を短い文章に個割りにして述べており、話し方としては簡単ではあるが、自分の言いたい内容を誤解無く相手に伝える初歩的なアプローチであると言っていい。ほとんど小学校の低学年か、それに等しい子供が語る語り口とおもわれるかもしれない。簡単であるがゆえに、ここで動詞の時制、単複数の一致など基本的な文法を間違えてはいけないのである。表現がシンプルでも文法があっていれば、初歩的な英語を話す外人と思われるが、表現が幼稚で文法に間違いがあれば、この外人の英語のレベルは子供以下というレッテルを貼られてしまいかねない。簡単な英語で話す時には特に、文法の間違いをしないことである。
- このときに、文法を間違えてしまうと、通じないどころか、話し手の語学能力を間違いなく疑われるのである。

5.2.1.6 読み書き、会話、日記をつけよう

- この場合にはマンツーマンレッスンをすすめる。
- 話す練習をはじめたら、日記をつけるようにしよう、これは毎日でなくてもいい、ネイティブに添削してもらい、録音すればなお可である。
- ニュースを読んだこと、

- プロとしてのライティング、これがあるので、話すときにも自然と言葉が出てきた。これは英語で考える訓練なのである。
- 日記はとてとてもっとり早いアプローチになる。ポイント1 難しい内容を簡単に説明するようにする。2 こなれた英語を覚える練習でもある。場合によっては上級の表現を伴うこともあり、今日は人間ドックに行ったなど医学の専門用語を使うときも、法事があったなど日本の習慣を説明することもあるので、このようなどときには神経質にならず、なるべく簡単な方法で表現するようにこころがければいいのではないかと思う。健康診断を受けた、医を調べてもらった、検査はあまり気持ちのいいものではなかった・・・など、後者は先祖を思い出すための集まり、とでもしておけば意味は通じる。

5.2.1.7 リスニングの訓練

話す基本は聞けること、シャドウイング、ハーフの赤ちゃん、止めちゃならねえリスニング、

- 重大な difference、覚えた単語は使うな！ 仮定法、vow 悲しみ、低迷
- サイクル、スパイラル状に向上していく
-

5.2.1.8 発音を鍛える

- なぜ発音が大切なのか
- Lovemaker
- 語頭の R インド人の R、40 マダム
- 国名地名、人名
-

5.2.2 トレーニング応用編

5.2.2.1 友達を作ろう

- 質問攻めにしないこと、
- 自分の表現を直してもらおうことよりも、相手の表現を良く聞くことに注意する。

5.2.2.2 ものマネをしよう

- Yes, of course
- しあわせーこんばんわー
- オットの蛍の墓、「にいちゃん、おなかすいたあ」
- カラオケなどの歌まねでもいい。前項で友達になったネイティブ達とカラオケに繰り出し、英語の歌を練習して披露してみよう。日本語の歌を教えるもよし

5.2.2.3 朝から晩まで英語でつぶやこう

頭の中は邪魔できない。

インド人は大抵英語で考えているようである。

これは実は結構難しい練習なので、いやになったら止める姿勢でいいと思う。退屈な会議の時、眠くてしょうがない時の眠気覚まし程度に英語で考えてみればいい。

表現はメモしておいて確かめよう。

5.2.2.4 英語字幕の日本映画を見よう

英語を話すうえで、意外にいい教材がこの英語字幕のついた日本映画である。日本の日常生活のあらゆるシチュエーションで語られる表現が、こなれた英語になっているという点で、和製英語を改革し、自然な英語表現を身につけるにはとてもお勧めの手段である。

飛行機、半落ち Half confession, 明日がある sturbon、フラガール

私はなぜ、このような良い教材がもっと日本に出回らないのか不思議でならない。海外で販売されている DVD ではもちろん英語字幕付きのものが手に入ると思う。もっとも日本映画がポピュラーであればの話だが、

この勉強の仕方であるが、いつもの日本語字幕付の映画とは違い、音声よりも字幕に集中してもらいたい。の

5.2.2.5 英語圏に旅行してみよう

数週間の語学コースもあるので、これに参加するのもよし。インド、シンガポールなどアジアもいいです。エキスポージャーを高める、2 経験を通じて生きた英語を学ぶ、間違いを恐れることなかれ、失敗も感動も日本で勉強していたときとは違う驚きがあります。3 発音コンプレックスを無くす 4 現地での友人、旅は道連れ、途中の行程をいっしょに行ったり、後から手紙や写真を送って keep in touch すること

インド、シンガポールなどアジアもいいです。なぜなら自分の英語ためです。

旅に必要な会話集は音声付のものを選んでなるべくすべて暗記してから行くと現地で学ぶものも多くなる。

5.3 賢いネイティブ

辞書で調べていただきたいのは、「情けは人のためならず」の意味である。これは、相手を甘やかしてはいけない、めったやたらに他人に情けをかけては本人のためにならない、という意味では無い。真意は逆、人にかけて情け、優しい行いはその他人のためだけではなく、めぐりめぐって自分のためにもなる、という「気配り」を勧めた格言なのである。

この情けを前提に、私はネイティブに声を大にしていいたい、「配慮は人のためらな
ず」と。配慮とはノンティブに対する配慮、すなわち、ゆっくり話すあるいは簡単な
言葉で話すというコミュニケーションをとる上での相手に対する配慮である。

ネイティブスピーカーは、世界中どこへ行っても、全く訳の分からない言葉に囲まれて、
何をするにも自分の意思を分かってもらえないという思いをすることが無い。まったく
無いとは言わないが、たとえアフリカのサバンナに置き去りにされ、助けを求めたとき
に、救助に来てくれる人間が英語を話す確立の方が日本語を話す確立よりもはるかに高
いことは納得してもらえるとと思う。

であるので、とにかく早口に、自分の癖を前面に押し出して話してしまいがちである。
ところが、時と場合によっては、このネイティブの態度は話手であるネイティブにとっ
てマイナスの結果しか生まない。言葉を話す最大の目的を、自分の言うことを相手に完
全に理解してもらおうこと、とするならば、こうしたネイティブの態度は一向に機能しな
いのである。

世界のすべての人間が、自分と同じレベルで英語を理解すると思っ
てはいけない。ボキャブラリーも限られているし、日本以上に英語に対するエキスポ
ージャーが限られている国は、世界に山ほどあるのだ。こうしたことに目を向けると
ネイティブのとるべき態度、特に初対面の相手に対しては、ゆっくりと簡単な言葉で
話しかける、これに尽きるのである。

日本人は特に、相手が一方的に言葉をまくし立て、聞き手である日本人の方が理
解できないと、日本人の方に落ち度があるのではないかと考えてしまいがちであるが、
国によっては判ったふりをして、まったくネイティブの言うことをきかない（ある
いは無視する）人々がたくさんいるところもあるのだ。

こうした誤解を避けるために、ネイティブがとるべき態度はまず、ゆっくりと、それ
も簡単なことばだけを使って、短い文章で相手に語りかけること。こうすることによ
って少なくとも、相手が自分を理解しないとイライラする時間とエネルギーは遥かに
省けるはずである。

さらに、もう少し内容が複雑なことを相手に伝えたい場合、ネイティブのとるべき
態度は、言いたいことをクリアにすることである。

私の知る外人の例であるが、自宅にテレビが配達された。ところが、ケーブルテレビ
の設定その他の配線は別の業者が来てやってくれることになっていたのに、この配
達業者はそのまま帰ろうとした。その途端、この外国人が怒りだしたのである。ど
うしてすぐ変えるのか、このままではテレビも見れない、なぜお前は英語を話さな
いのか、私は朝早くから起きていた・・・今日中に何とかできないのか・・・誰に
話せばいいのか・・・全くもって、はなはだ迷惑なお客である。

自分の頭の中がパニックしていて、頭に思いつくことを手当たり次第、相手に投げかけているのである。ここでこの外人がしなければいけないのは、事前に配送等のアレンジをしてくれた人物に再度確認の電話をすることだけである。

確認をしている間、少し待ってくれ、これだけのことをテレビ配達業者に身振り手振りでも何でもいいから伝えればいだけの話なのだが、自分の疑問や不満、あらゆることを相手にぶつけて、何の反応も無いと怒ることは、この話してである外国人の血圧を上げるだけで、何の解決にもなっていないことは明らかである。

これは日本人と会話をしていても時々イライラすることだが、特にコミュニケーションが相手の母国語以外の言葉で行われるときには、言いたい内容を明確にすること、要求内容をきちっと伝えること、相手が理解しているか確認すること、ネイティブには特にこの三つを心がけていただきたい。

相手が何が言いたいのか、きちんとクリアになっていない状態の単語のシャワーを浴びせられるのは、日本語でも英語でも、はっきり言って最も疲れる瞬間なのである。

私の上司であるイギリス人は、もちろんブリティッシュアクセントはあるが、いつの時にもゆっくりと活舌よく、なるべく簡単な言葉を使ってはなす。もちろん専門用語も多々あるが、もしかしたらこの語は耳慣れない言葉ではないか？と前ふりをしてから使ったり、私がそれは何のことを言っているのですかと言えはいやな顔をせずに、簡単な言葉に置き換えるようにしてくれる。

さらに、彼はいつも、一般論を述べ、however, かしながら、特定の場合にはこのような考慮が必要、Therefore, in this case, 従ってこの場合にはと論旨がしっかりした内容を、しかもクリアな英語で語ってくれる。

私は、はっ、もっと話されている内容に集中しなければと思いながらも、時々この上司の賢さに感心している自分に気づくのである。やはり、彼は仕事でいろいろな国を旅し、自分の英語が理解されない状況を多数経験してこのような話し方をみにつけたのだろう。時おり、ネイティブ同士で会話するミーティングに私が同席する際には、この私のネイティブ上司は話すスピードを上げて、若干スラング交じりの言葉も使っているような気がする。であっても、それは雑談的な内容の話であり、私でも十分聞き取れる程度のスピードであるのだけが・・・

相手が理解できるスピードとコンテンツを心がけること、これが自分のストレスを軽減し、自分の伝えたい内容を相手に理解させるというコミュニケーションの究極の目的を、最小限の労力で達成する方法だと、賢いネイティブは理解していると私は信じている。

